

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第504集

むかい なか の だて

向中野館遺跡第7・8次 発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡調査

2007

独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
盛岡市都市整備部盛岡南整備課
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

向中野館遺跡第7・8次 発掘調査報告書

盛岡南新都市土地地区画整理事業関連遺跡調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成17年度に発掘調査された盛岡市向中野館遺跡第7・8次調査の成果をまとめたものです。

今回の調査は3回目で、遺跡の北西端を調査したことにより、全体像をつかむことができました。遺跡は、北から南へ、湿地、自然堤防状の沖積段丘、湿地、広い沖積段丘と、それぞれ東西に伸びる地形を南北に縦断する形で形成されており、北館と南館に分かれると伝えられていた中世の館跡は、南北の段丘上にあることがわかりました。今回の調査で土輪は発見されましたが、規模が小さいことから、主郭は今回の調査区の東側にあるものと推測されます。

この調査成果が、本書とともに広く活用され、考古学研究に寄与すると同時に埋蔵文化財に対する理解と関心をより深めることに役立つこと切に願う次第です。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に際し、ご援助とご協力を賜りました独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成19年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 敦 雄

例 言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割124-1ほかに所在する向中野館遺跡の第7・8次発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。
調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所および盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号はLE26-0205である。
- 4 調査回数、発掘調査期間、担当者、調査面積、委託者、遺跡略号は次の通りである。
第7次 平成17年7月15日～11月15日 八木勝枝・水上明博・藤原大輔 795m²
独立行政法人都市再生機構 OMN-05-07
第8次 平成17年7月15日～11月15日 金子昭彦 1,202m² 盛岡市 OMN-05-08
- 5 室内整理期間と担当者は、次の通りである。
第7次 平成17年11月1日～15日、12月1日～14日 八木勝枝・藤原大輔
第8次 平成17年11月1日～12月14日 金子昭彦
- 6 本報告書の執筆は、第1章は委託者が協議して、それ以外を金子が担当した。
- 7 向中野館遺跡の本調査は三回目で、第3・4次(前々回調査と呼ぶ)、第5・6次調査(前回調査と呼ぶ)に続くものである。詳細は、第II章第5図参照。
- 8 遺構名は、盛岡市教育委員会の命名方法に準拠した。略号は以下の通り、番号は三桁で付け、第5・6次調査(前回調査)からの続き番号である。
RA→竪穴住居跡、RD→土坑、RG→溝跡、RZ→その他の遺構
- 9 遺物の分析・鑑定・保存処理は、次の方々に依頼した。
石質鑑定：花崗岩研究会、炭化材樹種同定：木炭協会、樹種分析同定：古代の森研究会、昆虫・大型植物遺体分析同定：バリノ・サーヴェイ株式会社、火山灰分析：株式会社京都フィッション・トラック、鉄、木製品保存処理：岩手県立博物館
- 10 報告書作成にあたり、次の方々に御協力・御指導いただいた(敬称略)。
小林 克(秋田県埋蔵文化財センター)、室野秀文(盛岡市教育委員会)
- 11 調査成果はこれまでに現地公開資料や略報(「平成17年度発掘調査報告書」)に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。
- 12 調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 13 遺構等の平面位置は、平面直角座標第X系を利用している(座標値は第5図参照)。座標値は、世界測地系に基づく。基準杭は、当方の希望の場所に委託者に設置していただいた。
- 14 土層の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を参考にした。
- 15 凡例は、下記に示した。遺構図版内のpは土器、sは石、cは銭貨、wは木を示す。
- 16 参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している。



焼土



黄褐色土



灰・
内面黒色処理



石器スリ面

目 次

| | | |
|-----|------------------------|-----|
| I | 調査に至る経過 | 1 |
| II | 立地と環境 | 1 |
| 1 | 位置・地形・調査範囲 | 1 |
| 2 | 基本層序 | 3 |
| 3 | これまでの調査と周辺の遺跡 | 3 |
| III | 調査・整理の方法 | 5 |
| IV | 遺 構 | 9 |
| 1 | 竪穴住居跡 | 9 |
| 2 | 土 坑 | 30 |
| 3 | 柱 穴 群 | 30 |
| 4 | 溝(堀)跡 | 31 |
| 5 | 曲 輪 | 32 |
| 6 | そ の 他 | 32 |
| V | 遺 物 | 41 |
| 1 | 土師器・須恵器 | 41 |
| 2 | 石器・石製品 | 42 |
| 3 | 木 製 品 | 42 |
| 4 | 鉄 製 品 | 52 |
| 5 | 銭 貨 | 53 |
| VI | ま と め | 54 |
| VII | 自然科学的分析 | 55 |
| | 向中野館遺跡より出土した木製品と加工材の樹種 | 56 |
| | 向中野館遺跡出土の昆虫分析 | 58 |
| | 向中野館遺跡出土の大型植物遺体分析 | 60 |
| | 向中野館遺跡出土の火山灰分析 | 67 |
| | 報告書抄録 | 109 |

表 目 次

| | | |
|-----|-----------------|----|
| 第1表 | 不掲載のうち加工痕のある木製品 | 51 |
|-----|-----------------|----|

図版 目次

| | | | | | |
|------|----------------------|----|------|--------------------------------------|----|
| 第1図 | 遺跡の位置 | 2 | 第24図 | RG007・008溝跡 | 33 |
| 第2図 | 遺跡の立地 | 3 | 第25図 | RZ015曲輪(1) | 34 |
| 第3図 | 周辺の遺跡 | 4 | 第26図 | RZ015曲輪(2)・RG010溝跡 | 35 |
| 第4図 | 今回の調査範囲と周辺の地形 | 6 | 第27図 | RZ016木出土状況 | 36 |
| 第5図 | グリッドと調査次数 | 7 | 第28図 | RA013住居跡(1)出土遺物 | 37 |
| 第6図 | 遺構全体図 | 8 | 第29図 | RA013住居跡(2)・RA014住居跡(1)出土遺物 | 38 |
| 第7図 | 北北区調査状況 | 10 | 第30図 | RA014住居跡(2)・RA015住居跡、RD017～019土坑出土遺物 | 39 |
| 第8図 | 北南区・南区遺構配置図 | 11 | 第31図 | RG007・008溝跡、RZ013・014柱穴群出土遺物 | 40 |
| 第9図 | 中央区遺構配置図 | 12 | 第32図 | 土師器・須恵器(1) | 43 |
| 第10図 | 中央区カクラン状況 | 13 | 第33図 | 土師器・須恵器(2) | 44 |
| 第11図 | RA013住居跡(1) | 17 | 第34図 | 土師器・須恵器(3) | 45 |
| 第12図 | RA013住居跡(2) | 18 | 第35図 | 土師器・須恵器(4) | 46 |
| 第13図 | RA013住居跡(3) | 19 | 第36図 | 石器(1) | 47 |
| 第14図 | RA014住居跡(1) | 20 | 第37図 | 石器(2) | 48 |
| 第15図 | RA014住居跡(2) | 21 | 第38図 | 石器(3)・石製品 | 49 |
| 第16図 | RA015住居跡(1) | 22 | 第39図 | 木製品(1) | 50 |
| 第17図 | RA015住居跡(2) | 23 | 第40図 | 木製品(2) | 51 |
| 第18図 | RD012～016・019土坑 | 24 | 第41図 | 鉄製品 | 52 |
| 第19図 | RZ011柱穴群、RD011土坑 | 25 | 第42図 | 銭貨 | 53 |
| 第20図 | RZ012柱穴群 | 26 | | | |
| 第21図 | RZ013柱穴群、RD017・018土坑 | 27 | | | |
| 第22図 | RZ014柱穴群 西半 | 28 | | | |
| 第23図 | RZ014柱穴群 東半 | 29 | | | |

写真図版目次

| | | | | | |
|--------|-------------------------|----|--------|--------------------------------|-----|
| 写真図版1 | 遺跡遺景・調査区全景 | 75 | 写真図版19 | RD011土坑・RZ011～012柱穴群(1) | 93 |
| 写真図版2 | 調査前風景(北・中央区) | 76 | | | 93 |
| 写真図版3 | 調査前風景(南区)・RA013住居跡(1) | 77 | 写真図版20 | RZ011～012柱穴群(2) | 94 |
| | | 77 | 写真図版21 | RZ012柱穴群(3)・RG007溝跡(1)・RG010溝跡 | 95 |
| 写真図版4 | RA013住居跡(2) | 78 | 写真図版22 | RZ012柱穴群(4)・RG007溝跡(2)・RG008溝跡 | 96 |
| 写真図版5 | RA013住居跡(3) | 79 | 写真図版23 | RZ016木出土状況 | 97 |
| 写真図版6 | RA013住居跡(4) | 80 | 写真図版24 | 北北区 | 98 |
| 写真図版7 | RA013住居跡(5) | 81 | 写真図版25 | 中央区・北南区 | 99 |
| 写真図版8 | RA014住居跡(1) | 82 | 写真図版26 | 土師器・須恵器(1) | 100 |
| 写真図版9 | RA014住居跡(2) | 83 | 写真図版27 | 土師器・須恵器(2) | 101 |
| 写真図版10 | RA014住居跡(3) | 84 | 写真図版28 | 石器(1) | 102 |
| 写真図版11 | RA015住居跡(1) | 85 | 写真図版29 | 石器(2) | 103 |
| 写真図版12 | RA015住居跡(2) | 86 | 写真図版30 | 石器(3)・石製品 | 104 |
| 写真図版13 | RA015住居跡(3)・RD012・013土坑 | 87 | 写真図版31 | 木製品(1) | 105 |
| | | 87 | 写真図版32 | 木製品(2) | 106 |
| 写真図版14 | RD014～016土坑 | 88 | 写真図版33 | 木製品(3) | 107 |
| 写真図版15 | RD017～019土坑 | 89 | 写真図版34 | 鉄製品・銭貨 | 108 |
| 写真図版16 | RZ013柱穴群・RZ014柱穴群(1) | 90 | | | |
| 写真図版17 | RZ014柱穴群(2) | 91 | | | |
| 写真図版18 | RZ015曲輪 | 92 | | | |

I. 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。その結果、平成3年度から平成22年度までの20年間を事業予定期間とし、面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議を重ねられ、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定した上で、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業として、当埋蔵文化財センターが本調査を行っている。

本遺跡第7・8次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成17年度の事業として確立した。その内訳は、第7次調査が独立行政法人都市再生機構委託分の都市計画道路用地内795㎡を平成17年7月15日から11月15日まで、第8次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分の宅地用地内1,202㎡を、平成17年7月15日から11月15日までとなっている。

II. 立地と環境

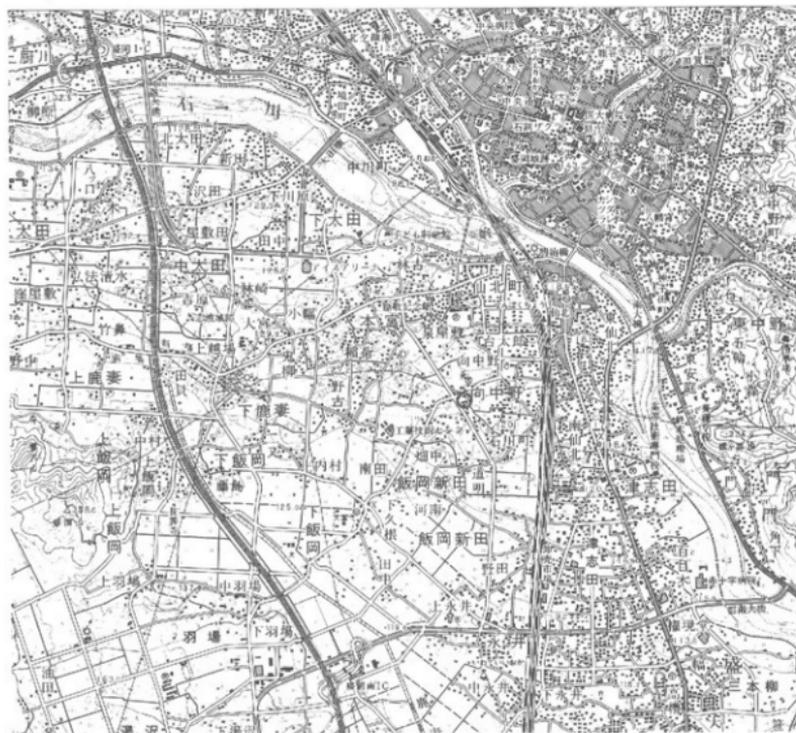
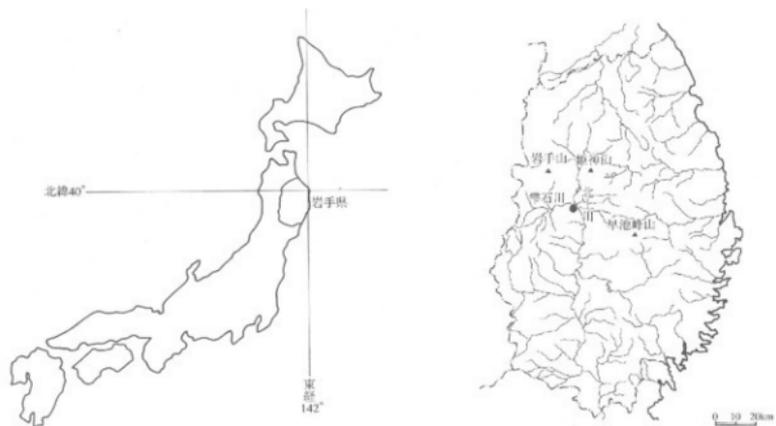
1. 位置・地形・調査範囲（第1～10図、写真図版1～3、24～25）

遺跡は、盛岡市の南西部、JR盛岡駅から南約2.5km、JR仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、平石川によって形成された沖積段丘上とその周辺の旧河道（湿地）に立地する（第1～2図）。

地形。第6図に示した北北区と北南区の境の道路に沿って、その道路から中央区の北端にかけての幅で、東西方向に自然堤防状の沖積段丘が伸びる。また、南区の南にある曲がった道路に沿って、その南側は比較的広い沖積段丘が広がる。二つの段丘の間は低地で、特に南側の段丘崖に沿って水が流れているため、この辺りは湿地になっている。自然堤防状段丘の北端にも水が流れ、その北側は湿地が広がり、台太郎遺跡まで続く（第3図）。以上をまとめると、周辺の地形は東西方向に広がり、北から南に向かって、湿地、自然堤防状の細長い段丘、湿地、広い沖積段丘と続く。遺跡は、これらの地形を南北に縦断するように立地する（第3～4図）。

広い沖積段丘上には細谷地遺跡という古代の集落跡が広がるので（第3図）、向中野館遺跡は一部重複していることになる。地形によらず曖昧な区分になっているのは、向中野館遺跡が本来中世の館跡で、北館と南館の二つからなり、その南館が、広い沖積段丘の北西端にある可能性が高いためである。

調査箇所は、これまでの調査と工事の都合で4箇所に分かれた（第6図）。遺跡の推定範囲を第6図に示したが、今回遺跡の北西端を調査し遺跡全体の様子と地形が推測できたため、北側はもう少し縮小しそうである。現況は、北北区～北南区の北端が、湿地にヒューム管を通して盛土した宅地および道路、北南区は、宅地および庭？、中央区は、西半が庭？、東半が畑、南区は湿地に厚い盛土をした道路であった（下記文献15の写真図版1参照）。



第1図 道跡の位置 (1:50,000縮図・日誌)

2. 基本層序

沖積段丘上と周囲の斜面は、以下のようになる。

I層 表土。ほとんどが盛土で、層厚20～100cm。中央区北端は、上下に分かれる（第IV章）。

II層 黒ボク土。層厚0～70cm。上面が、本来的には全ての遺構の検出面。

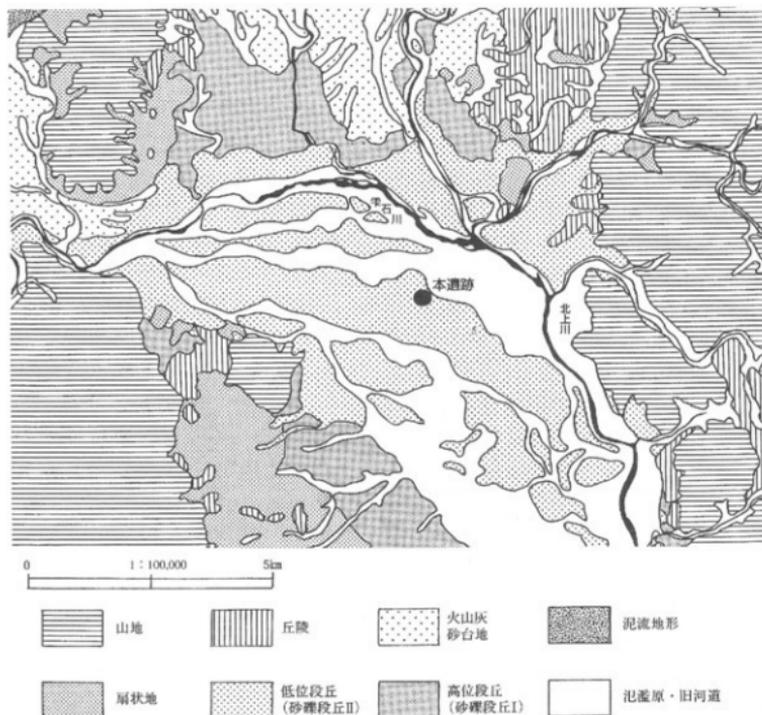
III層 II～IV層の漸移層。北南区では、RZ015の注記に示したように（第25図）、一様でない。

IV層 黄褐色土。地山。大部分の遺構の実質的検出面。

湿地は、II層が泥炭層（II LL層）、III層が灰白色粘土層（III LL層）、IV層が砂礫層（IV LL層）で、中央区東半は、元が水田なため両者の中間的な様相を示し、II L、III L層として別に示した（第IV章）。

3. これまでの調査と周辺の遺跡（第5図、第3図）

本調査は、今回で三回目になる（第5図表）。周辺の遺跡は、第3図と下記文献一覽に略記したので、詳細は文献24、33等を参照いただきたい。今回と同様ほとんどが「盛南開発」によるもので、周囲には多くの古代の集落が広がるが、中世は、本遺跡と台太郎、飯岡沢田、南仙北遺跡程度である。



第2図 遺跡の立地 (p.5文献30より)

| No. | 遺跡名 | 内容 | 文献(番号→本文中にある) | No. | 遺跡名 | 内容 | 文献 | No. | 遺跡名 | 内容 | 文献 |
|-----|-------|---------------------------------------|---|-----|------|-------------------------|---------------------|-----|------|-----------|--------------|
| 2 | 台太郎 | 縄文地層遺跡 / 古墳→平安集落→住600以上、中世→五内影の原跡、堀城 | 10, 12, 14, 17, 18, 22, 24→26 31, 37, 40, 41, 51, 53, 57, 58 | 10 | 稲荷 | 生(跡)1, 供, 跡? | 9, 32 37, 41, 53 | 1 | 向中野船 | 本番 第5区 | 34 15 |
| 3 | 観音地 | 奈良→平安集落→住跡100以上、 奈良遺跡、土器構成土坑、残文住 | 22, 23, 36, 37, 51 | 11 | 宮武 | 溝(平安) | 6, 52 53 | 16 | 鬼柳B | 古代 | |
| 4 | 観音才川 | 縄文跡し穴状遺跡 平安(安福含む)集落→住、円形回溝 | 13, 19, 21, 37 | 14 | 大宮北 | 平安集落→住2, 住状、堀、溝 | 8, 50 51, 53 | 17 | 鬼柳C | 古代 | 52(明 も会.) |
| 5 | 矢倉 | 縄文跡し穴状遺跡50部以上 平安跡跡3 | 1, 32, 34, 41, 42 | 15 | 大宮 | 古代土坑、溝 | 49, 53 | 23 | 小群 | 古代 | |
| 6 | 観音沢田 | 縄文跡跡、古墳→平安住居 古代の大規模な遺地、中世方形回溝 | 27, 28 | 16 | 野中B | 溝、平安土器器 遺跡 | 45 | 24 | 水門 | 古代 | |
| 7 | 野古A | 奈良→平安集落→住跡約800、 堀立、後、縄文土器を層した土層跡 | 9, 29, 30, 37, 51→53 | 22 | 新築塚 | 縄文野穴穴10、層穴 奈良土器→平安大塚 | 52, 53 | 25 | 上漆津A | 縄文 古代 | |
| 8 | 本宮別堂B | 縄文土坑、層穴、イノシシ彫土製品 奈良→平安集落→住跡約140、勾玉 | 2, 10, 11, 19, 20, 34 37→39 | 28 | 前田 | 縄文土坑、溝状 | 46 | 26 | 上漆津B | 縄文 古代 | |
| 9 | 本宮別堂A | 縄文跡跡中→後書集落跡 →住居、捨て堀、土溝 | 6, 8, 35, 53 | 31 | 内村 | 平安集落→住1 掘立、溝/常滑大塚 | 58 | 27 | 西田A | 古代 | |
| 12 | 小群 | 平安集落→住跡約40、円形回溝、 掘立、溝 | 3→5, 7, 14→16, 19, 53 | 32 | 二又 | 平安集落→住1、 溝 | 58 | 29 | 西田A | 古代 | 52(明 も会.) |
| 13 | 鬼柳A | 縄文跡し穴状遺跡5 奈良→平安集落 | 11, 19, 53 | 33 | 辻堂 | 住居(平安)2、 掘立、土器器環 | 48 | 30 | 中屋敷 | 古代 | |
| 19 | 南仙北 | 縄文跡し穴→平安集落→住跡、 円形回溝、中土溝 | 43, 48, 50→53 | 34 | 藤島 | 生居(古代)1 | 48 | 37 | 高柳敷1 | 古代 | |
| 20 | 赤城城跡 | 平安初期の堀跡、宮内跡 以後は、大田方八丁遺跡 | 44, 55, 56, 58→60 32, 78年から宮内跡遺跡 | 36 | 深田1 | 奈良→平安前期集落 →住10、円形回溝 | 47 | 38 | 石神 | 古代 | |
| 21 | 群 | 平安集落(住1)、掘立、溝跡 土坑、住跡(古墳)1 | 49, 52→54 | 41 | 八卦 | 生(跡)3、中1、 溝、土坑 | 49, 52 53 | 39 | 夕見 | 古代遺 跡? | 52(明 も会.) |
| 35 | 観音林跡 | 平安集落→住跡37、堀立、田内溝 遺失後から多量の位米形、円形遺 | 33, 47, 48 | 42 | 太田田中 | 土層跡跡 (文脈では田中遺跡) | 46 | 40 | 向中野船 | 古代 | |



第3図 周辺の遺跡 (1:25,000盗回・小岩井農場)
(盗回遺跡地図(2000年度)〔盗回市教育委員会2000〕より作成)

・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書(年は西暦下二桁)

凡例 → 『○○道路第○次発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第○集
 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成○年度分)』 * (※12年度から「分」とれる)
 『平成○年度発掘調査報告書』

| No. | 番号(略) | 年 | 集数 |
|-----|-----------------|----|-----|
| 1 | 矢部・第1次 | 94 | 205 |
| 2 | 本宮稲妻石・第1次 | 95 | 226 |
| 3 | 小柳・第2次 | 96 | 244 |
| 4 | 晴報(平成7年度) | 96 | 246 |
| 5 | 小柳・第3次 | 96 | 265 |
| 6 | 晴報(平成8年度) | 97 | 266 |
| 7 | 小柳・第5次・第7次 | 98 | 267 |
| 8 | 大宮北・小宮稲妻石 | 98 | 281 |
| 9 | 地蔵(千原7年度) | 98 | 282 |
| 10 | 霞堂第3次・台太田16次 | 99 | 293 |
| 11 | 霞堂第4次・遊峰第4次 | 99 | 308 |
| 12 | 倉太田・第15次 | 99 | 309 |
| 13 | 晴報(平成10年度) | 99 | 311 |
| 14 | 向中野4・小橋11・台太田19 | 00 | 321 |

| No. | 番号(略) | 年 | 集数 |
|-----|--------------|----|-----|
| 15 | 霞中野第3次・小柳10次 | 00 | 338 |
| 16 | 晴報(平成11年度) | 00 | 340 |
| 17 | 台太田・第22次 | 01 | 365 |
| 18 | 台太郎・第18次 | 01 | 369 |
| 19 | 晴報(平成12年度) | 01 | 370 |
| 20 | 稲堂目・第10次 | 02 | 377 |
| 21 | 笹岡才助・第3次 | 02 | 393 |
| 22 | 晴報(平成13年度) | 02 | 397 |
| 23 | 藤谷寺・第4・5次 | 02 | 414 |
| 24 | 倉太郎・第23次 | 03 | 415 |
| 25 | 台太田・第26次 | 02 | 416 |
| 26 | 倉太郎・第35次 | 03 | 417 |
| 27 | 魚沼田・第3次 | 03 | 418 |
| 28 | 飯沼田・第3次 | 03 | 419 |

| No. | 番号(略) | 年 | 集数 |
|-----|----------------|----|-----|
| 29 | 野六八・第13次 | 03 | 420 |
| 30 | 野古八・第13次 | 03 | 421 |
| 31 | 台太郎・第44次 | 03 | 422 |
| 32 | 晴報(平成14年度) | 03 | 423 |
| 33 | 飯沼田第2 | 04 | 427 |
| 34 | 矢部3次・稲堂目14次 | 04 | 431 |
| 35 | 本宮稲妻石・第17次 | 04 | 433 |
| 36 | 藤谷寺・第3次 | 04 | 434 |
| 37 | 晴報(平成15年度) | 04 | 455 |
| 38 | 本宮稲妻石・第18次 | 05 | 458 |
| 39 | 本宮稲妻石13・15・20次 | 04 | 467 |
| 40 | 台太田・第51次 | 05 | 468 |
| 41 | 平成16年度 | 05 | 469 |
| 42 | 矢部・第6次 | 05 | 488 |

・岩手県教育委員会発行報告書

- 43) 1979年『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第35集
 44) 1982年『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ』岩手県文化財調査報告書第68集
 45) 1990年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告書第86集
 46) 1991年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第90集
 47) 1992年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告書第91集
 48) 1993年『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成4年度)』岩手県文化財調査報告書第93集

・盛岡市教育委員会発行報告書

『盛岡市埋蔵文化財調査年報—○年度—』

| No. | 番号(略) | 年 |
|-----|------------|------|
| 49 | 一堀町35・58年度 | 1985 |
| 50 | 一堀町59年度 | 1986 |
| 51 | 一堀町60・61年度 | 1987 |
| 52 | 昭和62年度 | 1989 |
| 53 | 平成5・6年度 | 1999 |

『盛岡市内遺跡群—○調査機関—』

| No. | 番号(略) | 年 |
|-----|----------------------|------|
| 54 | —平成10年度発掘調査機関— | 1999 |
| 55 | —平成11年度発掘調査機関— | 2000 |
| 56 | —平成12年度発掘調査機関— | 2001 |
| 57 | —平成13年度発掘調査機関— | 2002 |
| 58 | 平成13年度・平成16年度発掘調査機関— | 2005 |

『紫波城跡—○○年度発掘調査機関—』

| No. | 番号(略) | 年 |
|-----|------------|------|
| 59 | 平成8・9・10年度 | 1999 |
| 60 | 平成11—14年度 | 2005 |

※54の番号は、『盛岡市遺跡群』

Ⅲ. 調査・整理の方法

整理の方針・方法については、金子(1998)参照。遺構名は、盛岡市教育委員会に準じ、凡例とともに、例示に示した。グリッドも、盛岡市に準じた(第5図)。

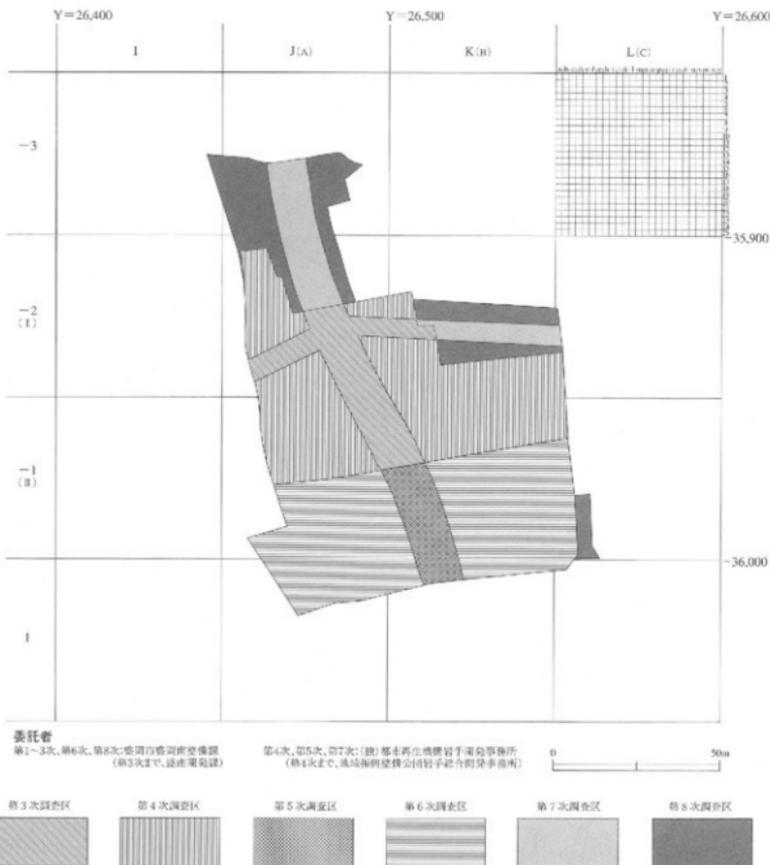
調査経過。北北区以外は、調査前に“上物”は全て撤去。7月15日道路付替で急ぐため北南区から調査開始。7月19日安全柵を設置し、そのまま重機で表土剥ぎ。8月2日委託者と県教委で終了確認し、道路部分のみ8月22日以降明け渡し。8月8～10日中央区、南区重機による表土剥ぎ。9月1日北南区の調査終了。暑い夏で、堀の掘削等に悪影響を及ぼした。南区と中央区の検出に入ったが、南区は湧水ひどく、毎日ポンプで水くみ。中央区も、東端は水につかりやすく抜けにくいため、しばしばポンプで水くみをした。南区は、9月中に終了したが、木の取り上げは10月22日の現地公開後に。中央区は、最後まで継続し、途中、住居移転の終わった北北区も併行して調査を開始、10月7日に試掘、重機による表土剥ぎを11～18日まで行ったが、水道管を切ってしまったため、現道下は水道管移設後に調査することになった。泥炭層にトレンチを入れた結果ほとんど何も出土しなかったが、一部のトレンチから土器片が出土したため、予定通り現道下まで調査することになり、その重機表土剥ぎを10月31日～11月1日に行った。温暖小雨の秋で作業は順調にはかどったが、11月6日以降急激に変わり、連日時雨で作業に支障を来し、終了確認は11月7日に済んだが、調査終了は予定の11日をすぎて15日までかかった。調査の遅れは、当初新しいと考えていた中央区の柱穴群が中世まで遡ると10月5日になってわかり、それから並びなどを考え始めて出遅れた点も大きい。

参考文献

金子昭彦 1998 「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』XⅦ (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



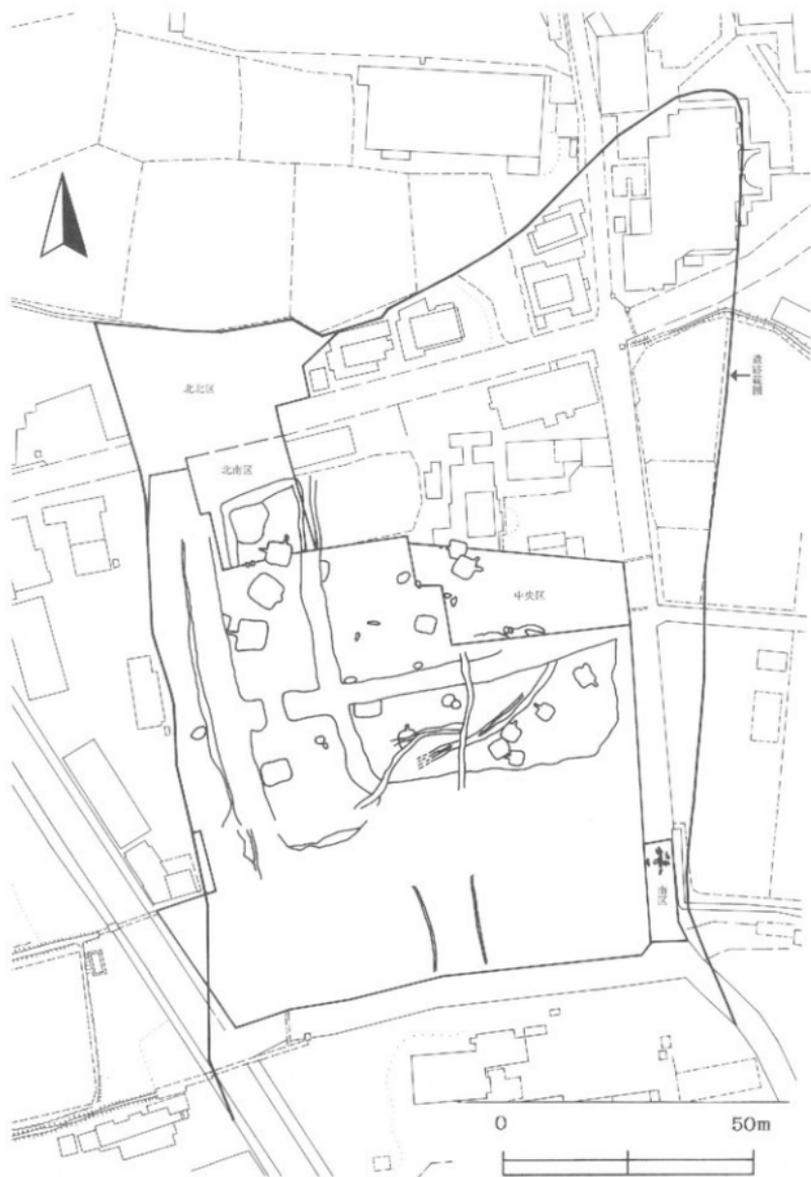
第4図 今回の調査範囲と周辺の地形



| 次 | 委託者 | 面積 | 調査機関 | 調査期間 | 遺構 | 遺物 | 報告書 | 備考 |
|---|------|-------|------------|----------------|---|---|-----|---------------------------|
| 1 | 盛岡市 | 991 | 盛岡市教委 | 95.09.25～09.29 | 住居ほか | | | 試掘調査 |
| 2 | 〃 | 110 | 〃 | 96.11.14～11.15 | 住居ほか | | | 試掘調査 |
| 3 | 〃 | 2,944 | 当課蔵文化財センター | 98.05.21～08.31 | 平安→住居12、土坑、溝 中世→掘跡3 *6以上のカマドを持つ住居 | 縄文土器片、石炭 土師器、須恵器 | 下の1 | 一体調査 |
| 4 | 公団 | 911 | | 98.07.01～09.04 | *扉の伸びる方向に平安→北館の構造に目安がつく | | 下の2 | |
| 5 | 都市機構 | 467 | | 04.07.15～10.08 | 平安→土柱1、帯状継ぎ集束部 | 土師、須恵器(9c後半主) | | |
| 6 | 盛岡市 | 3,074 | 〃 | 04.06.07～10.08 | 遺物包含層 中世→掘跡つづき、柱穴状土坑 | 墨吉、刺吉土器、封蔵木筒、漆器、曲物、箸等の木製品、モモ等の種実、甲虫類の昆虫 | 下の3 | 一体調査 *本著作成時、報告書未刊→詳細不明 |
| 7 | 都市機構 | 795 | 〃 | 05.07.15～11.15 | *平安集落のつづき→住居1、土坑 | 土師器、須恵器、不明鉄製品 | | |
| 8 | 盛岡市 | 1,202 | 〃 | 05.07.15～11.15 | *北館の構造に目安がついた | 中世の木製置?、木炭通室 | 本書 | 一体調査 |

1) 2000「向中野館跡第4次・小堀遺跡第11次・寺土館遺跡第10次発掘調査報告書」財団法人盛岡市蔵文化財調査報告書第321集
 2) 2000「向中野館跡第3次・小堀遺跡第10次発掘調査報告書」財団法人盛岡市蔵文化財調査報告書第323集
 3) 2007「向中野館跡第5次・第6次発掘調査報告書」財団法人盛岡市蔵文化財調査報告書第363集

第5図 グリッドと調査次数



第6図 遺構全体図

IV. 遺 構

縄文時代の袋状土坑1基、平安時代の堅穴住居跡3棟、古代の土坑6基、柱穴群1、木の集中箇所1箇所、古代以降の土坑1基、中世の土輪1箇所、溝(堀)跡4条、土坑1基、柱穴群2、中～近世の柱穴群1が確認された(第6～9図)。調査区は4箇所に分かれ、地形も異なる(第II章参照)。

以下、調査区ごとに、地形等の概要を述べる。調査は、北南区→南区→中央区→北北区の順に行い、北南区は先に終了して工事に入ったが、他は一部併行し、中央区が最後まで残った。なお、**平面図と断面図の照合は、現地で行っており、どうしても合わない場合は、本文にその旨を記している。**

<北北区>全体が湿地で泥炭層が確認され、トレンチを入れただけである(第6～7図、写真図版24)。表土(盛土)は120～70cm、その下泥炭層(ⅡLL層)の下は、暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土層(ⅢLL層)、泥炭層は、50～130cmで、場所によってマチマチであり、所々水が流れた跡(砂～砂礫層)が入る。トレンチ2や5から出土した土器片も(第35図40)、砂層からで、流れ込みであろう。なお、調査は、現道下水道管施設の關係で、現道下のみ後で別に調査している(第7図)。

<北南区>北側の土輪下は、北北区と同じ。南斜面は、20cm程度ではあるがⅡ層も残っていた。

<中央区>カクラン・削平が著しく、住居跡が確認されたあたりしかⅡ層は残っておらず、特に南西端では表土約20cm下は黄褐色土といった状況である。逆に、住居付近は、盛り土されていたためⅡ層が50cm前後と厚く、元の表土も残っており(Ⅰ下層=10YR3/1黒褐色シルト炭化物含む)、この辺りの柱穴の覆土は、皆この表土である。東半は、水田跡で、湿地だったせいか暗渠や井戸も確認され(第10図、写真図版25)、表土は、厚さ70～80cmの畑耕作土の下が、20～40cmの盛り土砂礫層、その下はⅡL層(N3暗灰色砂質シルト)が10～25cm、その下が地山でⅢL層(7.5Y5/1灰色砂層)層厚不明。

<南区>湿地で、基本的には北北区と同じだが、表土が道路造成時のガラで80～100cm、その下は泥炭層(ⅡLL層)で0～110cm、その下は粘土層(ⅢLL層)で0～40cm、地山は砂礫層(ⅣLL層)で湧水あり、層厚不明。Ⅱ～ⅢLL層は、北に行くほど厚く、南端付近は表土下砂礫層といった状態。

1. 堅穴住居跡(第11～17図、第28～30図、写真図版3～13、28～30)

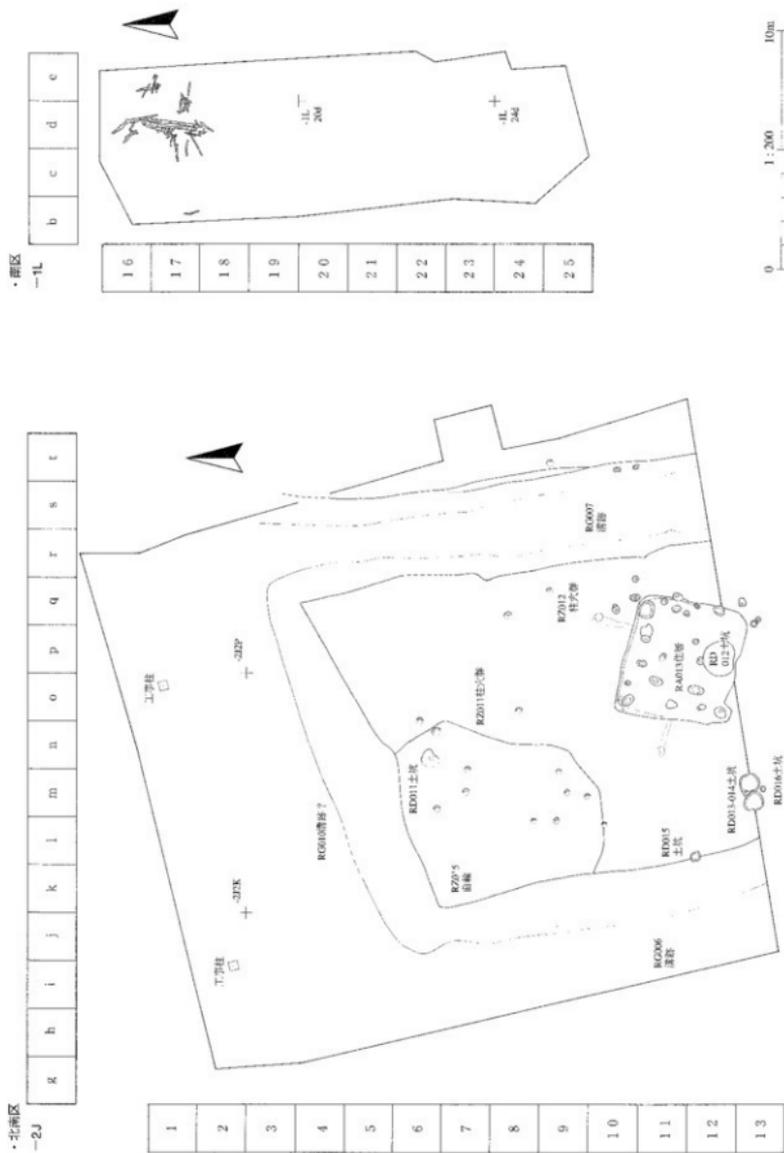
3棟検出され、何れも平安時代(9世紀中～10世紀初頭)だが、それぞれ時期は異なるようだ。北南区のR A 013住居床面から、火山灰とともに焼けた初穀(起源のプラント・オパール)が出土し、中央区のR A 014、015では、カマド近くの土坑から完形の甕が出土しカマド祭祀跡の可能性がある。

R A 013住居跡(第11～13図、第28～29図、写真図版3～7、28～30)

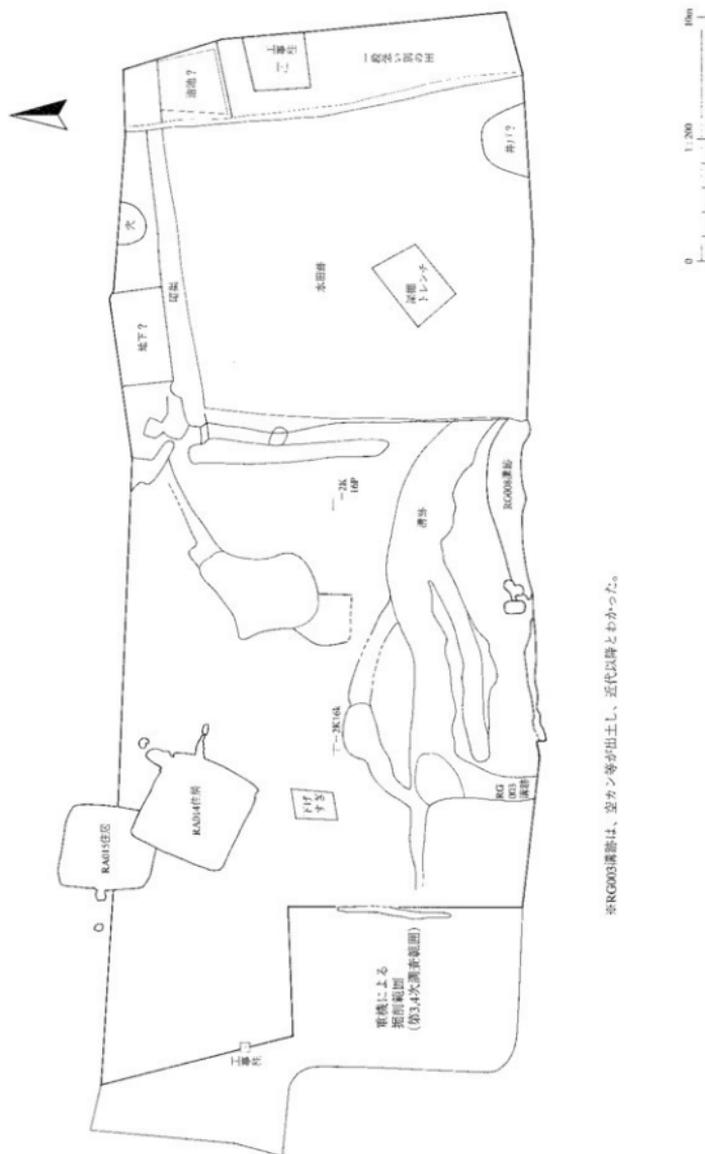
<位置・検出状況>北南区中央南端。-2 J 10-13 q グリッド。一部前々回の調査区に入る。東西に伸びる自然堤防状段丘の南斜面に立地。重機での表土剥ぎ中、黒土で明確に検出。<精査状況・図>斜面に立地しているのに上方の掘削が浅く、また地山が波打っており(掘り方の項参照)、さらに下方に土坑が重複していて、床面を特定するのが難しく、かなり掘りすぎってしまった(第13図上)。黄褐色土(Ⅳ層)を床とするのは、斜面上方の僅かな部分しかなかったためもある。図、火山灰と焼土の分布範囲(C-C')、断ち割り後写真撮影でクリーニングしたため、平面図の範囲と若干合わない。北カマド脇土坑(D-D')、完掘時掘りすぎたため断面図と平面図合わない。北カマド、西カマド、E'、F'、G' 側の焼土(焚き口)の上場、検出時不明瞭だったため合わない。棚状施設



第7図 北北区調査状況



第8図 北南区・南区透視配置図



※RGO03溝跡は、空カン等が出土し、近代以降とわかった。

第10図 中央区カクラン状況

(I-I'), 高低差大きくて認識の違いがあり、さらに掘りすぎて断面図と平面図合わない。〈重複〉斜面下方床下に縄文時代のR D012土坑がある。しかし、覆土がⅡ層とほとんど変わらないため(大きなⅣ層ブロック含むが)、住居の覆土、床とも明確に区別できず、重複関係が確定したのは、住居を床面まで下げR D012土坑を半載した後である。また、柱穴としたものにも、R Z 011~012柱穴群に含まれるものがあるかも知れないが、区別できない。〈覆土・堆積状況〉Ⅱ層再堆積の黒土で、単層に近く、斜面下方では床面ともはっきり区別できない。覆土中に不明瞭な焼土や炭化物のブロックが検出され(Q 4=南東区画出土の炭化材はケヤキと同定)、焼失住居の可能性もある。不明瞭なのは、焼けたのが黒土のせい。西カマド付近から南西隅にかけての床面には、火山灰状のものとそれが焼けたものが確認された。違和感を持ちながらも火山灰として鑑定を委託した結果、起源のプラント・オーバーが主体を占めていることが判明した(第Ⅷ章参照)。〈平面形・規模〉約4.1×3.9mの隅丸長方形。〈壁・床・掘り方〉壁は、斜面上方の僅かな部分だけ黄褐色土(Ⅳ層)で、他はⅡ~Ⅲ層、下方は流出して、ない。床は、斜面上方の僅かな部分だけ黄褐色土(Ⅳ層)で、その下方住居中央付近は黒土(Ⅱ~Ⅲ層)上に黄褐色土を貼っている。さらにその下方は、貼床が流出したのか、黒土のままである。掘り方は、中央付近を除いて周囲に□状に認められるが、斜面上方は溝状(深さ15~20cm)、下方はしばしば見られる凹凸の著しい“うねうね掘り方”である。掘り方を露出させると、斜面上方は黄褐色土(Ⅳ層)、中央はⅡ~Ⅲ層、下方はⅣ層であった(第13図下)。これは、南西から北東へ帯状に延びる。〈柱穴〉第11図①~④は、頭抜けて深く、規格も比較的似かよっており、主柱穴を構成する可能性が高いが、③と④は壑穴からはみ出してしまっている。②は掘り方も明確に持つ。⑤と⑥と北カマド脇土坑も位置や規格が比較的似ているが、南西隅にはないし、北カマド脇土坑を柱穴とするには躊躇する。その他にも多くの小穴が確認され、住居の周囲にも広がるが、住居内のもも含め、これらはR Z 011~012柱穴群に帰属する可能性を捨てきれない。覆土で区別することは難しく、①~④も同様で、基本的には黒色土(Ⅱ層)の再堆積に黄褐色土(Ⅳ)のブロックを含むものである。なお、北西隅に僅かながら周溝が確認された(深さ約5cm以下)。〈カマド〉北側と西側に確認された。北カマドは、煙道と煙出を縁取るように赤く強く焼けており、またその上の礫も赤く焼けていて(第11図、写真図版4)、明確に確認された。袖はほとんど残っていないが、焚き口はしっかりと焼けており(柱穴に切られている)、くり抜き式の煙道は急角度で下がり(斜面のせい)、煙出下部の覆土中には礫や土器が比較的多く出土した。西カマドの煙出は、黒土中にあるせい(Ⅱ~Ⅲ層)、北カマドほど明確には検出されなかった。焚き口も、周囲の覆土中に焼土が見られ、また床も黒土中であって焼土粒が散るため、検出できたのは“火山灰”を取り除いた後のことであり、焚き口自体もあまり焼けておらず、焼土範囲もなかなか確定できなかった(第11図の二重線)。この焚き口の周囲からは同じ土器の破片が比較的多く出土した(No.7)。くり抜き式で、袖はほとんど残っていない。二つのカマドの新旧関係を判断する材料はないが、北カマドを切る柱穴が本住居に帰属すると仮定し、煙出の中の土器の出土状況から判断すれば、北カマドの方が古いと言えるかも知れない。〈その他の付属施設〉北カマドの西側に土坑、西カマドの北側に棚状施設がある。土坑は、次項に示すように遺物が比較的多く出土したが、掘り方中に掘り込まれていたため掘りすぎてしまった。棚状施設は、壁に洞窟状に掘り込まれたもので(I-I'), 黄褐色土中に黒土と、明確に検出された。

〈出土遺物〉(出土状況)遺物は、北カマド脇土坑からは比較的多く出土したが、基本的に覆土上部~床面に散在する形で出土した(第11、13図、写真図版5~7)。明確に帰属と言える遺物はないが、土器のNo.3、4、9は、それに近い。土器のNo.3(第28図1)、4(同2)は、床に伏せた状態で出土。No.5(同3)と6(同4)は、北カマド脇土坑の検出面から覆土中位にかけて10×5cmの同じくらいのバラバラの破片が傾斜するような状態で出土(第11、13図、写真図版6)。No.

7は西カマド焼き口直上付近(第11図)、No.9(同5)は北カマド脇土坑の底近くから底を上にした形で出土。鉄製品のNo.1は、焼土すぐ横の覆土上部から「立つような」状態で出土(写真図版5)。No.2は、柱穴上の覆土下部、No.8は、土器No.9の横から水平の状態で出土した(調査時手違いで欠損)。第28図11の砥石は、この隣から出土。(遺物)第28~29図、写真図版28~30に示した土師器・須恵器、石器、鉄製品が出土した。このほかに、須恵器約136g、土師器約2,830g出土。
 <時期・所見>出土土器から、平安時代(9世紀後半~10世紀初頭)の可能性が高い。初穀起源のプラント・オパールを検出、棚状施設、今回の調査でここだけの鉄製品など、特徴的な住居である。

R A014住居跡(第14~15図、第29~30図、写真図版8~10、28~30)

<位置・検出状況>中央区北西寄り。-2 K11i~14jグリッド。東西に伸びる自然堤防状段丘の南側に隣接(掘野?)。ジョレンでの検出作業中に確認。南側は、黄褐色土(IV層)まで削平されていたので明確に確認できた。北側は黒土(II層)が残っていたのでややわかりづらかったが、上面でプランははっきり確認できた。<精査状況・図>当初、北東隅に黄褐色土を主体とする土坑が重複しているのかと思ったが、同僚の指摘で掘る前にカマドとわかった。二つのカマドの間に土坑があるのは、北カマドを断ち割った際に初めて気づいた。覆土断面(B-B')のB'側の上場、完掘時崩れたせいか合わない。柱穴(C-C')のC側の上場、土坑(D-D')のD側の上場、完掘時掘り広がったため合わない。北カマド、調査終盤で余裕がなく、G'のセクション・ポイント照合できなかつたため合わない。他の上、下場も微妙にずれている。平面図の焼土が断面図に表れていないのは、断ち割った結果しっかりした焼土でなかったため(14層に紛れた)。<重複>北西隅R A015住居と重複し、R A014住の方が新しい。R A015住居が特徴的な覆土で、上面で明確に分かった。その他、R Z014柱穴群に掘り込まれている。調査時にカクランと判断したもの(「カマド横礎石」も。「カマド2集石」も?)や小さな柱穴状の落ち込みは、皆これと思われる。<覆土・堆積状況>浅いせい、ほぼ単層に近い。II層再堆積土(黒土)にIV層(黄褐色土)ブロックを含んだ土。<平面形・規模>4.1×3.9mの隅丸方形。<壁・床・掘り方>壁は、北側II~III層、南側III~IV層。床は全面IV層を貼ったもの。掘り方は、全体に細かな凹凸が広がるが、北東隅は深さ5~15cmの溝状である(第14図中央)。<柱穴>C-C'の小穴が相当する可能性もあるが、はっきりしない。他の小穴はR Z014柱穴群の可能性が高い。<カマド>北と東に認められ、残存状況から北が新しい。北カマドは、北東隅に付き、掘り込み式で、袖の芯に礎と土器をドーム状に並べて(側面の礎は立てている)、袖から煙道、さらには煙出の一部まで黄褐色土でドーム状に覆った立派なものである。煙道は、焼き口からほぼ水平に伸び、無出部分で柱穴状に落ち込んでいる。この煙道は掘り方を持ち、こちらは煙出に向かって下がっていく。このことから、本カマドは元々くり抜き式で作るつもりで煙道を掘っていたが、天井がII~III層を中心とする土で脆く崩れてしまったため、掘り込み式に変更したのではないかと推測される。住居掘り方埋土上に焼き口があるためか、焼土はあまり顕著に形成されていないが、周囲の礎は火を受けて赤くなっているものがある(第15図右側図の南東隅の大きな一つとその内側の小さな二つ)。カマドNo.7の土器(第15図)は、底が逆さになっていて支脚かと思っただけ、火を受けておらず、カマド芯材であろう。東カマドは、煙道と煙出しが残っておらず、焼き口部分には、R Z014の柱穴(カクラン)があり、なおかつ下に掘り方があるせい、焼土は検出されなかった。断面図を見ると、一応くり抜き式のようなものである。<その他の付属施設>東カマドの焼き口付近~住居の東外にかけて、床下土坑が検出された。床では検出できず、北カマドの袖断ち削りの際に落ち込みを確認し(第15図)、完掘後浅い(床から25cm以下)土坑が検出された。底の北側から完形の土師器坏が出土した。

<出土遺物>(出土状況)遺物の出土は少なく、土器は北カマドの袖に使われていたものが主であ

る(誤って、住居覆土中とカマド中の番号は、別々に付けてしまった。覆土にNo.1～3、カマドは1～7がある。第14～15図)。覆土No.1と2は、床直(2層中?)で、1は二つの坏(a、b)が入れ子状に重なって出土した(写真図版10)。No.3は、砥石で、床面から掘り方にめり込むような形で出土。(遺物)第29～30図、写真図版28～30の土師器・須恵器、石器が出土した。14、16の刻書土盤2点が注目される。この他に、土師器約569g、須恵器約153g出土している。

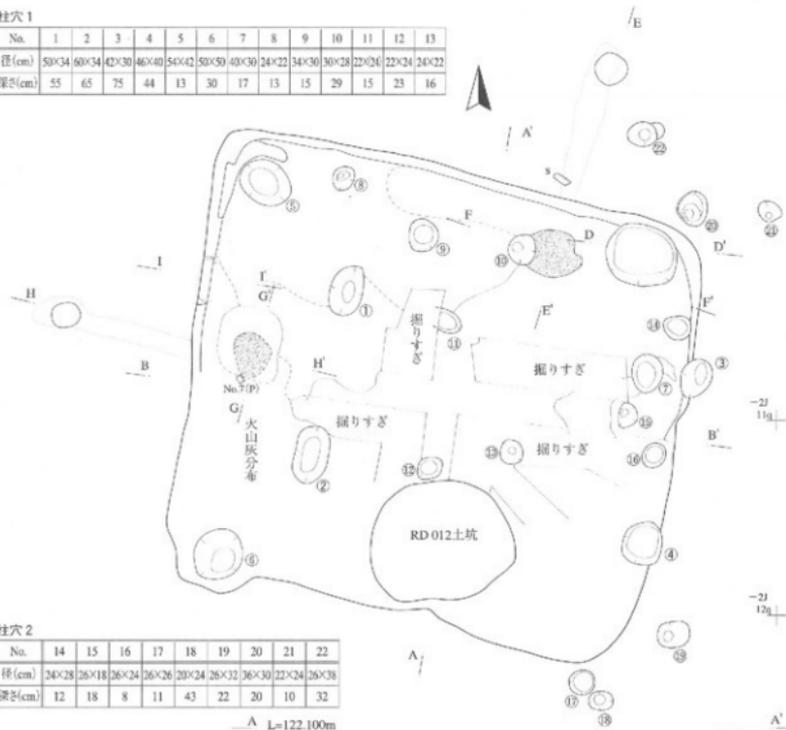
<時期・所見>出土土器から、平安時代(10世紀初頭前後)の可能性が高い。カマド下土坑の完形の坏は、RA015住居にも見られ、カマド祭祀の跡の可能性もある。

RA015住居跡(第16～17図、第30図、写真図版11～13)

<位置・検出状況>中央区北西寄り。-2K10g-12iグリッド。大部分が来年度の調査区に入るが、別々に調査すると不都合が多いということで拡張して今年度まとめて調査した。東西に伸びる自然堤防状段丘の南側に立地。RA014住居検出中に確認。RA015住居は、特徴的な覆土のため明確に検出。中央区の大部分が削平されてⅡ～Ⅲ層が残っていなかったため、本住居は調査区域にあってⅡ～Ⅲ層が残っているにもかかわらず一緒に削平してしまった。カマド袖部分は、その際に壊してしまい焼土が露出していた。<精査状況・図>精査を始める前に、北側を拡張しⅡ層上面よりやや下まで下げてプランを確認したが、検出面がⅡ層(黒土)のためか、煙出を検出することはできなかった。しかし、調査の終盤で日程に余裕がないため見切り発車で精査を開始した。煙出を確認することができたのは、煙道を長めに断ち割った後クリーニングして見えやすい状態になってからである。また、このころ連日のように時雨れ、カマド脇土坑が冠水を繰り返し調査に支障を来した。覆土断面(A-A')、ベルトを外す前に焼土を認識できなかったで合わない。カマド、高低差あるため平面図と合わないが、図面を点検する余裕がなかったため訂正できていない(特にF側半分)。<重複>南東隅RA014住居と重複し本住居の方が古い。本住居が特徴的な覆土で明確に分かった。その他、R2014柱穴群に掘り込まれている。調査時にカクランと判断したものは、これと思われる。<覆土・堆積状況>上層にはⅡ層再堆積土(黒土)にⅣ層(黄褐色土)ブロックを斑に含んだ特徴的な土が広がり(1層)、下層にはⅡ層再堆積土が広がる。下部に焼土が検出されたが(第16図)、黒土中のため不明瞭で、炭化材も検出されていない。厚さ3cm以下。<平面形・規模>3.7×3.3mの隅丸方形。<壁・床・掘り方>壁は、北側Ⅱ～Ⅲ層、南側は重機で削平してしまったため、ない。床は全面Ⅳ層を貼ったもの。掘り方は、全体に細かな凹凸が広がる。<柱穴>北側に三つ小穴が並んで検出されたが、どれも15cm以下と浅く柱穴とは考えにくい。覆土は、住居覆土の2層とほとんど同じで、掘り方埋土より全体に黒くⅣ層ブロック少ない。中央の小穴は焼土を切っている。掘り方まで下げた後にも柱穴は確認できなかった。<カマド>東壁中央にある。前述のようになかなか煙出は確認できなかったが、西側に掘り広げていったら、煙出にはⅣ層ブロック多くあり、はっきり掘れた。軸がずれてしまったので、断面図とは別にエレベーション図を掲載したが、煙道の中心からずれて南側に焚き口焼土がある。落着いているのか(第17図9、10層)、不明瞭だが、くり抜き式のように、煙道は、焚き口から煙出に向かって、第17図の火を受けているあたりまでⅢ層下部で、それより西がⅣ層中にある。煙道の入口付近の底は、黒土中にも関わらず焼土を形成するくらい焼けている。焚き口もよく焼けてしっかりした焼土が形成されているが、袖は、重機で壊してしまったせいほとんど残っていない。残存状況から判断するとRA014住北カマドと同様のように、北側に残った障は全く火を受けていない。前述のように焼土が見られ、カマド焚き口の可能性を考え、その延長上の壁をよく見たが、どれもきれいなⅢ層で、認められなかった。<その他の付属施設>カマドの焚き口の北側に、床下土坑が検出された。柱穴検出時に落ち込みを確認し(第16図C-C' 1層)、底まで掘り下げたところ、1層とそれ以下の土が大きく異なることが分かり、下層

柱穴 1

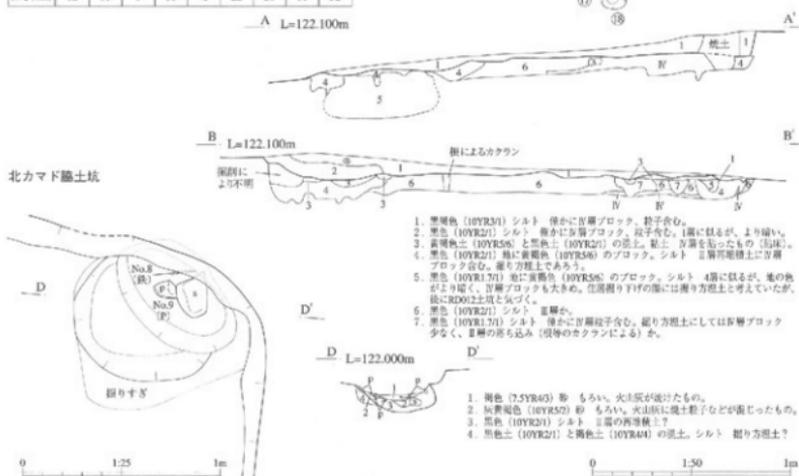
| No. | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径(cm) | 50×34 | 60×34 | 42×30 | 46×40 | 50×42 | 50×50 | 40×30 | 24×22 | 34×30 | 30×28 | 22×24 | 22×24 | 24×22 |
| 深さ(cm) | 55 | 65 | 75 | 44 | 13 | 30 | 17 | 13 | 15 | 29 | 15 | 23 | 16 |



柱穴 2

| No. | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 径(cm) | 24×28 | 26×18 | 26×24 | 26×26 | 20×24 | 26×32 | 26×30 | 22×24 | 26×38 |
| 深さ(cm) | 12 | 18 | 8 | 11 | 43 | 22 | 20 | 10 | 32 |

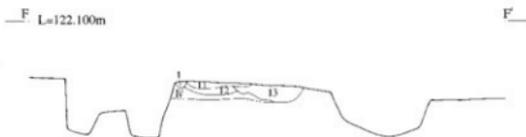
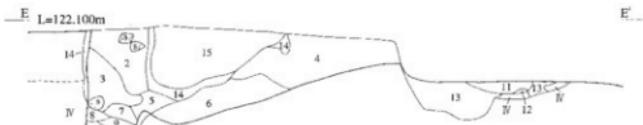
A L=122.100m



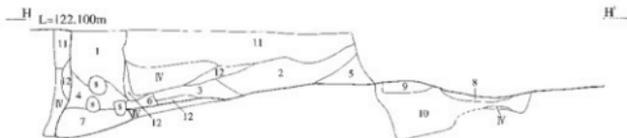
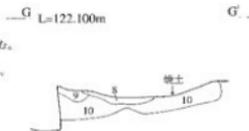
北カマド土坑

1. 黒褐色 (10YR2/1) シルト 壁かに苔藓ブロック、砂子含む。1層に似るが、より細かい。
2. 黒色 (10YR2/1) シルト 壁かに苔藓ブロック、砂子含む。1層に似るが、より細かい。
3. 黒褐色 (10YR5/5) 土黒色土 (10YR2/1) の粘土。壁に、苔藓を貼ったもの (5) 層。
4. 黒色 (10YR2/1) 壁に苔藓色 (10YR5/5) のブロック。シルト。2層に似るが、苔藓ブロック含む。壁の方柱上であろう。
5. 黒色 (10YR1/1) 壁に黒褐色 (10YR5/5) のブロック。シルト。4層に似るが、地の色がより暗く、苔藓ブロックも大きい。北西隅より下の壁には薔薇方柱土とせうていたが、後にRD012土坑と気づく。
6. 黒色 (10YR1/1) シルト。壁壁。
7. 黒色 (10YR1/1) シルト 壁かに苔藓砂子含む。薔薇方柱土としては苔藓ブロック少なく、壁の落ち込み (段等のカクランによる) が。

第11図 RA013住居跡 (1)



1. 黒色 (10YR2/1) シルト もろい。根によるキクラシ。
2. 黒褐色 (10YR3/1) 地に黒褐色に黄褐色土 (10YR4/4) 混じる。シルト もろい。IV層ブロック多く、礫を含む。別の層した土?
3. 褐色 (10YR4/4) 地に薄層状に黒褐色土 (10YR3/1) 混じる。シルト もろい。IV層ブロック、粘土赤帯に多く、礫を含む。層の厚した土?
4. 黒褐色 (10YR3/1) 地に赤褐色 (5YR4/6) のブロック含む。シルト 焼土ブロック (厚3~7cm)。
5. 黒褐色 (5YR3/1) 地に暗赤褐色 (5YR3/4) のブロック含む。シルト もろい。焼土ブロック多く含む。燧石天井が脱落したもの。
6. 黒褐色 (10YR3/1) シルト ややもろい。粘性ややあり。3cm次の焼土ブロック多く、2cm人のIV層ブロック含む。
7. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 非常にもろい。6層と同じようである。
8. 黄褐色 (10YR6/4) と黒褐色土 (10YR3/1) と赤褐色土 (5YR3/4) の混土。シルト 非常にもろい。粘性あり。
9. 黄褐色 (10YR6/6) 粘土 IV層ブロック。
10. 黒色 (5YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) のブロック。シルト 粘性強い。IV層ブロック含む。
11. 褐色 (5YR4/1) 砂質シルト 焼土
12. 黒褐色 (5YR3/4) シルト 熱によって層層が硬化したもの。
13. 黒褐色 (10YR3/1) 地に暗褐色に黄褐色 (10YR5/6) のブロック。シルト 硬く締まる。掘り方層土。
14. 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘土 IV層が熱によって変化したもの。
15. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土 硬く締まる。濁っているがIV層上部らしい。



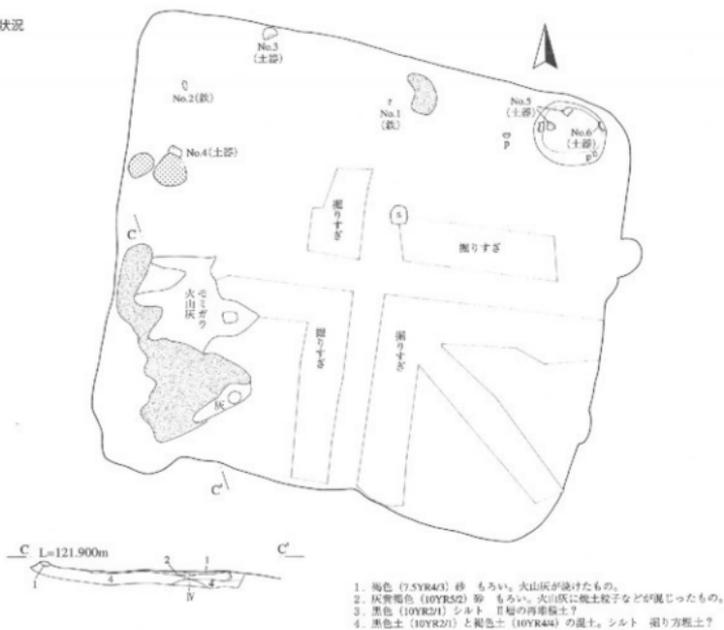
1. 黒色 (10YR2/1) シルト ややもろい。IV層粒子含む。
2. 黒色 (10YR2/1) 地におい赤褐色 (5YR4/4) のブロック。シルト 1cm~4cm次の焼土ブロック含む。焼土ブロック含むだけで、1層とはほとんど同じ。
3. 黒褐色 (10YR3/1) シルト もろい部分あり。IV層 (11層) ブロック多く含む。
4. 黒褐色 (10YR3/1) シルト ややもろい。IV層 (11層) の再凍結か。
5. 黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子多く、幾十粒含む。
6. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘土。12層が脱落したもの。
7. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性強い。底に焼土ブロック含む。
8. 赤褐色 (5YR4/6) シルト 硬く締まる。粘土。
9. 褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト 硬く締まる。上面に焼土粒散る。足床。
10. 黒褐色 (10YR3/1) 地に薄層状に黄褐色 (10YR5/6) のブロック入る。粘土質シルト 硬く締まる。柱掘り方層土。
11. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 硬く締まる。一樣で、通常のIV層と異なるが、IV層に相当すると思われる。
12. 褐色 (7.5YR4/3) 粘土 ややもろい。IV層が熱によって変化したもの。

1. 黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子散る。炭化物僅かに含む。

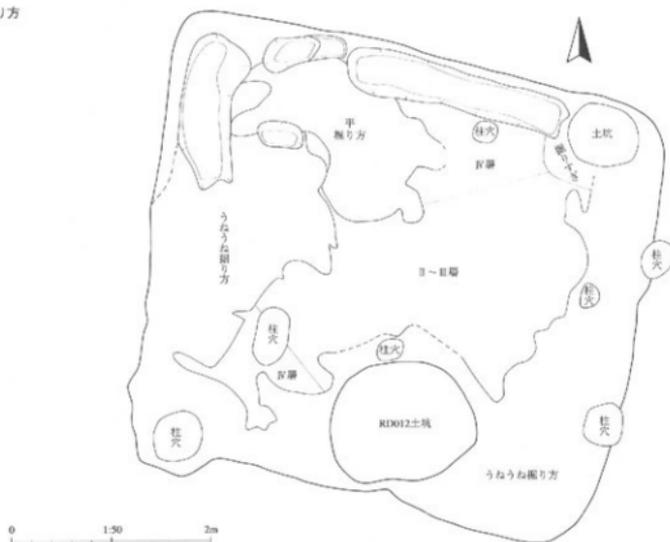


第12図 RA013住居跡 (2)

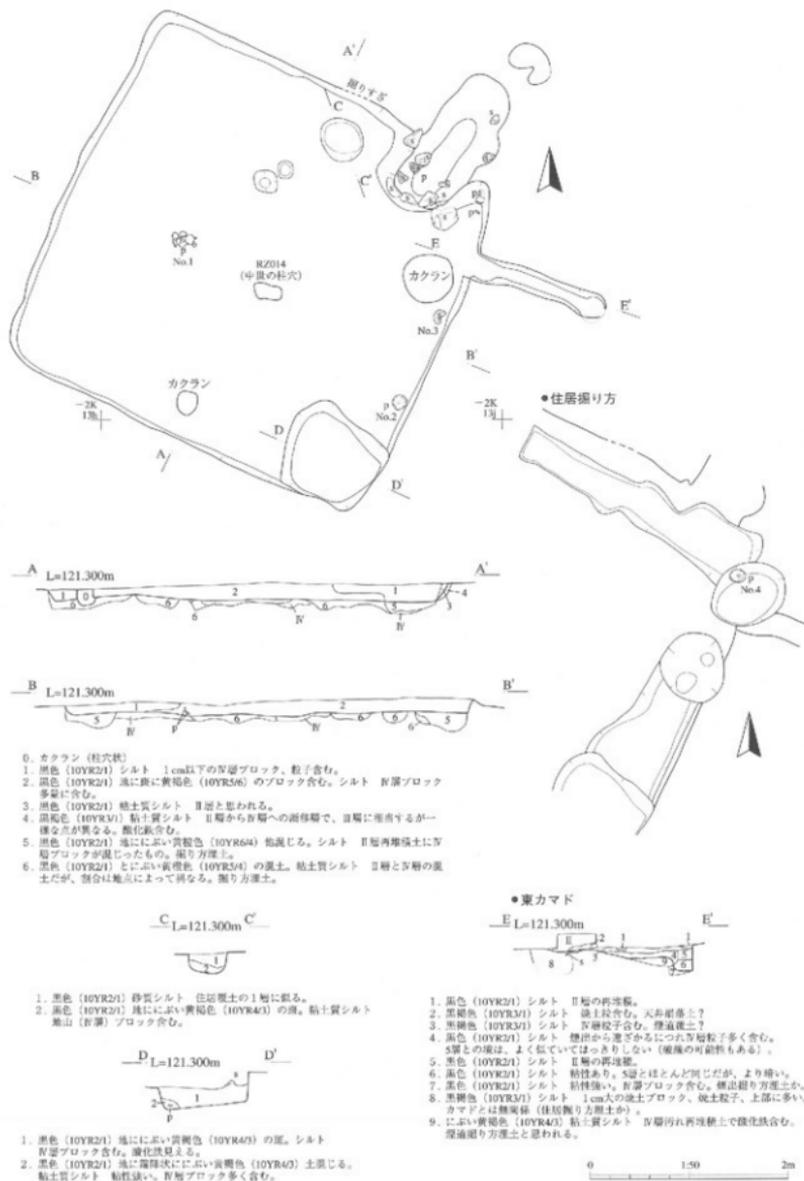
●遺物出土状況



●掘り方

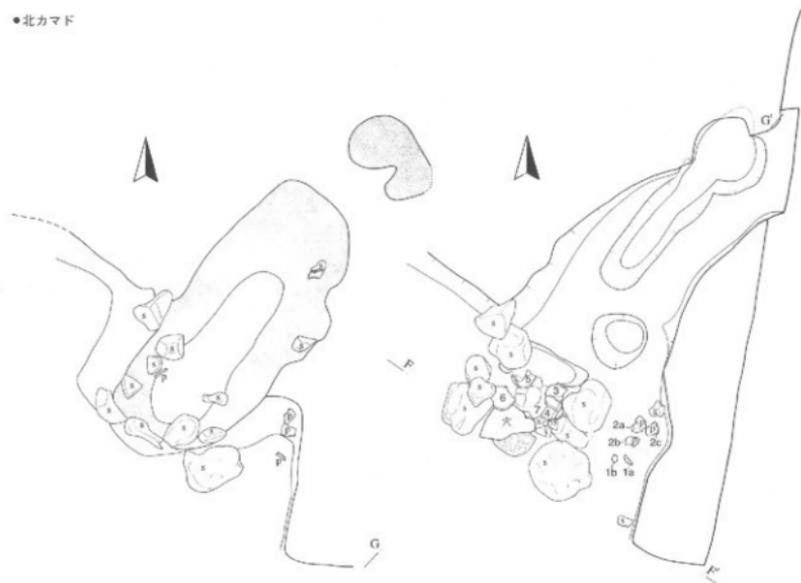


第13図 RA013住居跡 (3)

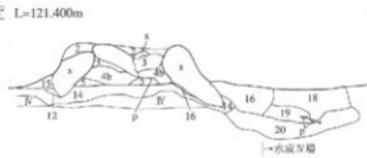


第14図 RA014住居跡(1)

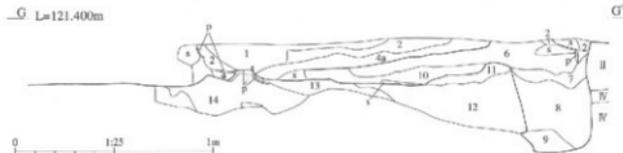
●北カマド



F L=121.400m

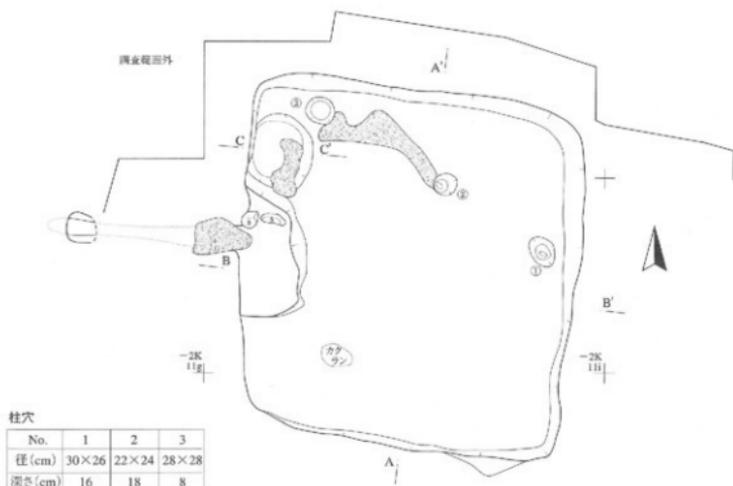


G L=121.400m



1. 黒色 (10YR2/1) シルト 天井が窪んだために落ち込んだと思われる汚雑土か?
2. 濃い黄褐色 (10YR6/4) と黒褐色 (10YR3/2) の混土。シルト 石層を穿つたもの (カマド跡部?)
3. 黒褐色 (10YR3/1) シルト カマド跡部に入ったと思われる汚雑土か?
- 4a. 黒色 (10YR2/1) ~ 黒褐色 (10YR3/1) 處に暗赤褐色 (5YR4/6) のブロック含む。シルト層が火を受けて変化したものと思われる。煙道天井?
- 4b. 4a層が閉塞したもの。
5. 黒色 (10YR2/1) シルト ややもろい。カマド跡部に入ったと思われる汚雑土か。
6. 黒色 (10YR2/1) シルト 洞窟の土層が侵入した上。
7. 黒色 (10YR2/1) 處に濃い黄褐色 (10YR5/3) のブロック層が含む。シルトと黒土層の両層が混入。灰土。
8. 黒色 (10YR2/1) 處に灰黄褐色 (10YR4/2) のブロック。シルト 焼土層。ブロック含む。洞窟からの流入土。
9. 黒色 (10YR2/1) シルト 粘性強い。3層と5層の汚雑土。毎層固り方粗くであろう。
10. 黒褐色 (10YR3/1) 處に褐色 (7.5YR4/6) のブロック層が含む。シルト 焼土層多く含む。天和跡部土か。
11. 黒褐色土 (10YR3/1) と褐色土 (7.5YR4/6) の混土。シルト 粘性ややあり。12層が火を受けて変化したものと思われる。
12. 黒褐色 (10YR3/1) のブロックと褐色 (10YR4/1) のブロックの混土。シルト 粘性がかなり。1cm~5cm次の各種ブロック多く含む。溝道側り土層土。
13. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト 谷津の山山の河原状土。溝道側り方粗土。
14. 黒色 (10YR2/1) 處に華大の濃い黄褐色土 (10YR3/4) のブロックごみころ。シルト 華大の互層ブロック多く含む。柱形側り方粗土。
15. 黒褐色土 (10YR3/1) と濃い黄褐色土 (10YR4/6) の混土。シルト 各種ブロック含む。2層と同じと思われる。
16. 黒色 (7.5YR2/1) シルト 5層、14層とほとんど同じ。石の固り方粗土と思われる。
17. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 泥土状~1cm次の塊土ブロック多く含む。
18. 黒色 (7.5YR2/1) シルト 塊土ブロック含む。柱形側り方粗土にカマド2の焼土が混じったものであろう。
19. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 粘性あり。汚水成層互層の汚雑土。
20. 黒色 (2.5Y2/1) シルト 粘性あり。互層ブロック、水成石層ブロック含む。柱形側り方 (土坑) 混土。

第15図 RA014住居跡(2)

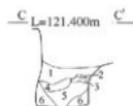


柱穴

| No. | 1 | 2 | 3 |
|---------|-------|-------|-------|
| 径 (cm) | 30×26 | 22×24 | 28×28 |
| 深さ (cm) | 16 | 18 | 8 |



●住居内土坑 掘り上がり



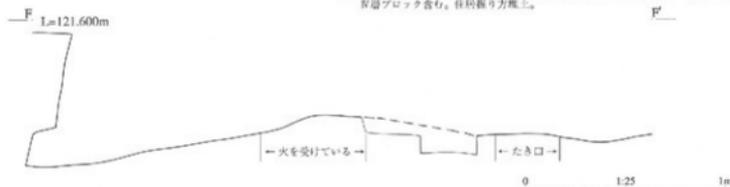
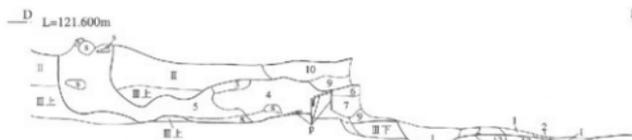
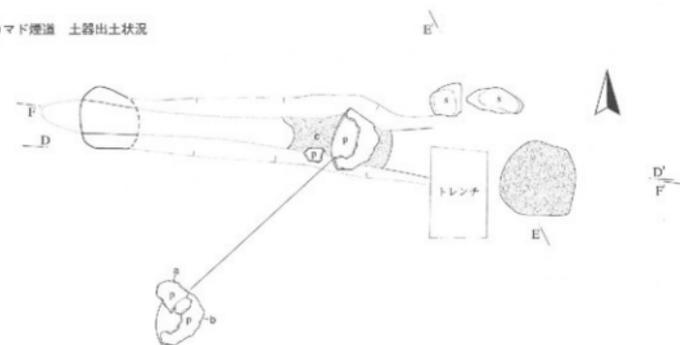
1. 上部黒色 (10YR2/1)、下部黒色 (10YR1.5/1) 共に黄褐色 (10YR5/6) の燻入状の層。シルト 上部層粒子多く、下部IV層ブロック多く含む。掘り上げ時「上層」と呼んだもの。
2. 黒色 (10YR1.7/1) シルト 粘性あり。細かい～3cm大のIV層ブロック、砂子含む。掘り下げ時「下層」と呼んだもの。
3. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性あり。柔らかい。IV層砂子。細かいブロック多い。「下下層」と呼んだもの。
4. 黒色 (10YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) の細かい層。シルト II層の河原砂にIV層ブロック含む。
5. 黒色 (10YR1.7/1)、部分的に黒褐色 (10YR3/2) と黄褐色 (10YR5/6) の混上。粘上質シルト 掘り方地上。
6. カマド焚き口焼土 (表面部)。

1. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト 粘性あり。IV層砂子含む。柱穴と同様に黒い。
2. にぶい赤褐色 (5YR4/4) 砂 地上。
3. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト 5層が火を受けて変化したもの。
4. 黒色 (10YR2/1) シルト もろい。IV層ブロック含む。
5. 黒褐色 (10YR3/1) 地になぶい黄褐色 (10YR5/2) の泥。シルト ややもろい。IV層ブロック多く、露降次に近い。
6. 黒色 (10YR2/1) 地になぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト ややもろい。IV層ブロック含む。

0 1:50 2m

第16図 RA015住居跡 (1)

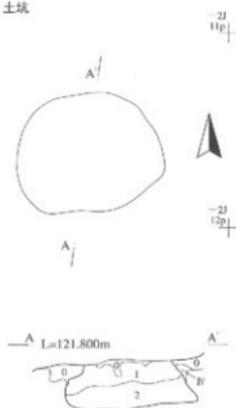
●カマド煙道 土器出土状況



1. 黒褐色 (10YR3/1) 地に赤い黄褐色 (10YR4/3) の斑。シルト 多い。草履ブロック多く含む。カマド跡高上か。
2. 赤い黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト。硬く締まる。IV層再堆積。カマド跡遺土と思うが、故意に隠ったのかも知れない。
3. 黒褐色 (10YR3/1) と赤い黄褐色 (10YR4/3) の混。シルト 草履ブロック多く含む。3層とはほとんど全く同じ。
4. 黒色 (10YR2/1) 地に赤い黄褐色 (10YR4/3) の斑。シルト 1m大のIV層ブロック含む。
5. 3層とはほとんど同じだが、深さ付近は、赤い黄褐色 (10YR4/3) の割合がもっと多い。シルト 硬含む。3層と同じと思うが、4層との兼ね合いで無様欠損分けた。
6. 黒褐色 (10YR3/1) と赤い黄褐色 (10YR4/3) の混。シルト 草履破片、赤土粒含む。
7. 黒色 (10YR2/1) シルト 草履破片、赤土粒硬かを含む。4層と同じか。
8. 黒色 (10YR1/1) シルト 粘り強い。薄層にも多い。
9. 黄褐色 (10YR5/5) で硬い部 (4層、Ⅲ下層との境) に赤い赤褐色 (5YR4/4) 粘土。垂直上下に草履を隠ったものか。
10. 黒褐色 (10YR3/1) シルト 草履破片、赤土粒含む。天井を隠ったものと思つたが、II層の一部と同じであろう。
11. 黒褐色 (10YR3/1) と黄褐色 (10YR5/5) の混土。粘土質シルト 硬い方厚土。
12. 赤い赤褐色 (5YR4/4) シルト? 硬土。上面非常に硬く締まる。
13. 赤褐色 (7.5YR3/2) 粘土質シルト 熱を受けてIV層ブロックが変化したもの。
14. 黒色 (10YR1/1) シルト 草履ブロック、粒含む。位厚土であろう。
15. 赤い黄褐色 (10YR4/3) シルト 粘りやあり。カマド跡遺土。草履を隠ったもの。
16. 黒褐色 (10YR3/1) 地に黒色 (10YR4/4) のブロック。シルト 粘りあり。草履破片、1cm=単位の草履ブロック含む。
17. 黒灰色 (10YR4/1) 地に3cm大の褐色 (10YR4/4) のブロック。シルト 粘り強い。草履ブロック含む。柱石掘り方厚土。

第17図 RA015住居跡(2)

●RD012 土坑



0. RA013住居廻り方塚土。
 1. 黒色 (10YR1.7/1) シルト 互層状を含む。
 2. 灰色 (10YR1.7/1) 地に黒鉄灰に黄褐色 (10YR5/6) のブロック、シルト互層状、ブロック多く含む。運め戻し土か。RA013住居廻り方塚土に似る。

●RD013・014・015・016 土坑



1. 黒色 (10YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) の細かいブロック含む。シルト互層状、ブロック含む。
 2. 黒色 (10YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) の細かいブロック含む。シルト互層状、ブロック含む。1層より赤褐色の色調が強く、互層状が多い。

●RD019 土坑



1. オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘土質シルト 水田の塚土？
 2. 黒色 (5Y2/1) にふい黄褐色 (10YR6/4) 混じる。粘土質シルト 緑褐色い。下部ブロック含む。
 3. 黒色 (5Y2/1) 粘土 2層より厚い。
 4. 黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルト 互層。
 5. 灰色 (5Y5/1) 粘土 互層が水で変化したもの。



1. 黒色 (10YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) のブロック含む。シルト互層状、ブロック含む。
 2. 黒褐色 (10YR3/1) 地に黒鉄灰に黄褐色 (10YR5/6) のブロック含む。シルト 運め戻し土か。廻り方塚土？



1. 黒色 (10YR2/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) のブロック含む。シルト硬く締まる。互層状、ブロック多く含む。
 2. 褐色 (10YR4/4) 粘土 互層の汚れ再堆積



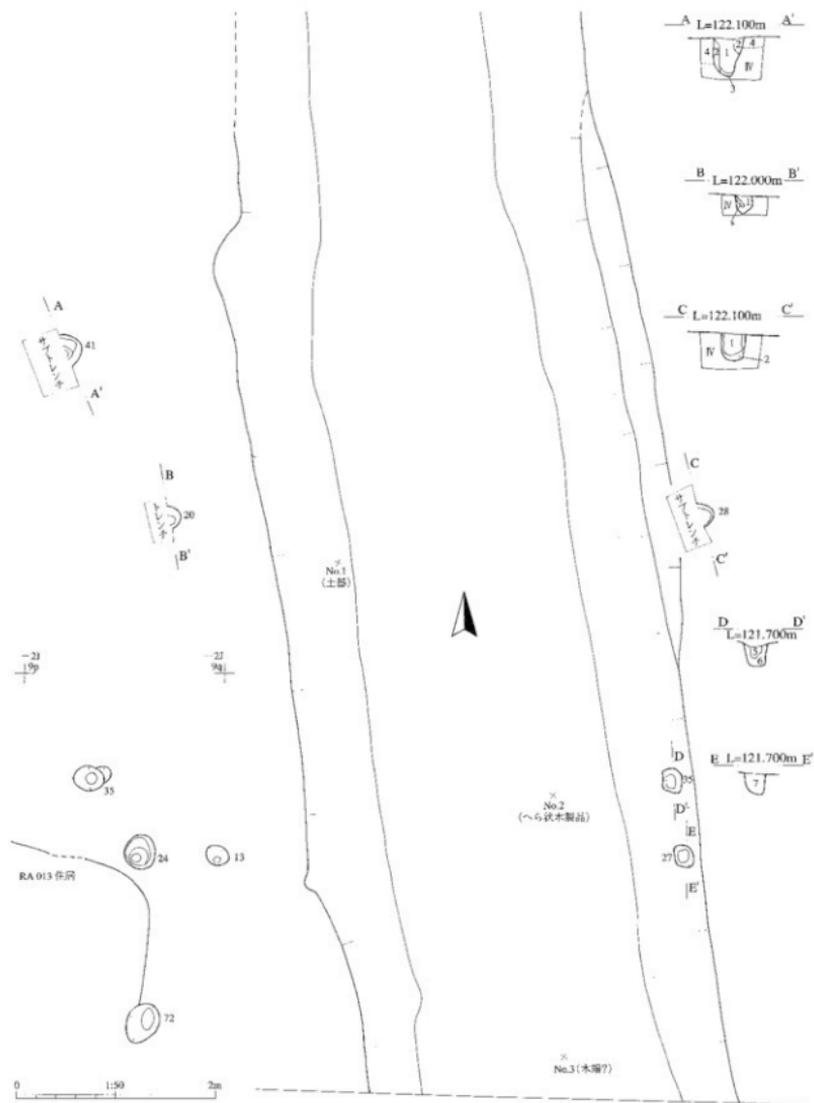
第18図 RD012~016・019土坑



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 並に高障状に黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト IV層のブロック多く含む。遺跡Aに示す。
2. 暗褐色 (10YR3/2) 地に高障状に黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト IV層のブロック多く含む。遺跡Bに示す。
3. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土。非常に硬く締まる。IV層を穿ったもの。
4. 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト。遺跡の一部を穿る。

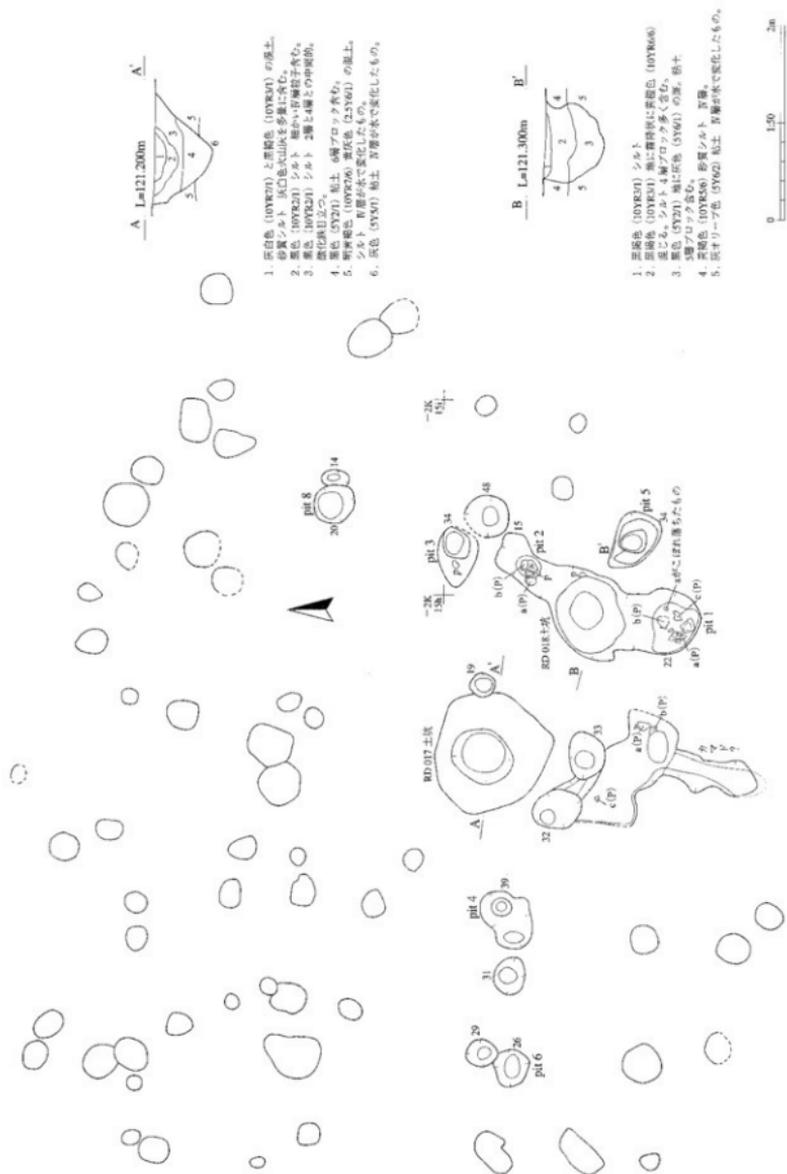
1. 黒褐色 (10YR3/1) と黄褐色 (10YR5/6) の混土。シルト IV層の土を多量に含むが、その多量性は穴によって異なり、①、②は多く、③は少ない。①と②以外は炭化物を含む。①、②は炭七粒も含む。遺跡Cに示す。
2. 黄褐色 (10YR5/6) 地に黄褐色 (10YR5/6) 混じる。シルト もろい部分あり。I層よりIV層の土の混ざり少くない。①は炭化物を含む。本柱あたりか。
3. 黒褐色 (10YR3/1) 粘土。9-10層がグライ化したもの。柱あたりか。
4. 暗褐色 (10YR3/1) 地に黄褐色 (10YR5/6) 混じる。粘土質シルト I層よりIV層粒子細かく一様に入る。
5. 4層とはとんと同じだが、4層よりIV層粒子の混ざり少くない。
6. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土。非常に硬く締まる。IV層の土を穿ったもの。
7. 暗褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト。遺跡の一部を (下層) 穿る。
8. 暗褐色 (10YR3/1) 粘土。IV層が穿ったような感じの色で、IV層よりもろい。

第19図 RZ011柱穴群、RD011土坑



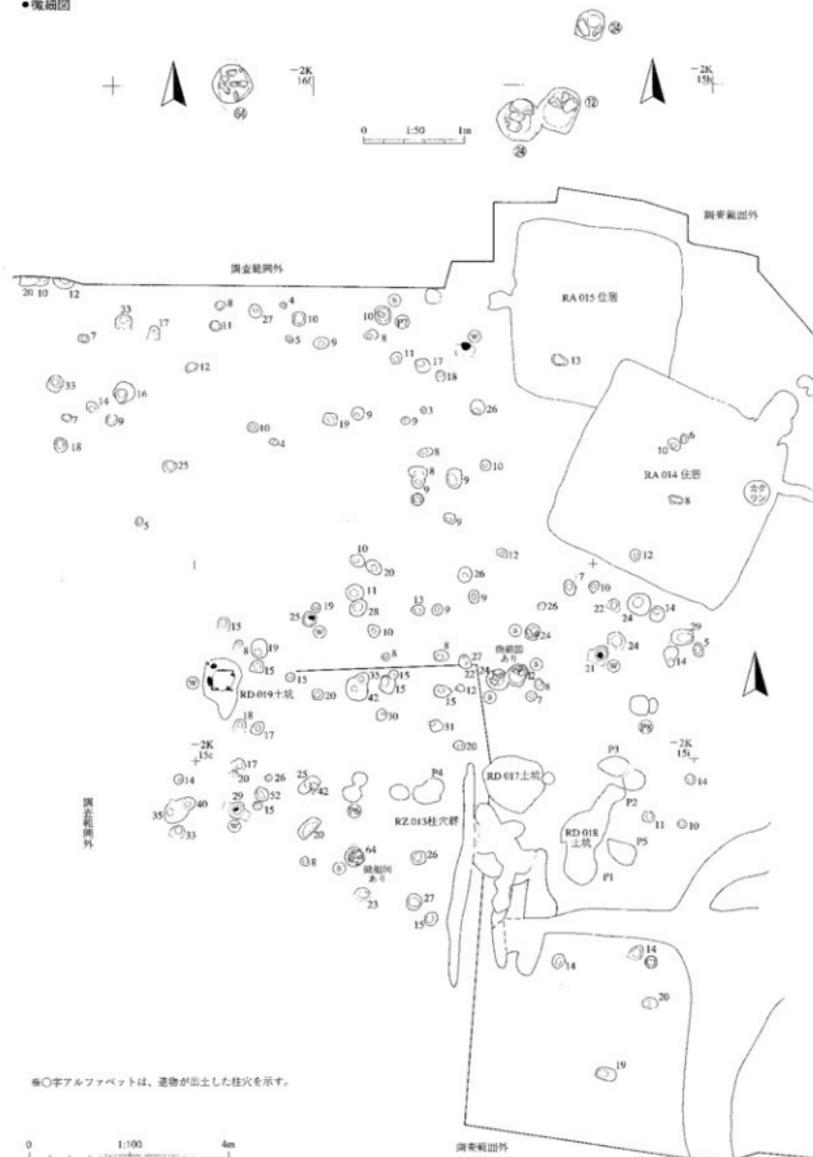
1. 黒褐色 (10YR5/3) 地に黄褐色 (10YR5/6) 混じる。シルト も多い部分あり。互層ブロック含む。2層に似るが、より締まる。柱状弱小。
2. 黒褐色 (10YR5/6) 地に黄褐色 (10YR5/3) 混じる。粘土質シルト 互層の上に黒上流する。掘り方端正。
3. におい消外 (2.5Y6/4) 粘土 互層がグライ化したもの。柱あたり。
4. 暗褐色 (10YR3/4) 粘土 互層が薄ったような感じの地で、互層よりも多い。
5. 褐色 (10YR2/2) 地に黄褐色 (10YR5/6) のブロック、砂子含む。シルト N~V層ブロック含む。
6. 黒色 (10YR1/3) 地に黄褐色 (10YR5/6) のブロック、砂子含む。シルト やぐ硬く締まる。互~V層ブロック含む。掘り方端正。
7. 黒褐色 (10YR5/3) 地に黄褐色 (10YR7/3) のブロック シルト 炭化物係かに含む。互~V層およびそのグライ化した土のブロック含む。

第20図 RZ012柱穴群



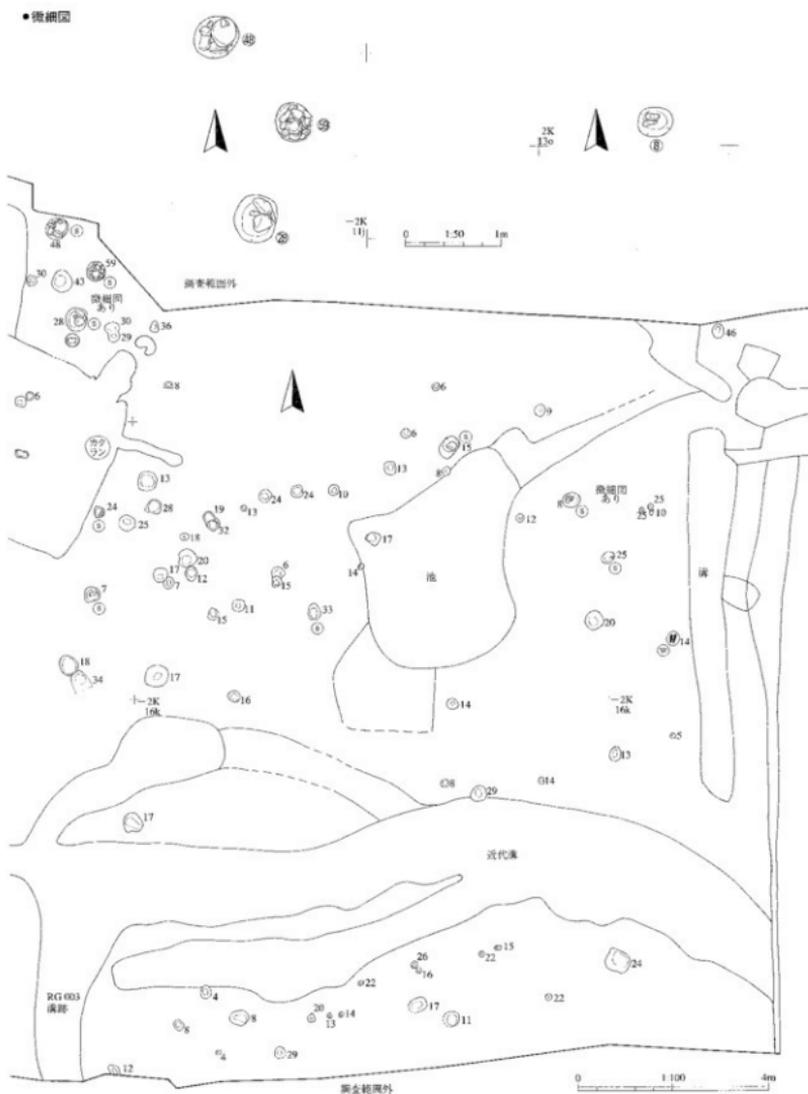
第21図 RZ013柱穴群、RD017・018土坑

●概図



●○半アルファベットは、遺物が出土した柱穴を示す。

第22図 RZ014柱穴群 西平



第23図 RZ014柱穴群 東半

は明らかに埋め戻した土と思われた。このことと焼土がこの穴に向かって落ち込んでいることから、埋め戻した穴が、土がよく締まっていなかったために落ち込んで、そこに住居覆土が落ち込んでいるのではないかと判断された。そこで二回に分けて精査した（1層とそれ以下）。底面から完形の台付坏出土。

＜出土遺物＞（出土状況）遺物の出土は少なく、カマド付近から出土したものが全てである（第16～17図）。カマド脇土坑から出土した台付坏は、割れているのは、おそらく土圧で、欠けているのは前述のように精査時に問題があったためで、本来は完形であったと推測される。カマドa土器は、胴部破片で内面を上に向けほぼ水平の状態で出土。（遺物）第30図の土師器・須恵器が出土し、他に、土師器約140g、須恵器約96g出土している。

＜時期・所見＞出土土器から、平安時代（9世紀半ば前後）の可能性が高い。カマド下土坑の完形の台付坏は、RA014住居にも見られ、カマド祭祀の跡の可能性もある。

2. 土 坑（第18、19、21、30図、写真図版13～15、19）

縄文時代1基（RD012、釜込）、古代6（2+不確実4）基（RD013?～016?、017、018）、中世?1基（RD011）、不明（古代以降）1基（RD019）。RD015と016は、疑似現象か。

RD011検出位置から、中世と判断（第19図）。周囲の柱穴状土坑より大きく、根石が見られる。

RD012RA013住居床下に検出。重複関係と断面形から、縄文時代と判断。II層再堆積で埋まり、住居覆土と区別し難い。図、上場は崩れたため、北側下場は傾斜して曖昧なため、合わない。

RD013～016覆土は何れも黒土（II層再堆積）にIV層ブロック含み、壁～底はIV層で016以外底面グライ化して変色。015と016は、周囲によく似た疑似現象が見られ（第18図）、遺構ではないかも。013、014の新旧は上面から分かり、013の方が新。図、016のB側の上場崩れたため合わない。

RD017、018RD017上面に火山灰が認められ、覆土および出土遺物から、古代と分かった（第21図）。図、017のA'側の上場、完掘時堀り広がったため合わない。018の上場も同様。

RD019中心部を板で囲み、井戸に似るが規模が非常に小さい。図、A'側の上場、崩れたためか、A側の下場、深くうまく測れないため、合わない。須恵器が出土したが（第30図）、流れ込みか。

3. 柱 穴 群（第8～9、19～23図、写真図版16～17、19～21、30）

RZ013は平安時代の竪穴住居跡の残骸、011、012は中世、014は中～近世の可能性が高い。図の柱穴状土坑の横の数字は、検出面からの深さ（cm）である。

RZ011、012柱穴群（第8、19～20、25図、写真図版19～21、30）

＜位置・検出状況＞北南区。分布で、RZ011と012に分けた。RG007溝跡内の2基（D-D'、E-E'）は、溝調査時に追加したものである。RA013住居の竪穴外にある柱穴状土坑は、こちらに帰属する可能性もある。＜精査状況・図＞曲輪精査後、完全な黄褐色土が出るまで下げたが、新たな柱穴状土坑は検出できなかった。ただし、30cm以上の厚さがあったため、下げすぎたせいかもしれない。第19図pit⑨は、完掘時掘り広がったため、平面図と断面図合わない。第20図B-B'は、崩れたため、D-D'は、断面実測図の測り間違いか、合わない。＜特記事項＞RZ011範囲内にあるRD011土坑は、根固石を持つが、同じ仲間である可能性が高い。＜出土遺物＞写真図版30の48の石器？出土。＜時期・所見＞時期を特定する遺物がなく、不明だが、これまでの調査結果から中世か。RZ011は、検出位置から建物を構成する可能性があるが、それにふさわしい数と並びを見つけれな

った。R Z 012は、橋を構成する可能性があると考えたが、対応する部分にうまく発見できなかった。

R Z 013、014柱穴群（第9、21～23、31図、写真図版16～17、30）

＜位置・検出状況＞中央区では非常に多くの柱状土坑が検出されたが、この区はカクランや削平が著しく、周囲に出土遺物から明らかに近現代に属するR G 003溝跡もあったこと（第10図）、またその覆土からも新しく、近代以降のものと考えていた。ところが、R A 014住居内の相当穴から永楽通宝が出土し、見直しを迫られた。＜精査状況・図＞半裁後、平板実測で1/200の柱穴全体図を作成し、建物の構成を考えたいが見つけられなかった。他に比べて覆土が黒い一群の穴からは顕著に土師器が出土することがわかり、近くに瀬道状の細長い穴を見つけ、整穴住居跡の残骸ではないかと思うに至ったので、これらをR Z 013として区別し、残りのものをR Z 014とした。調査終盤で時間的な余裕がなく、断面図は作成できなかった。また、R A 015住居はⅡ層を検出面とし、期間に余裕がなくそれ以上下げないため、その周囲はダメ押ししていない。＜覆土＞R Z 013の方は、黒土（5Y2/1）シルトで、地山ブロックや酸化鉄のブロック含む。014は、黒（10YR2/1）にぶい黄褐色（10YR6/4）のブロック含む、シルト、はっきりした掘り方を持つものもある。住居付近は、本章冒頭参照。＜出土遺物＞R Z 013からは土師器、石器・石製品、014からは銭貨が出土している（第31図、写真図版30）。

＜時期・所見＞出土遺物等から、R Z 013は平安時代の整穴住居跡、014は中～近世の可能性が高い。

4. 溝（堀）跡（第24～25、31図、写真図版18～19、21～22、30）

4条確認されたが、R G 006～008溝跡は前々回の調査で確認されたものである。R G 007、008は遺物が出土しているが、時期の決め手にはなりにくく、調査結果から判断すると、何れも中世か。

R G 006は、前々回の調査で既に地山まで下げられていて、人為的なものか自然の窪地か、さらに、第6図を見ると前回調査のR G 006からずれており、本来R G 006とは無関係なのかも不明である。

R G 007の底は砂だが、断面図をとった箇所から南側約2mまで白色粘土化しており、当時水につかっていたことは確かである。また、3層より上は後で埋め戻したものが、底との間に酸化鉄が見られ、この間も水につかっていたと思う（調査した範囲全城）。A'側の上場、崩れさせいか、断面、平面図合わない。第31図の遺物が第24図の位置から出土したが、34（No. 1）の土器は、混入か。

R G 008は、前々回の調査範囲との関係から、その続きが想定され、現地でそれらしい黒土が確認されたため認定したもののだが、20cm以下と浅く（削平されているためか）、底の形状もマチマチで（平らであったり強い凹凸があったり）、さらに土師器が顕著に出土する柱状穴の土坑が底からしばしば確認されるなど（第24図、写真図版22）、決め手に欠ける。前々回の調査範囲との間に水路が設定され、範囲ギリギリまで調査できなかったせいもある。ただし、前々回の調査で大要はわかっているため、それほど問題はないと思う。ただのカクランかも知れないが、東端は水田に切られている。

R G 010は、曲輪側の一部を掘削しただけで（第26図）、基本的には自然の湿地を利用したものであり、冒頭に記したように、台太郎遺跡との間の広大な湿地に続き、泥炭層が形成されている。

5. 曲輪

R Z015曲輪 (第25～26図、写真図版18～22)

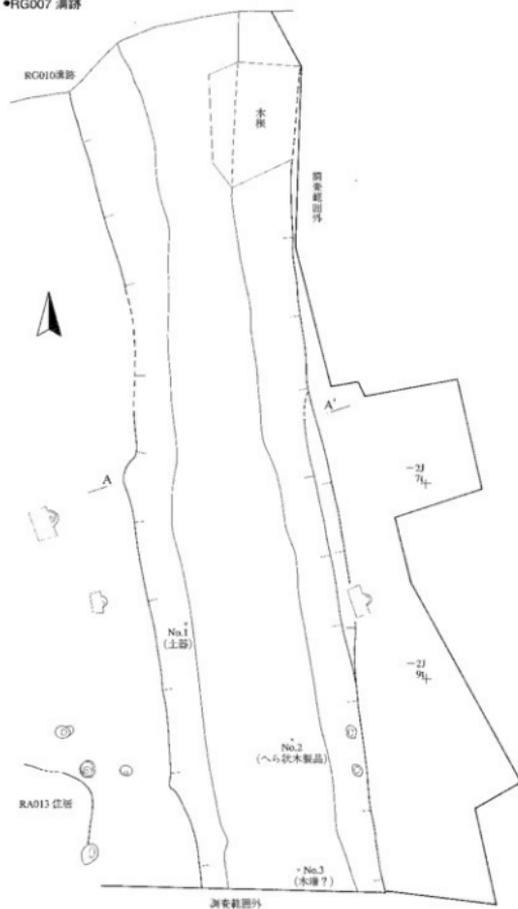
<位置・検出状況>北南区。一2 Kグリッド。東西に伸びる自然堤防状段丘に立地。標高122.6～122.1m。検出時、西?、北、東側が堀で囲まれていて、上面がほぼ平坦なので曲輪と判断。北西隅斜面落ち際に玉石が多く確認されたが、本遺構に伴うのかどうか定かでない。<精査状況・図>宅地開発前、南西側に屋敷神(稲荷)の祠が建っていたが、調査前には撤去され重機によってある程度ならされていたので、原地形は読み取りにくかった。試掘トレンチを入れた結果、盛土でなく元々高いのだと分かった。それほどひどいカクランを受けていたわけではないが、表土は浅く、曲輪上面がその後の改変にさらされやすい位置にあったことも確かである。十字状ベルトを残して掘り下げて断面実測し(写真図版18)、最終的にはベルトを外して全体を地山まで下げた。<重複>南側にRA013住居があり、一部重複していると思う。<普請・造成状況>北西隅を中心に傾斜は二段に分かれ、まずほぼ平らな部分があり(平坦面と称す)、その次に緩やかな傾斜部分(第25図トレンチを通る線と溝状に分布する黄褐色土の部分まで)、それ以遠はほぼ元の地形と思われ、南側は比較的急である。平坦面北側は、黄褐色土が貼ってあったが、南側の柱穴状土坑付近にも部分的に見られたので、本来は、平坦面全域に貼ってあったのかも知れない。黄褐色土が土塁の痕跡ということも考えられなくもないが、その北側の堀にはこのような土はほとんどがなく、さらに厚さが比較的均質であることから、平坦面に敷いたものと考え。なお、断ち割った結果、第25図C-C'の部分は人為によるものだが、南側の溝状に広がる黄褐色土は、元々の地山が波打っているものとわかった(自然のもの)。C-C'は、溝状に掘削した後埋め戻したもので、堀のようなものを立てていたのであろうか。<平面形・規模>平坦面は、7×6.5m程度の不整形で、その下の緩斜面を含めると11×9m程度に広がるが、何れにしろあまり広くはない。<関連施設>西側をR G006溝跡、北側をR G010溝跡、東側をR G007溝跡に画され、上面にR Z011柱穴群、R G007溝跡に関連してR Z012柱穴群がある。R Z011柱穴群は、検出位置から建物構成する可能性があるが、それにふさわしい数と並びを見つけれなかった。<出土遺物>曲輪として取り上げたものはなく、R G007溝跡から出土したものだけである。<時期・所見>R G007溝跡出土品も時期の決め手になりにくく、不明だが、これまでの調査結果から中世であろう。

6. その他

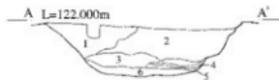
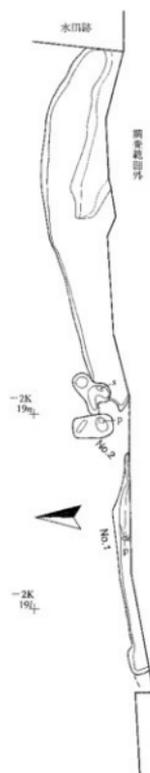
R Z016木出土状況 (第27図、第1表、写真図版23、31～33)

<位置・調査状況>南区北端。前年度、西側の隣接地を調査し同様のものが出土していたので、予想していた。泥炭層を下げる際に出土し、その部分を残してスコップで全体を掘り下げ、写真を撮り、実測した。木に番号を付けて取り上げたが、後述のように明瞭な加工痕が認められるものが少なかったので、まとめて取り上げた。<木の出土状況>4箇所に分かれており(第27図)、No.34は前年度調査区の続きか。後述の木の状況も含めて、特に何かの構築物とは思わず、廃棄の単位と考える。<木の状況>製品と思われるものはなく、加工痕は、伐採痕がほとんどである(第V章参照)。<出土遺物>周囲の泥炭層から、土師器・須恵器(第35図42～44)、石器製作時の剥片(第36図1)、寛永通宝(第42図7)が出土している。<時期・所見>出土遺物は多時期にわたるが、数と大きさ、および前年度の調査結果から、古代の可能性が高い。前年度と違って製品は少なく、川縁での一次作業(木の伐採及び枝払いなど)の後、不要なものを廃棄したという状況に近い。

●RG007 溝跡



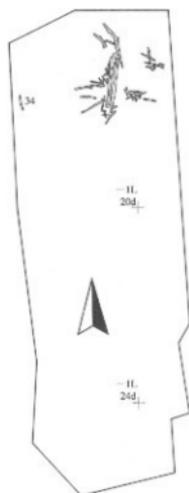
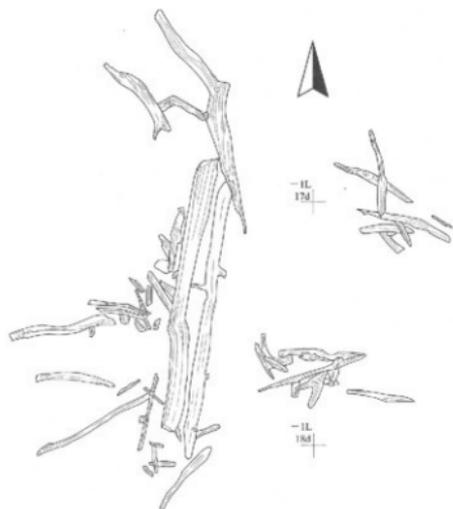
●RG008 溝跡



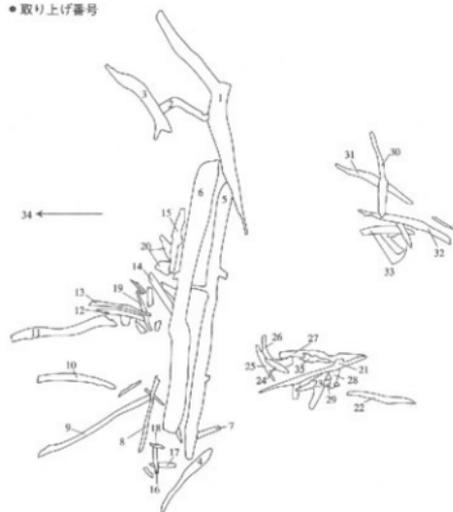
RG007溝跡

1. 褐色 (10YR4/4) 地に茶褐色 (10YR3/1) のアブロック。砂質シルト Ⅱ～Ⅴ層で覆われた土か？
2. 紫色土 (10YR4/4) と黒褐色土 (10YR3/1) が層状に丸いアブロックで混じり合う。砂質シルト 覆われた土。
3. 褐色土上 (10YR4/1) とにぶい黄褐色土 (10YR5/5) と褐色土 (10YR5/1) が層状に丸いアブロックで混じり合う。シルト。これも覆われた土だが、灰色を基調とするところが、1、2層と違う。上面に礫化状が厚さ1cm程度で続き、そのまま奥方に続く。
4. 黄褐色土 (10YR5/6) に灰黄褐色土 (10YR4/2) が層状に表れる。粘上質シルト 色が崩れた土の泥水浸透帯か。礫化状が広がる。
5. 褐色土 (10YR4/1) 地に粒状に黄褐色 (10YR5/6) とにぶい黄褐色 (10YR5/5) が混じる。シルト 粘土の泥水浸透帯か。
6. 褐色土 (10YR4/1) 粘土

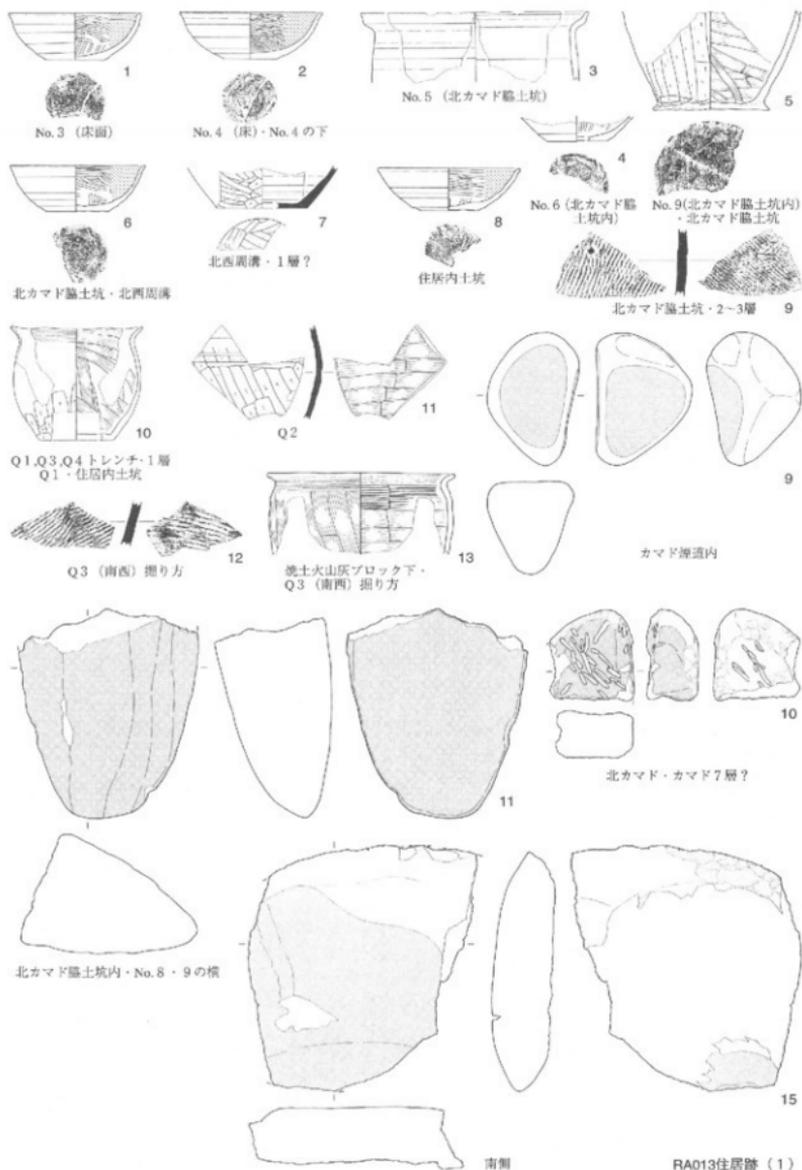
0 1:100 4m



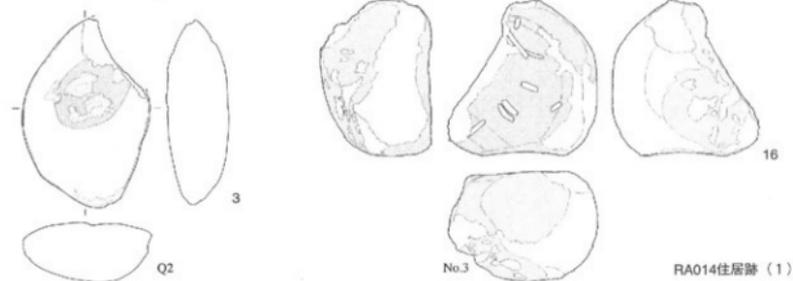
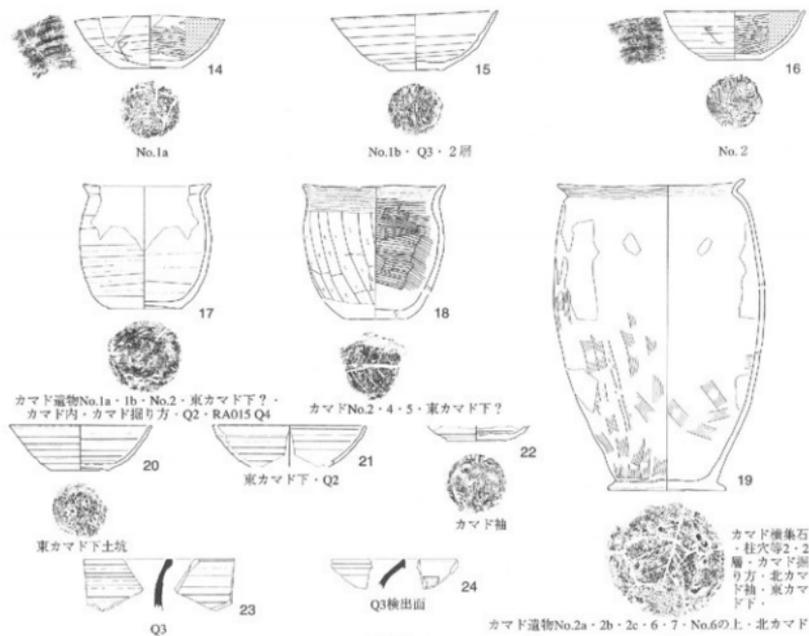
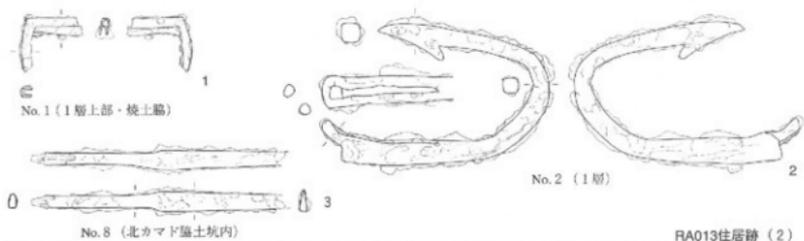
● 取り上げ番号



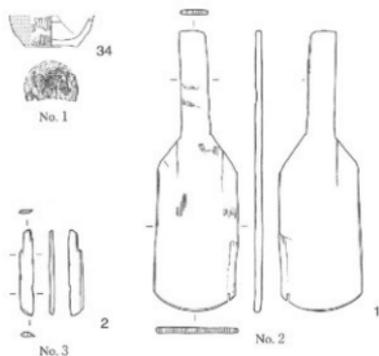
第27図 RZ016木出土状況



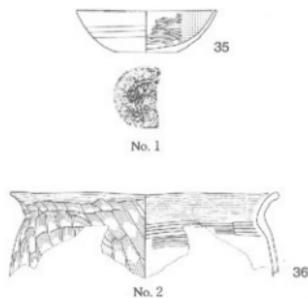
第28図 RA013住居跡(1)出土遺物(1/5)



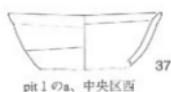
第29図 RA013住居跡 (2)、RA014住居跡 (1) 出土遺物 (土器・礫石器1/5、鉄製品1/3)



RG007溝跡



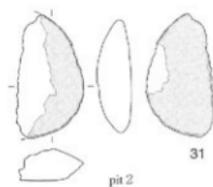
RG008溝跡



pit 1 のa、中央区西



pit 1 のb



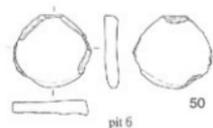
pit 2



pit 1



pit 2 のa



pit 6

RZ013柱穴群



c1 柱穴



c2 柱穴



c3 柱穴



(RA014住居内)



(RA014住居内)

RZ014柱穴群

第31図 RG007・008溝跡、RZ013・014柱穴群出土遺物(土器・礫石器・木製品1/5、銅片石器1/3、銭貨1/2)

V. 遺 物

今回の調査で、土師器・須恵器大コンテナ（30×40×30cm）約1箱、石器・石製品50点、木製品約118点、鉄製品3点、銭貨7点、近代以降の陶磁器類大コンテナ約0.5箱が出土したが、陶磁器類は掲載を割愛した。その他、RA013住居から初穀、RG007溝や南区の泥炭層から葉・種子や昆虫などの自然遺物が出土しているが、これらの分析結果は第Ⅶ章に記した。

本章では、遺構出土の遺物も含めているが、それぞれ、その種類の遺物の中で冒頭に掲げている。遺構出土品は、第Ⅳ章の後に遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第28～31図）。遺物は基本的に表で記載しているが、出土位置の欄の住居の後のQ1～4は、住居を4等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が1、北東が2、南西が3、南東が4になる。

1. 土師器・須恵器（第32～35図、写真図版26～27）

大コンテナ（30×40×30cm）約1箱出土し、掲載分が土師器約6.3kg、須恵器約0.6kg、不掲載分が土師器約8.2kg、須恵器約4kgある。掲載基準。土師器は、原則として器形が復元できるもの（1/4周以上）としたが、出土遺物が少ない遺構や地点では、復元できない口縁部破片なども掲載した。須恵器は、拓本が使えるので破片でも掲載したが、胴部破片で、その遺構内に他に同様の掲載破片がある場合と遺構外の場合（特に出土地点の時期を示したかった44を除く）は、原則として不掲載とした。このような基準なので、現地でもNo.遺物として取り上げているものにも、不掲載品がある。

時期。ほとんどが9世紀中～10世紀初頭前後に位置づけられようが、42は古的要素を持ち9世紀初頭前後に位置づけられるかも知れない。ただし、外面は、工具からはミガキと判断すべきかも知れないが、“調整効果”としてはナデと判断せざるをえないような仕上がりで、他と著しく異なるという印象は受けない。“変わった土器”としては、14、16の刻文土器、34の黒色土器がある。刻文は、倒位で見て“キ”と読めるのではないかと指摘を受けた。

表の見方。残存状況の欄の略号。“略”→略完形、“(割)”→割れている、“一欠”→一部欠損の意である。内外面の調整の欄。“→”は、調整の順序を示す。調整は、工具よりも“効果”に重きを置いて表現していることをお断りしておく。今回の出土品の“効果”は、ケズリとナデの境が曖昧である。

以下、表の補足。1は、二次焼成で一部内面黒色処理が消えている。4の内面には一部ススが認められるが、これは内面黒色処理が“とんだ”ものか。5は、No.9で取り上げたものが2/3を占める。6は、柱穴等13で取り上げたものが1/12を占める。8は、底中央が極端に薄くなっている。10の外面、二次焼成で赤い。14の鎌削消えがち。外面やや摩耗、スス付着。15の内外面スス付着。外面は、胴部中央に幅1cmの帯状にスス付着。16の内外上部にタール状スス付着。17の取り上げ位置は、RA014住居の方は、カマド遺物No.1a、No.1b、No.2、東カマド下？、カマド内、カマド掘り方、Q2、RA015住居の方はQ4（小片）、手違いで全破片に注記していないので出土割合は不明である。18の外面、口縁スス付着、下二次焼成で赤い。内面、底から口に向かって幅不規則（4cm以下）の帯状にスス付着。No.5で取り上げたものが大半か。19の取り上げ位置、カマド遺物No.2a、2b、2c、6、7、NO.6の上、北カマド、北カマド袖、カマド掘り方、東カマド下、柱穴等2・2層、カマド横集石であるが、手違いで割合不明。内外、底から10cm以内黒く、それより上は二次焼成で赤く調整

“とんで”しまっただけに見える。20の底付近、歪んでいる。須恵系土器にしては厚すぎる。26の外側、底付近、胴屈曲部より上、二次焼成で赤い。27の外側、下部スス付着、上部赤く二次焼成を受けている。31の外側二次焼成で朱色。内面スス付着。39の外側底面中央直径約2cmの範囲に砂が集中している。41の底面は、ヘラケズリであるが、一部ミガキ状のところも。

参考文献

八木光則 1993 「古代新瀉郡と附随体の土器様相」〔第18回古代城柵官衛検討会 特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相〕同青森大会事務局（青森県埋文センター）（1992年開催のシンポジウム結果をまとめたもの）

2. 石器・石製品（第36～38図、写真図版28～30、観察表は写真図版の方にある）

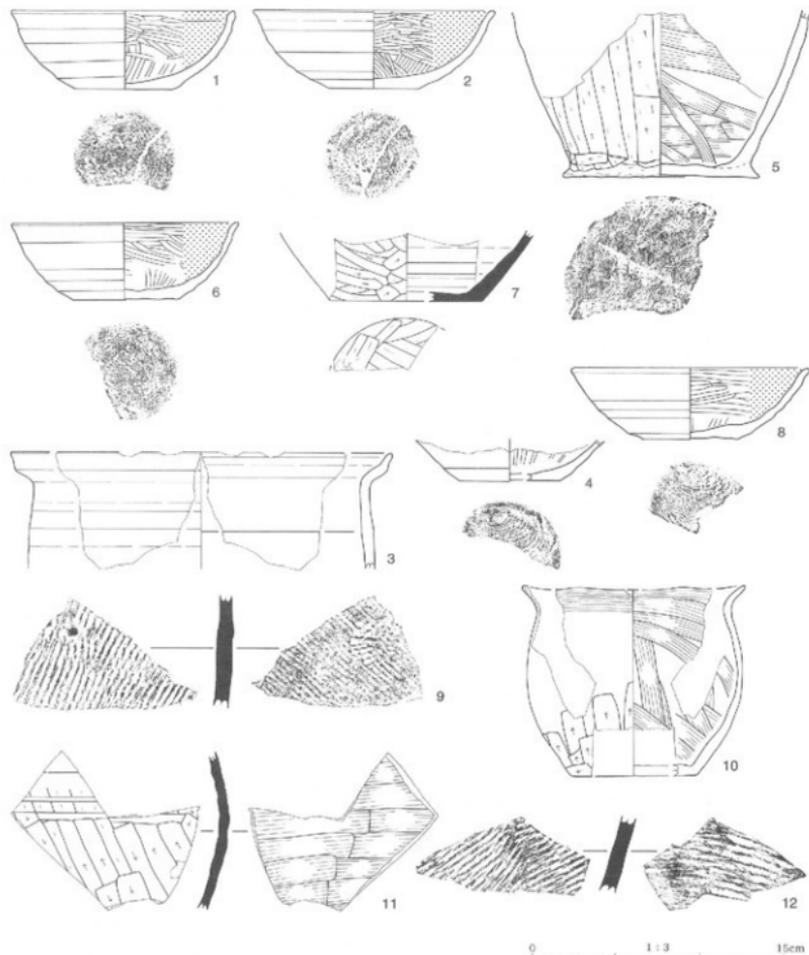
50点出土し、全点掲載した。RD012土坑のような縄文時代の土坑もあるので、混入の可能性も捨てきれないが、1、4、5、49、50を除けば、その出土位置から、ほとんどが平安時代に帰属するものと思われる。1、50は縄文時代、49は近世以降、4、5は、出土位置から縄文時代の可能性もある。これらを除くと砥石がほとんどであることも、平安時代の可能性を裏づけるものであろう。すなわち、鉄製品の普及を物語り、古代以降の砥石としてしばしば使われる白色凝灰岩は入手しがたいために（一遺跡で3点以上出土することは少ない）、周囲にあった石で代用したものと思われる。なお、磨石、敲石の類（磨炭器類）（2、3、6～8）も、平安時代に帰属する可能性があり、これらを必要とする生業が、この時代まで持続していたのかも知れない。

3. 木製品（第39～40図、写真図版31～33、第1表、観察表は写真図版の方にある）

木製品は、中世の溝底から発見された2点（1、2）と南区の泥炭層から発見された約116点である。後者は、出土層から平安時代の可能性が高い（9世紀）が、明瞭な加工痕を持つものは少なく、付近で伐採して不要のものを捨てたといった状態に近い。

南区出土品も全て登録し、原則として、現地番号を付けて取り上げたものと加工痕を持つものは全て掲載する方針だったが、紙幅の関係で難しく、表記載のみで済ませたものがある（第1表）。不掲載品（表に示したものを除く）は、82が32cmでやや大きい他は、全て20cm未満の小片である（加工痕なし）。なお、第27図で木32として取り上げたものは、手違いで掲載できなかったが、90×5.1×5.8cmの角材状で欠損しており、重さ1.04kg、半円形の加工痕が2箇所認められる。木31は、捜したがなぜか見あたらない。お詫び申し上げる次第である。重さは、いずれも濡れた状態で量り、1、2以外は、4kgまでは10g刻みのバネ秤で、それ以上は体重計で計測した。

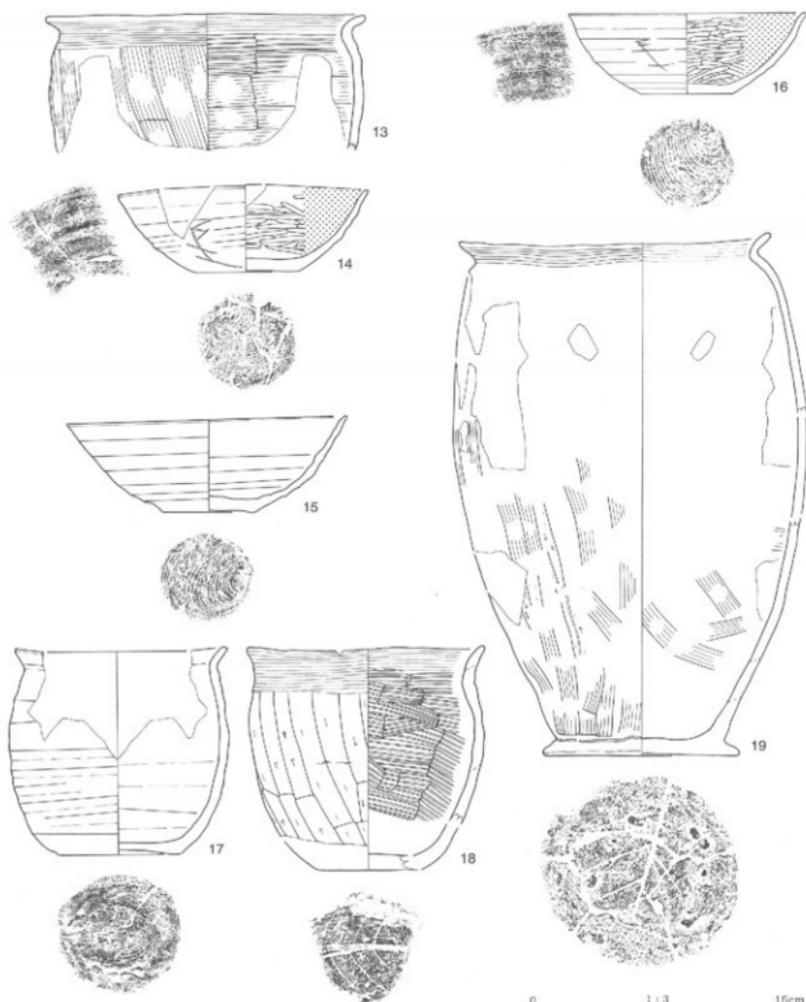
表の補足。1は、R G007溝底から10cmくらいの高さで発見された筒状の木製品である。ほぼ水平の状態出土されたが（写真図版21）、スコップで溝の掘り下げをしている最中に発見されたので、どの程度原位置をとどめているか定かでない。また、表に示したように一部欠損した状態で出土したが、これも調査時の欠損の可能性が高く、完形であったものと思われる。厚さは不均質で場所によって異なり、柄の部分と片側が薄めである。側面には工具による加工痕が認められ、先端の弧を描く部分は、加工によるものか摩滅しているのか不明だが、非常になめらかである。類例として、岩手県花巻市笹間館跡CⅣa 7井戸井戸連土下位出土例があるが（(財)岩手県文化振興事業団1988：第343図24）、残念ながら井戸の時期は特定されていない。



土器観察表

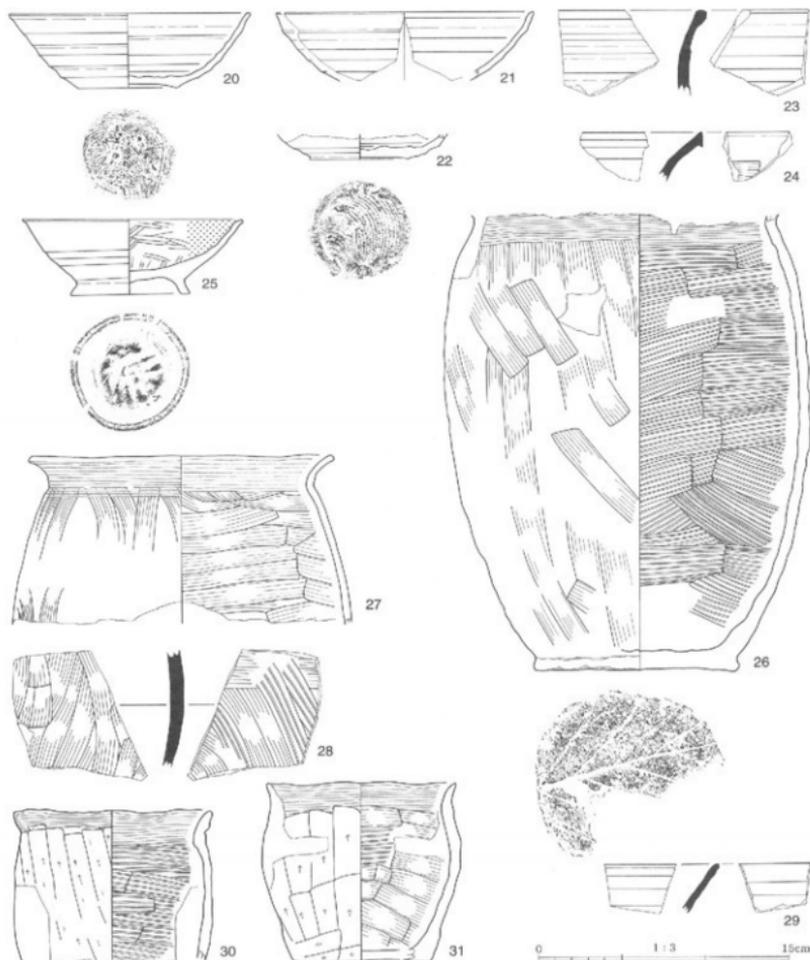
| No. | 出土地点・層位 | 器種・部位 | 残存 状況 | 外 面 (上縁部・胴部・底) | 内 面 (口縁部・胴部・底) | 備 考 | 本文 記載 |
|-----|-----------------------------|---------|----------|-------------------|-------------------|------------------|----------|
| 1 | RA013住居No.3 (北側) | 杯 | 2/3現存 | ロクロナデ。底:回転糸割 | ヘラミガキ | 外面黒色染付、内面黒色染付 | p.41 |
| 2 | RA013住居No.4 (東)、No.4の下 | 杯 | 1/4現以上 | ロクロナデ。底:回転糸割 | ヘラミガキ | 内面黒色染付、外やや摩耗 | |
| 3 | RA013住居No.5 (北西マド土器土坑内) | 蓋・1/4胴部 | 1/5現 | ロクロナデ | ロクロナデ | 内面一部スス付着、外やや摩耗 | |
| 4 | RA013住居No.5 (北西マド土器土坑内) | 片・残存 | 1/3現以下 | ロクロナデ。底:回転糸割 | ヘラミガキ | 外やや摩耗、内面一部スス→内面? | p.41 |
| 5 | RA013住居No.9 (北西マド土器土坑) | 壺・胴・底 | 1/3現以下 | ヘラタズリ。底:木製箱 | ヘラナデ | 再刷二次染付で赤い | p.41 |
| 6 | RA013住居北西土坑。北西遺構 | 杯 | 2/3現以下 | ロクロナデ。底:ヘラタズリ | ミガキ | | |
| 7 | RA013住居北西遺構。1層? | 飯椀・底 | 1/4現以下 | ヘラタズリ | ロクロナデ | | |
| 8 | RA013住居北西遺構内土坑 | 杯 | 1/3現以下 | ロクロナデ。底:回転糸割 | ヘラミガキ | 内面黒色染付、外やや摩耗 | p.41 |
| 9 | RA013住居北西マド土器土坑。2~3現 | 蓋・壺・胴 | 破片 | 平行タタキ目 | 高て目取(平行タタキ目) | 内面黒色染付、外やや摩耗 | p.41 |
| 10 | RA013住居Q1の3Q1土坑。Q1。1層内土坑。1層 | 蓋 | 1/2現以下 | (1) ロクロナデ。目:ヘラタズリ | ヘラナデ | 外面自然釉付着 | |
| 11 | RA013住居Q2 | 飯椀・蓋 | 破片 | ロクロナデ→ヘラタズリ | ロクロナデ | 内面黒色→外黒上。底面塗不明 | p.41 |
| 12 | RA013住居Q3 (南西) 掘り方 | 飯椀・蓋 | 破片 | 平行タタキ目 | 高て目取(平行タタキ目) | | |

第32図 土師器・須恵器(1)



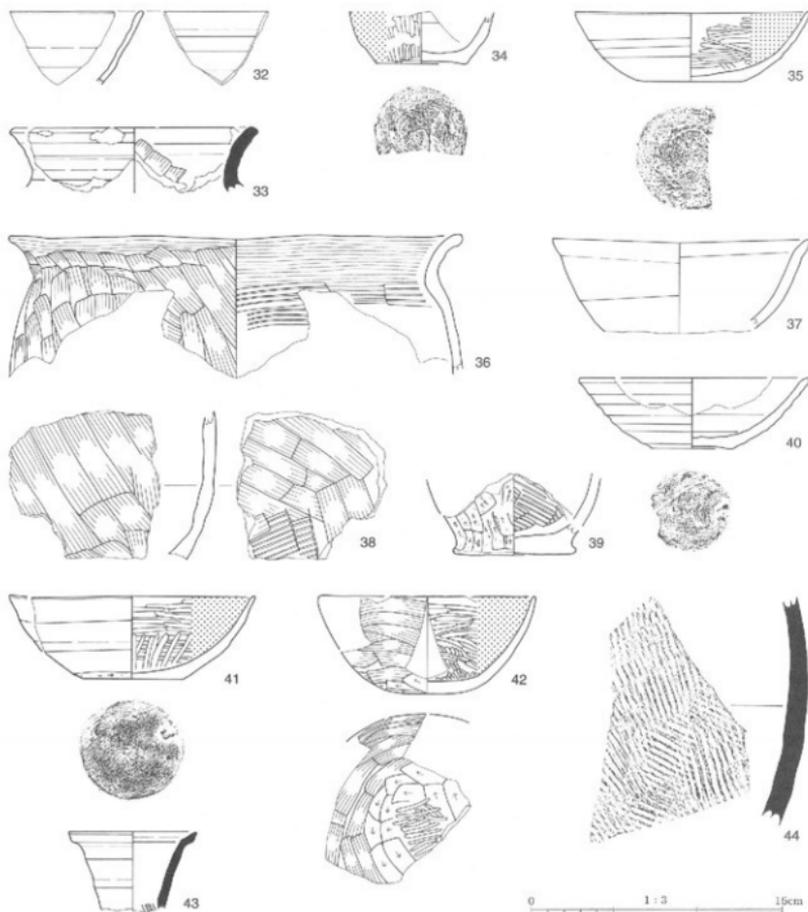
| No. | 出土地点・層位 | 器種・部位 | 残存 状況 | 外 装 (口縁部を除く) | 内 装 (口縁部を除く) | 備 考 | 本文 記載 |
|-----|------------------------------------|--------|----------|-------------------|-------------------|------------------|----------|
| 13 | RA013田原橋土止坂アロッタ、Q (後前) 掘り方 | 壺・打一胴上 | 1/4残以下 | 白:ヨロナテ、黒:ヘウナテ | 白:トメ・ヨロコナテ、黒:ヘウナテ | 内装スチ付巻 | |
| 14 | RA014住居No.1a | 埴 | 焼定形(断) | 白:ヨロナテ、黒:回転糸切 | 白:ヨロコナテ、黒:ヘウナテ | 配号?白網・内装黒色粘糊 | p.41 |
| 15 | RA014住居No.1b、Q3、2層 | 埴 | 焼定形(断) | 白:ヨロナテ、黒:回転糸切 | 白:ヨロコナテ | 外装黒泥・内装黒土網にしては厚い | p.41 |
| 16 | RA014住居No.2 | 埴 | 焼(一次) | 白:ヨロナテ、黒:回転糸切 | 白:ヨロコナテ | 配号?白網・外装付黒泥 | p.41 |
| 17 | RA014住居No.2 FNo.131a→平天巻形、RA013層Q4 | 壺 | 1/2残以上 | 白:ヨロナテ、黒:回転糸切 | 白:ヨロコナテ | 外装黒泥で厚い | p.41 |
| 18 | RA014住居No.2 FNo.2,4,5、黒カマ下?? | 壺 | 2/3残以上 | 白:ヨロコナテ、黒:ヨロコナテ | 白:トメ・ヨロコナテ、黒:ヘウナテ | 外装白・木炭灰・内装スチ付巻 | p.41 |
| 19 | RA014住居No.2 No.6,7土赤→安室製所 | 壺 | 1/2残以下 | 黒:ヘウナテ→ヘウナテ・ヨロコナテ | 白:ヨロコナテ | 外装:木炭灰 | p.41 |

第33図 土師器・須恵器(2)



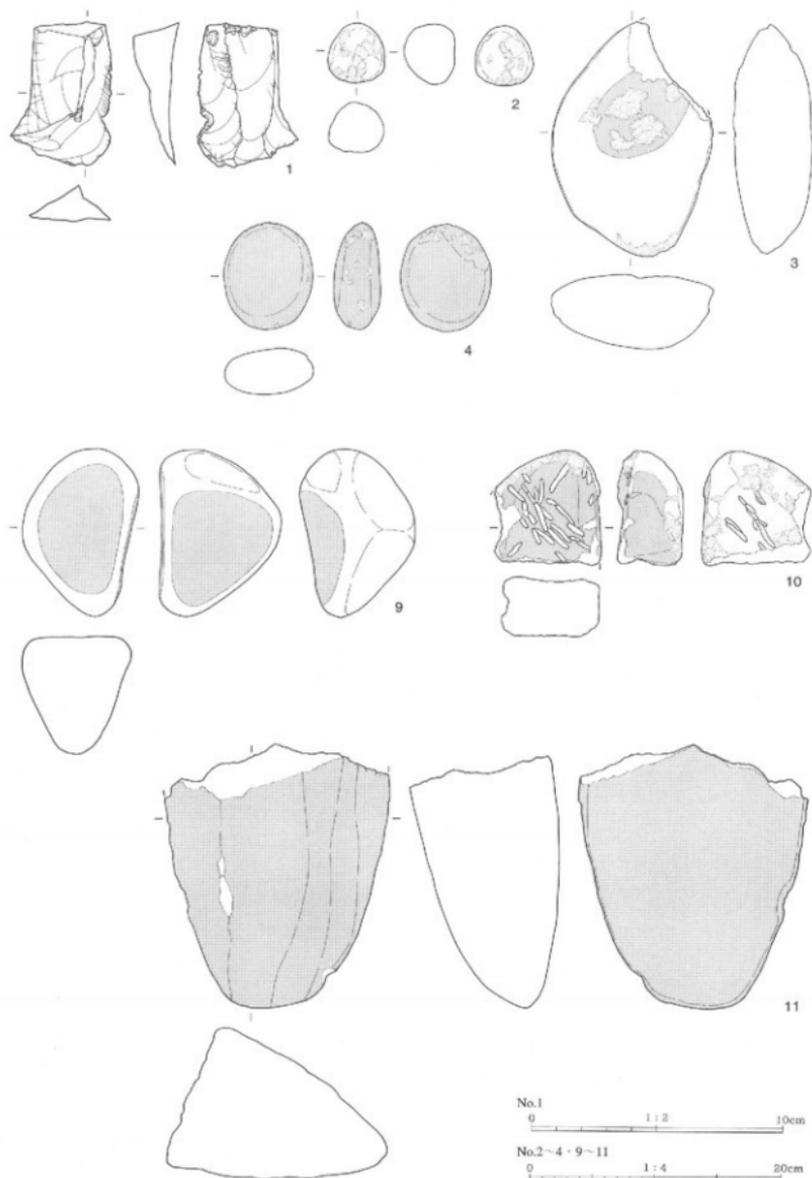
| No. | 出土地点・部位 | 器種・部位 | 残存 状況 | 外 面 (口縁部・胴部・底) | 内 面 (口縁部・胴部・底) | 備 考 | 本文 表紙 |
|-----|---------------------------|--------|----------|-------------------|-------------------|------------------|----------|
| 20 | RA014生活実用カタマ下上段 (写真図版10下) | 鉢 | 完整 (破) | ロタロナデ 灰・黒磁系刷 | ロタロナデ | 内外一部タール状スチ付着 | p.42 |
| 21 | RA014生活実用カタマ下下、Q2 | 鉢 | 1/5以下 | ロタロナデ | ロタロナデ | | |
| 22 | RA014生活実用カタマ下下 | 鉢 | 底・底縁 | ロタロナデ 灰・黒磁系刷 | ロタロナデ | 外底スチ付着 | |
| 23 | RA014生活Q2 | 底中央・口縁 | 破片 | ロタロナデ | ロタロナデ | 破片形状 | |
| 24 | RA014生活Q2破片 | 底中央・口縁 | 破片 | ロタロナデ | ロタロナデ | 片断形状 | |
| 25 | RA015生活カタマ最上段底 (写真図版11) | 内付鉢 | 8(底、底) | ロタロナデ (摩耗ひたひ) | ヘラミガキ | 片断形状・内付形状・内底に磁系刷 | |
| 26 | RA015生活カタマ最上段底 (写真図版11) | 底・底縁 | 1/2以下 | ヘラナーメ口：ロタロナデ | ハケメ 灰付瓦ナデ? | 外底本底面・底土割合不明 | p.42 |
| 27 | RA015生活実用出し物出由 | 底・口・胴部 | 1/4以下 | ヘラナーメ口：ロタロナデ | ヘラナーメ口：ロタロナデ | 内口縁黒塗・内外手触 | p.42 |
| 28 | R0018土片 | 底中央・口縁 | 破片 | ヘラナーメ (ケズリ) | ヘラナーメ | 外“磁系”はナマにない | |
| 29 | R0018土片 | 底中央・口縁 | 破片 | ロタロナデ | ロタロナデ | | |
| 30 | RD018土片 | 底中央・口縁 | 1/4程度 | ロタロナデ | ロタロナデ | | |
| 31 | RD018土片、R2911群式patのc、その下 | 底 | 1/4程度以下 | ロタロナデ 刷付・ヘラナーメ | ロタロナデ・ハケメ・ロタロナデ? | 内外底面・底面不連続 (磨に似) | p.42 |

第34図 土師器・須恵器 (3)

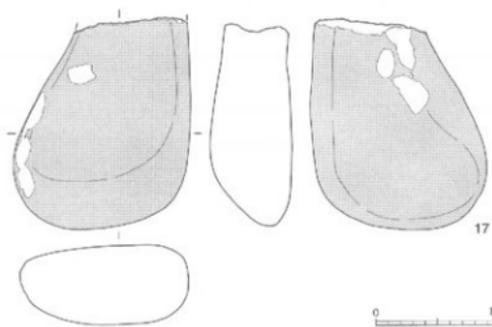
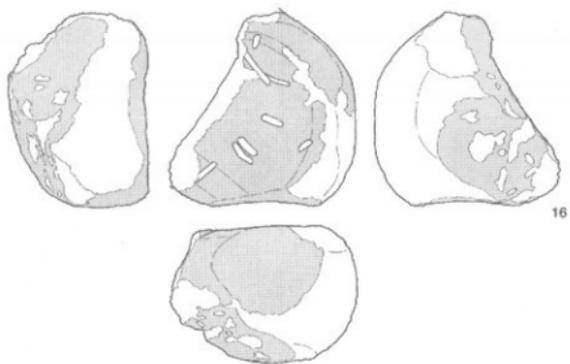
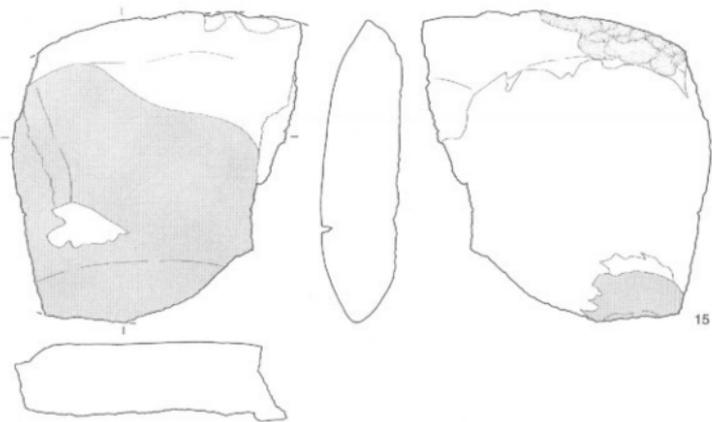


| No. | 出土地点・層位 | 器種・部位 | 坑層 状況 | 外 面 (口縁部・肩部・腹部) | 内 面 (口縁部・腹部・底部) | 備 考 | 本文 記載 |
|-----|---------------------|---------|----------|--------------------|--------------------|---------------------|----------|
| 32 | RD018土坑壺 | 体・口縁部 | 破片 | 摩耗ひどい | 摩耗ひどい | 底面黒土器? | |
| 33 | RD019土坑 | 腹面中央・口 | 1/5程度以下 | ロクロナダ | ロクロナダ・ヘラナダ | | |
| 34 | RC007溝No.1 | 小皿・底部 | 2/3程度以下 | ヘクミガキ・底; 斜線赤切 | ロクロナダ | 黒色土器・外側化粧片 | |
| 35 | RD008溝No.1 | 体 | 2/3程度以下 | 摩耗ひどい | 1/3程度 | 内面黒色土器 | |
| 36 | RC008溝No.2 | 頸・口縁部 | 1/3程度以下 | ロクロナダ・ヘラナダ・底・ヘラナダ | ハクメー口; 黒コナダ | 内面黒色土器・底; 斜線赤切・ヘラナダ | |
| 37 | RZ013柱穴群pit1のa、中東区南 | 体 | 2/3程度以下 | 摩耗ひどい | 摩耗ひどい・ロクロナダ? | 内面黒色土器・底; 斜線赤切・ヘラナダ | |
| 38 | RZ013柱穴群pit1のb | 頸・肩部 | 破片 | ヘラナダ (ケズ)に近い | ハクメーヘラナダ | 外・二次焼成で赤い・内面黒色土器 | |
| 39 | RZ013柱穴群pit2のa | 頸・肩部 | 底一割 | ヘラナダ (ケズ)に近い・斜線赤切 | ハクメーヘラナダ | 内面黒色土器・外側化粧片 | p.42 |
| 40 | 北北区トレンチ南・目LL中砂層 | 杯 | 底のみが残り | ロクロナダ・底; 斜線赤切 | 摩耗ひどく不明 | 外も化粧片 | |
| 41 | 中東区南 | 杯 | 底のみが残り | ロクロナダ・底; ヘラナダ | 黒土器 | 外側黒色土器・内面黒色土器 | p.42 |
| 42 | 南区トレンチT1東 | 杯 | 2/3程度以下 | ヘラナダ・底・ヘラナダ | 1/3程度 | 内面黒色土器・外側化粧片 | |
| 43 | 南区トレンチT1北東部 | 腹面中央・口縁 | 3/4程度以下 | ロクロナダ (やや摩耗) | ロクロナダ・底・ヘラナダ? | | |
| 44 | 南区トレンチT2泥炭層 | 頸・肩部 | 破片 | 平行タタキ目 | 古て具板? (一連四目) | | |

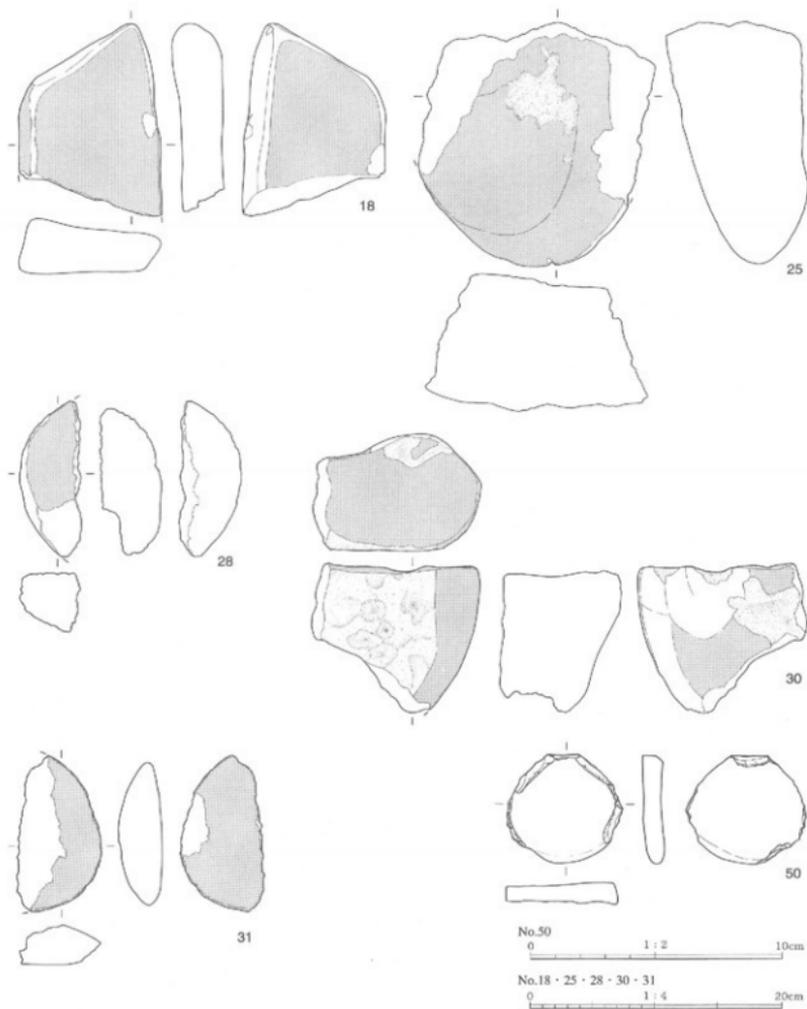
第35図 土師器・須恵器 (4)



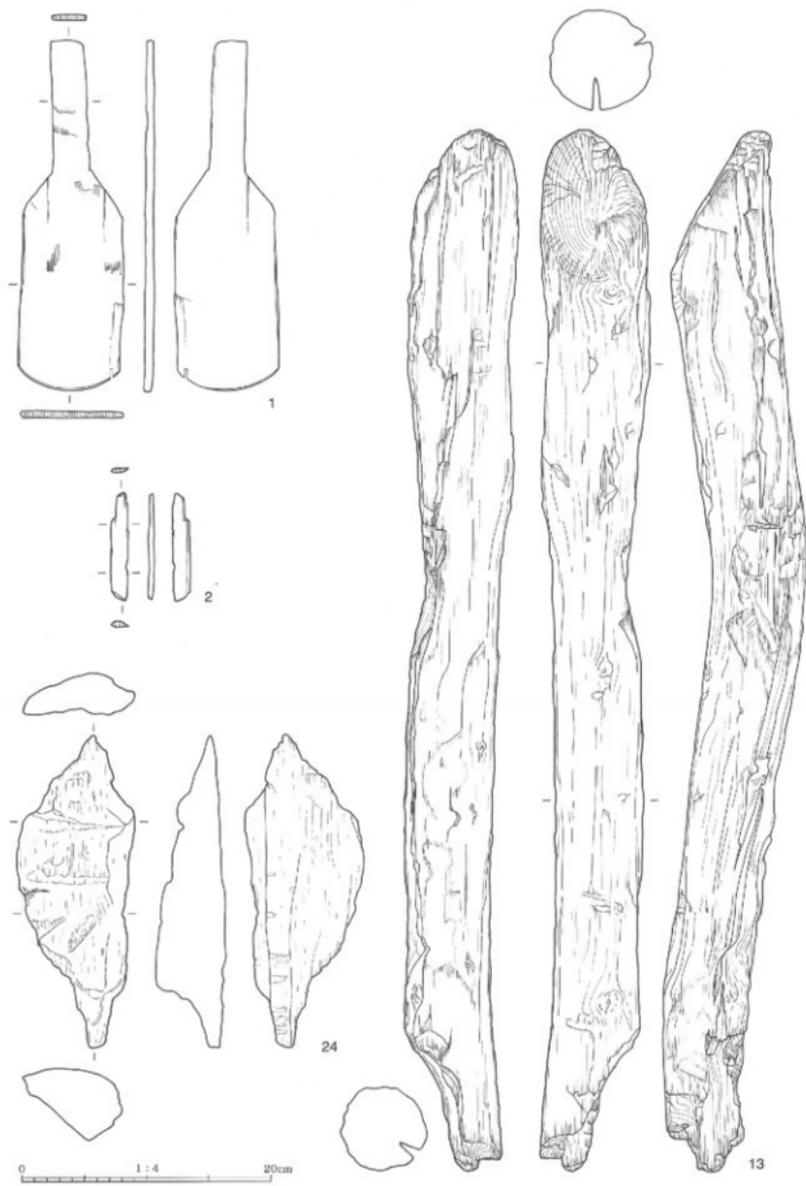
第36図 石器(1)



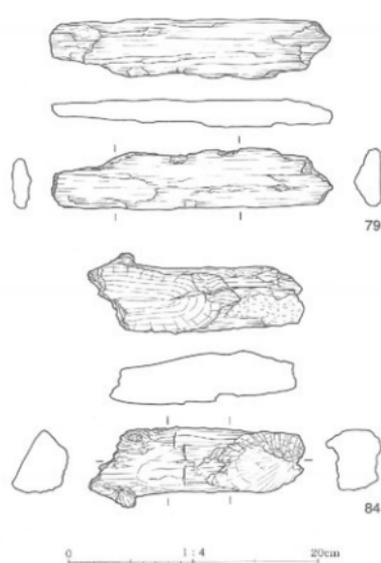
第37図 石器 (2)



第38図 石器(3)・石製品



第39圖 木製品 (1)

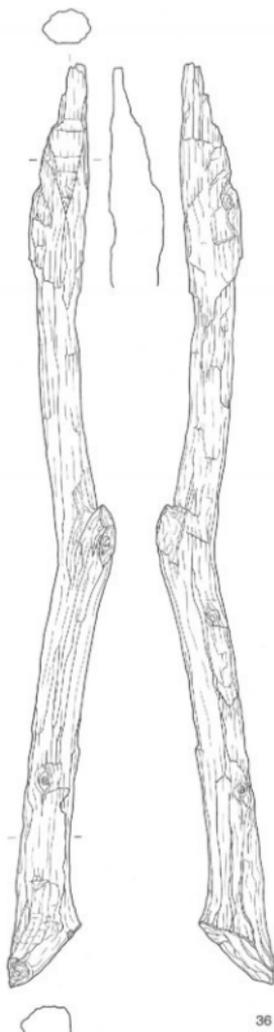


79

84

第1表 不揃截のうち加工痕のある木製品

| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 現存部位 | 最大寸法(cm) | 重量(g) | 備考 |
|-----|---------|------|------|---------------|-------------------|-------------------|
| | | | | 長さ | 幅 | |
| 14a | 西区 本11 | (断定) | 破片 | 9.7 3.4 | 0.8 | |
| 14b | 西区 本11 | (断定) | 破片 | 10.7 2.7 | 0.8 | |
| 14c | 西区 本11 | (断定) | 破片 | 9 3.3 | 1 | 40 |
| 14d | 西区 本11 | (断定) | 破片 | 7.7 2.2 | 1 | |
| 19 | 西区 本15 | (水浮) | 破片 | 5.9 3.3 | 1.5 | 50 |
| 22a | 西区 本18 | (水浮) | 破片 | 11.7 2.8 | 2.2 | 40 |
| 22b | 西区 本18 | (水浮) | 破片 | 10 3 2.2 | 40 | |
| 22c | 西区 本18 | (水浮) | 破片 | 7.3 3.4 | 1.4 | 20 |
| 22d | 西区 本18 | (水浮) | 破片 | 7.2 1.8 | 0.7 | 10 |
| 23a | 西区 本19 | 榫突? | 欠損 | 26.5 4 2.8 | 170 | |
| 23b | 西区 本19 | 榫突? | 欠損 | 26.4 4 2.4 | 80 | |
| 23c | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 12 2.7 | 1.6 | 30 |
| 23d | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 10 1 1.2 | 10 様? | |
| 23e | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 10 1.5 1.3 | 10 様? | |
| 23f | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 7 2.5 1.4 | 10 | |
| 23g | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 6.6 2.3 1.9 | 10 様? | |
| 23h | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 6 2.7 2 | 15 | |
| 23i | 西区 本19 | (水浮) | 破片 | 7 2.2 1.5 | 10 | |
| 29a | 西区 本33 | (水浮) | 破片 | 14.3 1.8 | 1.6 | 30 |
| 29b | 西区 本25 | (水浮) | 破片 | 14.2 1.9 | 0.8 | 10 |
| 31a | 西区 本27 | (断定) | 欠損 | 38 5.3 | -4 | 360 (写真なし=不明な破断部) |
| 31b | 西区 本27 | (水浮) | 破片 | 11.7 3.2 | 1.8 | 30 |
| 31c | 西区 本27 | (水浮) | 破片 | 6.9 1.2 0.9 | 8 様 | |
| 31d | 西区 本27 | (水浮) | 破片 | 4.7 2.6 | 1.4 | 10 |
| 31e | 西区 本27 | (水浮) | 破片 | 5.8 1.6 | 0.7 | 2 |
| 32a | 西区 本28 | (水浮) | 破片 | 15 5.5 1.9 | 90 | (写真なし=不明な破断部) |
| 32b | 西区 本28 | (水浮) | 破片 | 9.3 3.3 1.4 | 20 | |
| 32c | 西区 本28 | (水浮) | 破片 | 11.5 2.7 0.6 | 10 | |
| 35a | 西区 本33 | (榫突) | 欠損 | 33.2 5 5.2 | 350 (ナラ製かと判断して測定) | |
| 35b | 西区 本33 | (水浮) | 破片 | 20.2 3.6 4.4 | 90 | |
| 35c | 西区 本33 | (骨) | 欠損 | 20.7 4.6 3.1 | 250 | 榫突あり |
| 35d | 西区 本33 | (水浮) | 破片 | 16 3.2 2.1 | 60 | |
| 39 | 西区 本5の下 | 榫釘? | 欠損 | 29 5 3.4 | 200 | 榫目ナラ材点による判断 |
| 39a | 西区 本5の下 | 榫釘? | 欠損 | 19 7.5 4 3.80 | 先端部から加工? | |
| 44 | 西区 本6の下 | (水浮) | 破片 | 13.5 3.2 1.7 | 50 | 一字次ナラ状切痕? |
| 43 | 西区 本6の下 | (榫突) | 破片 | 13 4.5 2.9 | 80 | 先端尖らせている? |
| 45 | 西区 本6の下 | (水浮) | 破片 | 12.4 3.7 1.5 | 30 | 一字次ナラ状切痕? |
| 54 | 西区 本6の下 | (榫突) | 欠損 | 41 3.7 4.8 | 480 | 先端削いでいる?加工面? |
| 55 | 西区 本6の下 | 榫釘? | 欠損 | 30.5 5 2.5 | 200 | 榫部加工痕あり? |
| 57 | 西区 本6の下 | (榫突) | 欠損 | 21 2.3 2.4 | 70 | 先端尖らせている? |



36

| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 現存部位 | 最大寸法(cm) | 重量(g) | 備考 |
|-----|----------|------|------|--------------|-------|------------|
| | | | | 長さ | 幅 | |
| 59 | 西区 本6の下 | (榫突) | 破片 | 16.8 2.8 2.7 | 80 | 加工痕ある? |
| 60 | 西区 本6の下 | 釘? | 破片 | 16.7 9.7 4.6 | 260 | 加工痕ある? |
| 61 | 西区 本6の下 | 釘? | 破片 | 17 2 1.7 | 40 | 先端尖らせている? |
| 71 | 西区 本6の下 | (水浮) | 破片 | 8.9 3.7 1.1 | 30 | 一字次ナラ状切痕 |
| 74 | 西区 本12の下 | (水浮) | 破片 | 25.7 6.8 3.8 | 310 | 榫釘? |
| 81 | 西区 本32の下 | (骨?) | 欠損 | 41.7 3.6 3.9 | 460 | 榫部加工痕らしきもの |
| 83 | 西区 71室の本 | 榫釘? | 破片 | 13.3 6 5.8 | 280 | 先端尖断部 |
| 85 | 西区 北郷4室 | 榫釘? | 破片 | 6.5 4 3.9 | 140 | 榫部加工痕? |

第40図 木製品(2)

参考文献

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『笹間館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第124集

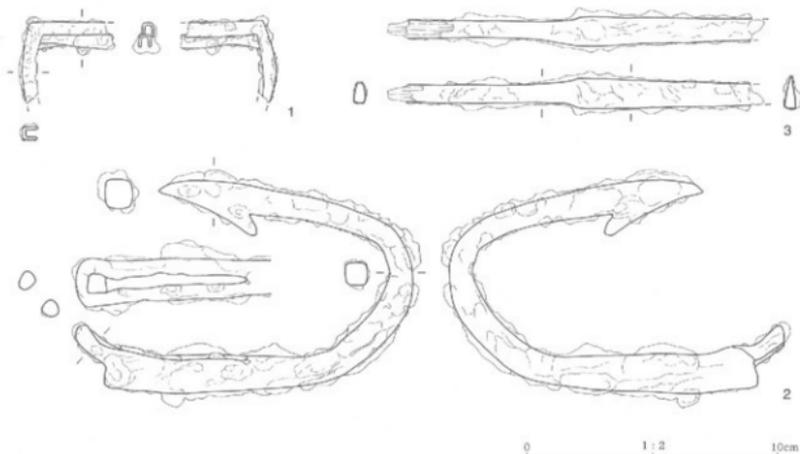
4. 鉄製品 (第41図、写真図版34)

3点出土し、全て掲載。x線写真も撮影したが、実測図以上のことはわからなかったので割愛した。全てRA013住居跡から出土している。

表の補足。1は、末端を保護するためにはめ込む金具のようなのだが、途中で折れて重なってしまっている。強固にくっついて無理に剥がそうとすると全体が壊れそうなので、現状のまま実測した。基本的な形は、岩手県浄法寺町飛鳥台地I遺跡(財)岩手県文化振興事業団 1988:第218図597)や同宮古市鳥田II遺跡(財)岩手県文化振興事業団 2004:第2分冊図版129の187)などの刀装具の鞘尻金具に似るが、幅がずっと狭い。幅や大きさも含めて、岩手県盛岡市飯岡沢田遺跡出土例(財)岩手県文化振興事業団 2003:第111図331)に非常によく似ているが、種類は特定されていない。

2も、不明品。柱穴上床直上から発見された(写真図版5のNo.2)。片端に返しがつき、反対側の端は何かを差し込むようなソケット状になっており、その先端はつり下げのに都合の良いような弧状の把手様のものが付く。RA013住居の西側カマドの北脇床直上から発見され、同様のものが、岩手県盛岡市本宮熊堂B遺跡(第25次)でも、同じくカマド付近から発見されたそうである(報告書近刊)。サケ鉤(北上市立博物館 1982:p.14など)と指摘されたが、太く立派すぎるように思われる。鮭を捕る道具とした場合、カマド付近という出土状況にあまり必然性がないような気もする。あるいはカマド脇で使う天井から何か重いものを下げる道具か(鮭の燻製用?)。

3は、調査時に折ってしまい図示した以外に小破片が残っており、元は完形品であったか。



| No. | 出土地点・相位 | 種類 | 保存状況 | 最大直径(mm) | | | 重量(g) | 備考 | 本文記載 |
|-----|-------------------------|----|-------|----------|------|------|--------|------------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | |
| 1 | RA013住居 No.1 (1層上室・地上脇) | 不明 | 欠損 | 3.9 | 3.55 | 0.7 | 7.3 | 穂尻金具に似ている? | p.52 |
| 2 | RA013住居 No.2 (1層) | 不明 | ほぼ全形? | 13.58 | 9.15 | 1.7 | 115.99 | | p.52 |
| 3 | RA013住居 No.8 (北のヤブ脇土柱内) | 刀身 | 刃先欠損 | 15.12 | 1.63 | 0.74 | 26.69 | 柄木一断片残る | p.52 |

第41図 鉄製品

参考文献

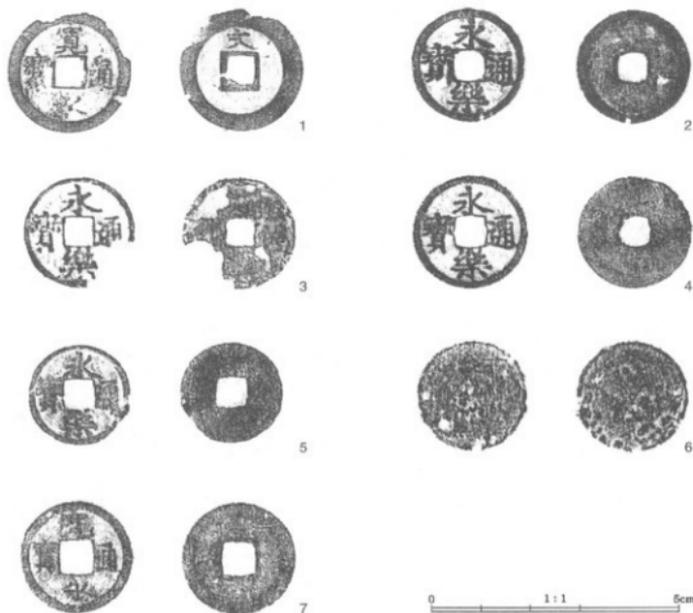
- (財)岩手県文化振興事業団歴史文化財センター 1988 『飛鳥台地1遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団歴史文化財発掘調査報告書第120集
 2003 『飯岡沢田遺跡第3次発掘調査報告書』(第418集)
 2004 『島田II遺跡発掘調査報告書』(第450集)
 北上市立博物館 1982 『北上川の魚とり』北上川流域の自然と文化シリーズ(4)

5. 銭貨(第42図、写真図版34)

7点出土し、全て掲載した。7のみ南区、他は中央区の出土で、5までRZ014柱穴群の柱穴からの出土である。本遺跡の銭貨は、全体として非常に薄いという印象が強い。

参考文献

- 永井久美男編 1996 『日本出土銭総覧 1996年度版』兵庫理蔵銭調査会
 矢部會吉 2004 『古銭と紙幣 収集と鑑賞 改訂新版』金園社



| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 金属の種類 | 残存状況 | 直径 (cm) | 重さ (g) | 発行年代 | 備考 | 写真 図版 |
|-----|--------------------|------|-------|------------|------------|-----------|---------|---------------------|----------|
| 1 | RZ014柱穴群c-1柱穴 | 寛永通寶 | 銅 | 一部欠損・磨め | 2.52 | 1.7 | 1668年以降 | 新貨水「文銭」→1668~1683年? | 34 |
| 2 | RZ014柱穴群c-2柱穴 | 水滸通寶 | 銅 | 一部欠損・磨消に磨い | 2.21 | 1.2 | 1408年以降 | | 34 |
| 3 | RZ014柱穴群c-3柱穴 | 水滸通寶 | 銅 | 一部欠損(反磨) | 2.28 | 1.3 | 1408年以降 | | 34 |
| 4 | RZ014柱穴群(RA014柱穴) | 水滸通寶 | 銅? | 完全 | 2.32 | 1.3 | 1408年以降 | | 34 |
| 5 | RZ014柱穴群(RA014柱穴内) | 水滸通寶 | 銅 | 完全・薄い | 2.05 | 0.6 | 1408年以降 | | 34 |
| 6 | RA015巨磨上・I下層 | 一銭康安 | 銅 | 完全 | 2.3 | 3.1 | 1917年以降 | 大正六年以降 | 34 |
| 7 | 南区北瀬本平ば、E11L層 | 寛永通寶 | 銅? | 完全 | 2.32 | 1.6 | 1668年以降 | 新貨水 | 34 |

第42図 銭貨

Ⅵ. ま と め

今回の調査で、遺構は、縄文時代の袋状土坑1基、平安時代の竪穴住居跡3棟、古代の土坑6基、柱穴群1、木の集中箇所1箇所、古代以降の土坑1基、中世の曲輪1箇所、溝(堀)跡4条、土坑1基、柱穴群2、中～近世の柱穴群1が確認された(第6～9図)。

遺物は、土師器・須恵器大コンテナ(30×40×30cm)約1箱、石器・石製品50点、木製品約118点、鉄製品3点、銭貨7点、近代以降の陶磁器類大コンテナ約0.5箱が出土した。

以下、時代別にまとめていくが、前回調査(第5・6次)の報告書がまだ刊行されておらず詳細は不明なので、前々回調査(第3・4次)と今回の調査を中心にする。また、引用した遺跡報告書の番号は、第Ⅱ章に示したので、文献名についてはそちらを参照願いたい。

・縄文時代

今回の調査では、北南区のRA013住居跡の床下から袋状土坑(RD012)が検出された。第36図1の石器製作時の剥片、その他磨削器類の一部は、この時代に属するものであろう。RD012土坑は、覆土が黒ボク土であることから、縄文時代でも後半であろう。

第4次調査では、遺構外(RD012土坑の南側約15m)から縄文後期初頭～前葉らしい土器片が出土しており、第3次調査では石鏃が出土している。陥し穴状遺構とされている土坑もあるが、形とその浅さから竪間である(周囲に柱穴状土坑が検出されていることから、大幅に削平されたためとは考えにくい)。なお、隣接する台太郎遺跡では、晩期集落跡が(第3図2。文献40)、新堰端遺跡では縄文時代(後期末?)の貯蔵穴がまとめて発見されている(第3図22。文献52、53)。

・平安時代(9世紀中ば～10世紀初頭前後)

今回の調査の主体をなすもので、遺物はほとんどがこの時期に属するであろう。竪穴住居跡4棟?、土坑6基?、木の集中箇所1箇所がある。

これまでの調査でも、この時期の集落跡が主体で、集落は自然堤防南斜面から南側の湿地際まで広がる(この時期の水位は現在より低かったか)。湿地からは、今回の木や漆器・箸・曲げ物などの木製品、モモやウメなどの種実、昆虫などの遺体出土した。なお、前回の調査では、墨書・刻書土器が多く出土し、封緘木簡が見られ、数点であるが9世紀初頭と考えられる須恵器も出土したそうである。

本遺跡の周囲にも多くの古代集落が見られるが(第3図)、住居の大半は、本遺跡と同じく9世紀中頃～10世紀初頭前後である。奈良時代の集落も見られるが、志波城期の9世紀初頭は非常に少ない。

・中世

曲輪、溝(堀)跡4条、柱穴群2～3箇所(土坑1基含む)が検出されたが、遺物は、RG007溝底の木製品、柱穴群出土の銭貨(永楽通宝)4点と少ない。

これまでの調査でも、平安集落と二分する成果が得られており、特に広い前々回の調査区では、全体構造を推定できるような堀が確認されている(第6図)。今回の調査区(北区)が遺跡の北西端にあたり、曲輪が確認されたが規模や「作事」跡・遺物がそれほどでもないことから、東側に隣接する部分に主郭が存在すると想像される。ここは、平成18年度調査区に相当し、その成果が期待される。

向中野館については、『志和軍記』に「向中野館向中野金吾領」の記述はあるが明確な記録はないように詳細は不明である(文献15)。この地を押さえる飯岡氏の飯岡館(写真図版1の飯岡山)の「出城」で北館と南館の二つの館があったとの伝承があり、地形から、これまでの調査区は北館跡の

可能性が高いであろう。前々回の調査では、遺構外から中国染付等の小破片が出土しているが、これまで時期を特定できるような遺物は出土していない

隣接する台太郎遺跡の中央で、13世紀後半の不整五角形プランの居館が検出されているが、報告書が刊行されていないので詳細は不明である(文献58:p.38)。南側からは墓坑群や社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も検出され(文献24)、出土陶磁器の年代から15世紀あたりまでの存続が考えられている。なお、この地域の館に詳しい室野秀文氏は、文献58の中で、**向中野館の年代**について「館跡を構成する曲輪が方形を基調としたプランであることや、北館付近では堀や土橋、小さな曲輪などの複雑な配置であることなどから、概ね16世紀を中心とする年代が考えられる」(同上)としている。

・近世以降

近世。今回の調査では、中央区に検出されたR Z 014柱穴群と銭貨(寛永通宝) 2点しかないが、前々回の調査では陶磁器片が出土している。今回の調査結果も合わせれば、18世紀以降は継続して人が住んでいたことは確実で、近代には、南側から水を引き中央区東半に水田を作り、西半に屋敷及び池があったと推測される。

Ⅶ. 自然科学的分析

分析を委託した理由と結果について若干コメントする。本来なら第V章の後に入るべきものだが、種々の事情で最後になったことをお断りしておく。

・向中野館遺跡より出土した木製品と加工材の樹種

No. 1、2は、中世のR G 007溝底から出土し、他は、南区の泥炭層の集積地点から出土したもので古代の可能性が高いものである(第IV章参照)。当初の見込みより保存処理の必要のある木製品が少なかったため、自然木を含めて多めに同定していただいた。

中世のものは選択的にスギが使われ、その他の古代は、広葉樹を主体とする周囲に生育したと考えられるものであり、第IV章の第一次加工作業で不要のものを廃棄したという解釈に符合する。

・向中野館遺跡出土の昆虫分析

南区の泥炭層から多くの昆虫の羽が出土した(なぜか北区の泥炭層からは出土しなかった)。大型昆虫で、見た目からゲンゴロウかと思っていたが、ガムシであった。集落のそばということ、確かに生態から考えればこちらであろう。

・向中野館遺跡出土の大型植物遺体分析

中世のR G 007溝跡底付近から、葉が出土した。同定は難しいだろうと予測したが、「もしかしたら」との思いで、南区の泥炭層から出土した多くの植物遺体と共に同定を委託した。

結果はやはり芳しいものではなかったが、取り上げた土壌に含まれた種実を多く同定していただいた。遺構や遺物から、表1の試料のうち、R G 007は中世、南区は古代を主体とすると思われる。前者は人為による遺構内であり、同定結果を見ても、人間の生活により近い選択的な様相が窺われる。

・向中野館遺跡出土の火山灰分析

平安時代のR A 013住居跡の南西床付近から、火山灰とそれが焼けたりしきものがまぎって出土した。R D 017土坑上面にも火山灰が認められたが、手違いで採取されず委託できなかった。

結果は、火山灰は少なく**大部分は初段起源のプラント・オパール**であった。なお、まとまった炭化米が、周辺の飯岡林崎Ⅱ遺跡R A 004住居から発見されている(第3図35。文献33)。低地で水位に近い米が残ったと考えられ、西カマドの南西脇ということで本遺跡と同じだが、偶然の一致か。

向中野館遺跡より出土した木製品と加工材の樹種

吉川純子(古代の森研宄会)

1.はじめに

向中野館遺跡は盛岡市の南西部に位置し、宇石川により形成された沖積段丘上に立地する古代から中世の遺跡である。中世の館跡は曲輪の周囲に堀が巡らされており、曲輪の溝底から出土した箕状の木製品と板の樹種を調査した。また、平安時代には竪穴住居跡が発見され、旧河道である湿地堆積物からは伐採痕のある加工材などが多数発見され、これらのうち38点の木材の樹種を調べた。

2.同定結果

同定結果を表1に示す。No.1, No.2は中世の溝から出土した薄板で、いずれもスギが用いられている。No.3以降は平安時代の河道から出土した加工材で、加工の程度は様々であった。クリは6点で、先端加工棒、割材、杭状加工棒などに利用されていた。コナラ節は30点で、加工棒や割材などに使われていた。トネリコ属は1点で、厚板に使われていた。木片のうち1点は樹皮であった。

表1 向中野館遺跡より出土した加工材の樹種

| No. | 種類 | 樹種 | 状況 | No. | 種類 | 樹種 | 状況 |
|-----|-------|------|--------|-----|-----------|-------|--------|
| 1 | 箕状薄板 | スギ | 砥目 | 21 | 木片 | コナラ節 | |
| 2 | 板 | スギ | 砥目 | 22a | 木片 | 樹皮 | |
| 3 | 先端加工棒 | コナラ節 | 丸木曲がり材 | 23a | 木片 | コナラ節 | |
| 4 | 曲がり材 | クリ | 板? | 24 | 小塊 | コナラ節 | 僅あり |
| 5 | 先端加工棒 | クリ | 丸木 | 25 | 割り材 | コナラ節 | |
| 6a | 丸木 | コナラ節 | | 26 | 杭状加工棒 | コナラ節 | 丸木 |
| 6b | | コナラ節 | | 27 | 木片 | クリ | 丸木 |
| 7 | 柱状? | コナラ節 | 8分割 | 28 | 木片 | コナラ節 | 丸木 |
| 8 | 柱状? | コナラ節 | 8分割 | 29a | 木片 | コナラ節 | |
| 9a | 木片 | コナラ節 | | 30 | 先端加工棒 | コナラ節 | 丸木曲がり材 |
| 9b | 木片 | クリ | | 31b | | クリ | |
| 10 | 四角棒 | コナラ節 | | 32b | 木片 | コナラ節 | |
| 11 | 割り材 | コナラ節 | 8分割材 | 33 | 割り材 | コナラ節 | |
| 12 | 丸木加工材 | コナラ節 | 樹皮つき | 34 | 先端加工棒 | コナラ節 | 丸木曲がり材 |
| 13 | 先端加工棒 | コナラ節 | 丸木むけ | 35a | 小片 | コナラ節 | |
| 15 | 割り材 | コナラ節 | 4分割 | 36 | 杭状加工棒 | クリ | 丸木 |
| 16 | 丸木加工材 | コナラ節 | | 37 | 木片 | コナラ節 | |
| 17 | 平割り材 | コナラ節 | | 79 | 厚板 | トネリコ属 | 砥目 |
| 18 | 割り材 | コナラ節 | | 80 | 先端加工棒 | コナラ節 | 分割材 |
| 20 | 割り材 | クリ | | 84 | 丸木先端削りめ切り | コナラ節 | 樹皮つき |

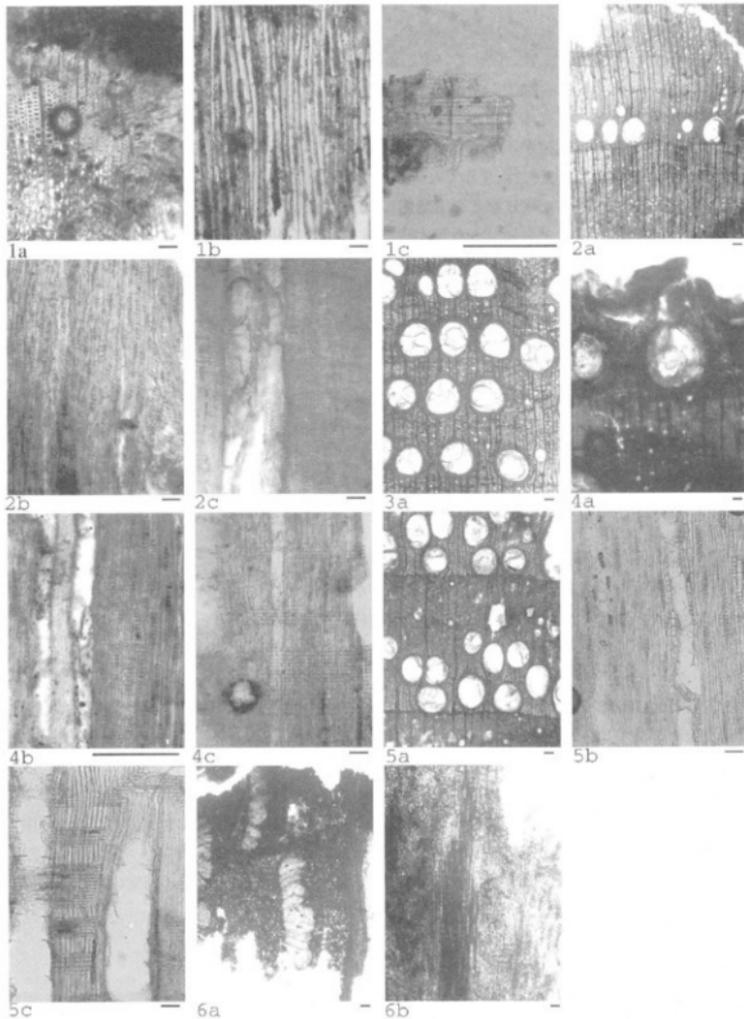
以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

スギ(*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.)D.Don): 早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野環孔はスギ型で横に長い楕円形となり、1分野に2~3個ある。

コナラ属コナラ節(*Quercus sect.Prinus*): 中型の道管が2、3列並びその後急に径を減じて液状に配列する環孔材。放射組織は単列と広放射組織があり、同性で道管の穿孔板は単一である。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.): 年輪の最初に大きな道管が2、3列配列し、その後急に径を減じて小さな道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で、道管内にはチロースが発達する。放射組織は単列で同性である。

トネリコ属(*Fraxinus*): 年輪のはじめに大きい道管が1列配列し、その後急に径を減じて、小さい道管が数個放射方向に複合して散在する環孔材。小道管の壁は厚く穿孔板は単一で内部にチロースがある。放射組織は同性で1~2列の比較的きれいな紡錘形。



図版1 向中野館遺跡より出土した木製品と加工材の顕微鏡写真

1.スギ(No.1 加工薄板) 2.コナラ属コナラ節(No.13 先端加工棒) 3.コナラ属コナラ節(No.11 分割材) 4.クリ(No.20 分割材) 5.トネリコ属(No.79 厚板) 6.広葉樹樹皮(No.32b 木片)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 スケール=0.1mm

3.考察

中世の溝跡から出土した板は、2点ともスギであった。スギは中世の東北では建築材のほか、曲げ物や形代、木簡などの用途に用いられていることが多い(山田1993)。

古代から出土した木材は、加工した材が21点、木片12点、板1点、丸木など4点であった。板はトネリコ属で、河川などに生育する種が多い。それ以外はクリとコナラ節で、周辺の微高地などに生育していたと考えられる。種が不明であった樹皮をのぞくと、すべて環孔材が用いられている。加工の状況を見ると、柱状加工材2点を除くと先端が加工された杭と割材、木片で構成され、土留め杭や建築材、それらを加工した残りなどを湿地内に廃棄したものと考えられる。山田(1993)によると、古代の東北地方ではクリとともにコナラ節が建築材や杭に多用される傾向があり、本遺跡でも植生に応じて周辺材を利用していた傾向が読み取れる。

引用文献

- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別第1号、植生史研究会、1-244.

向中野館遺跡出土の昆虫分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

向中野遺跡(盛岡市飯岡新田所在)は、雫石川右岸の沖積地に存在する。これまでの発掘調査により、縄文時代の土器片や平安時代の集落跡、中世の館跡が検出されている。今回は、古代の河川跡付近から検出された昆虫遺体の種類を知り、当時の環境に関する情報を得る。

1.試料

分析試料は2点(0912 南区 トレンチ北,0913南区 トレンチ1-2の間)存在する。これらは、当時湿地であった時期に形成された堆積物から検出された昆虫遺体である。

2.分析方法

試料をしばらく水に浸した後、双眼実体顕微鏡やルーペを用いて昆虫遺体を抽出した。この中から状態の良い物を10片について同定を実施した。これらについては、便宜上1-10の番号をふった。選択しなかった細片についても概観し、その傾向を把握することにつとめた。同定にあたっては、東京農業大学松本 浩一氏の協力を得た。

3.結果

結果を表1に示す。0912 南区 トレンチ1北は全てガムシである。本試料は右前翅基部の小盾板の収まるくぼみが2つの試料 (No.2と5)で確認できたため、少なくとも2個体が含まれていると考えられる。なお、細片を一括した試料(No.11)もすべてガムシであった。

一方0913 南区 トレンチ1-2もほとんどがガムシであった。それぞれ部位に重複するものが無く、1個体であると思われる。破損部位の突合せでは一致を見なかったが、おそらく破損時に接合部が細片に分割されたことが原因と考えられる。細片を一括した試料(No.12)もすべてガムシであった。

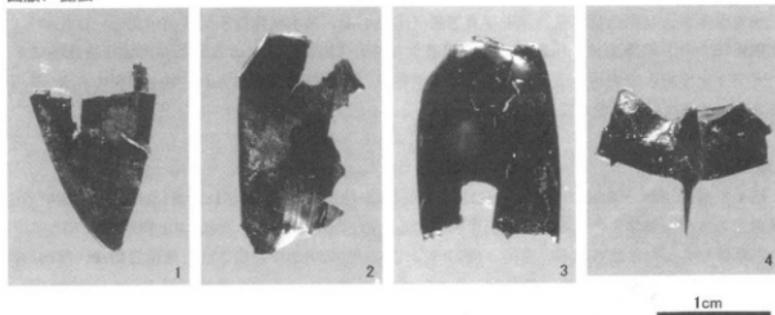
部位がよく揃っており、重複していないことから、No.6~9も含め、同一個体と思われる。No.10はおそらくコガネムシ科の一種であろうと思われるが、科・種を特定できる部位が含まれていないので詳細は不明である。おそらく、かなり大型のコガネムシ（カナブン位の大きさの）であろうと思われる。

ガムシは、川、池、田などにごく普通にみられる大型の水生昆虫である(農薬や環境汚染により最近では激減したが)。当時の本遺跡周辺の環境(河川近くの後背湿地)から推定すると、普通にみられたものと思われる。

表1 昆虫同定結果

| 番号 | 試料名 | | 種別 |
|----|--------|-------------------|-----------------------|
| 1 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 左前翅先端部 |
| 2 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 右前翅基半(基部を含む) |
| 3 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 左前翅中央部 |
| 4 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 右前翅基方(基部を欠く) |
| 5 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 右前翅基縁 |
| 6 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | ガムシ, 右前翅基半 |
| 7 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | ガムシ, 左前翅中央付近 |
| 8 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | ガムシ, 左前翅先手 |
| 9 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | ガムシ, 後胸腹板 |
| 10 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | コガネムシ科の一種, 右前翅基部外縁 |
| 11 | OMN-05 | 0912 南区 トレンチ1北 | ガムシ, 右前翅基部, 先端部, 中胸腹板 |
| 12 | OMN-05 | 0913 南区 トレンチ1~2の間 | ガムシ, 中胸背板・腹板, 左右前翅 |

図版1 昆虫



- 1.ガムシ, 左前翅先端部(トレンチ1北)
- 2.ガムシ, 右前翅基半(トレンチ1北)
- 3.ガムシ, 右前翅基半(トレンチ1~2の間)
- 4.ガムシ, 後胸腹板(トレンチ1~2の間)

向中野館遺跡出土の大型植物遺体分析

はじめに

向中野遺跡(盛岡市飯岡新田所在)は、雫石川右岸の沖積地に存在する。これまでの発掘調査により、縄文時代の土器片や平安時代の集落跡、中世の館跡が検出されている。今回は、試料は、RG007堀跡と、南区 T1西トレンチ採取された、葉化石の種類を知り、当時の植生環境に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、RG007堀跡 (-2J11S付近)底直(番号831)と、南区 T1西トレンチ(番号0909)から採取された、葉遺体を包含する土壌2点である。なお、葉遺体は状態が良好でない限り種類の特定は困難であるため、今回は種類特定に至らない場合を考慮し、土壌に含まれる種実遺体にも着目した分析を実施し、古環境検証に関する資料を得ることにした。

2. 分析方法

RG007堀跡にみられる葉は脆弱なため、周囲の土ごと取り上げる。試料(RG007堀跡は100cc、T1西トレンチは500cc)を水に浸し、筆やピンセットを用いて葉を抽出後、0.5mm目の篩を通して水洗する。残渣を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、葉や種実などの大型植物遺体を抽出する。

現生標本および原色日本植物種子写真図鑑(石川,1994)、日本植物種子図鑑(中山ほか,2000)等との比較対照から、植物遺体の種類と部位を同定する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフオンで結んで表示する。分析後の植物遺体は、種類毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施して保管する。

3. 結果

結果を表1に示す。RG007堀跡 (-2J11S付近)底直(番号831)から検出された葉1点は、種類不明の広葉樹であった。黒褐色、先端部や基部を欠損するため、全形は不明。主脈1本と側脈3本が確認される。革質であったと思われる。南区 T1西トレンチ(番号0909)から検出された植物遺体は、種類の特定に至らない植物片であった。淡褐色、長さ5cm以下、幅3-4mm程度の帯状で偏平。質は非常に柔らかい。表面には縦長の細胞が縦列する。

一方、これらの植物片を含む土壌からは、被子植物32分類群600個の種実が検出された。全て草本類で、ミクリ属、ヒルムシロ属、ヘラオモダカ、オモダカ属、オモダカ科、イボクサ、ミズアオイ属、フサモ属などの水生植物が多い。また、栽培植物のイネ、アサが確認された。検出された種実遺体の状態は、比較的良好である。以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを記す。

・ミクリ属(*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色、紡錘状倒卵体や楕円体など形態上差異のある複数の種を一括した。長さ6-7mm、径3.5-5mm程度。頂部は尖り、基部は切形。果皮はスポンジ状で、表面には数本の隆条が縦列する。

・ヒルムシロ属(*Potamogeton*) ヒルムシロ科

果実が検出された。淡灰褐色、左右非対称な倒卵体でやや偏平。長さ4mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。頂部に嚙状の太い花柱基部が残る。側面の正中線上に深い縦溝と稜があり、その基部に1個の

表1. 大型植物遺体分析結果

| 分類群 | 部位 | 試料名 | |
|------------------------|-----|-------------------------|---------------|
| | | 831 | 0909 |
| | | RG007埋跡 (-2111S付近)底直 | 南区 T1西トレンチ |
| 広葉樹 | 葉 | 1 | — |
| ミクリ属 | 果実 | — | 51 |
| ヘルムシロ属 | 果実 | — | 3 |
| ヘラオモダカ | 果実 | — | 25 |
| オモダカ属 | 果実 | — | 2 |
| オモダカ科 | 種子 | — | 22 |
| イネ | 穎 | 2 | 3 |
| イネ科 | 果実 | — | 7 |
| カヤツリグサ科 | 果実 | — | 54 |
| ツエクサ | 種子 | — | 1 |
| イボクサ | 種子 | — | 2 |
| ミスアオイ属 | 種子 | — | 1 |
| カナムグラ | 種子 | — | 7 |
| アサ | 種子 | 1 | 3 |
| タデ属 | 果実 | 2 | 44 |
| アカザ科 | 種子 | 1 | 72 |
| ナデシコ科 | 種子 | — | 48 |
| トウゴクサバノオ | 種子 | — | 2 |
| キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 | 核 | 2 | 25 |
| カタバミ属 | 種子 | — | 4 |
| エノキグサ | 種子 | 1 | 3 |
| オトギリソウ属 | 種子 | — | 1 |
| スマレ属 | 種子 | — | 3 |
| アリノトウグサ | 核 | — | 3 |
| フサモ属 | 果実 | — | 98 |
| セリ科 | 果実 | — | 38 |
| ガガイモ科 | 種子 | — | 1 |
| イヌコウジュ属 | 果実 | — | 28 |
| シロネ属 | 果実 | — | 6 |
| キランソウ属 | 果実 | 1 | — |
| ナス科 | 種子 | — | 1 |
| メナモミ属 | 果実 | — | 6 |
| キク科 | 果実 | 25 | 1 |
| 不明植物片 | | | + |
| 木材 | | 1 | + |
| 炭化材 | | — | + |
| 植物のトゲ | | 1 | — |
| 昆虫 | | + | + |
| 高脚小僧(褐鉄鉱) | | | + |
| | 分析量 | 100cc | 500cc |

刺状突起がある。果皮はスポンジ状でざらつく。

・ヘラオモダカ(*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。灰褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2.8mm、幅1.9mm、厚さ1mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・オモダカ属(*Sagittaria*) オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、倒卵形で偏平。径2.5mm程度。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。種子

は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・オモダカ科(Alismataceae)

種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。長さ1.2mm、幅0.6mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎(果)の破片が検出された。淡-灰褐色、完形ならば長さ6-7mm、幅3-4mm、厚さ1.5mm程度の長楕円形で偏平。基部に円柱状斜切形の果実序柄がある。果皮表面には顆粒状突起が規則的に縦列する。

・イネ科(Gramineae)

果実が検出された。イネ以外の形態上差異のある複数の種を一括した。淡-黄褐色、半扶卵体でやや偏平。長さ2-3mm、径0.5-1mm程度。穎は薄く柔らかく弾力がある。表面には微細な網目模様を縦列する。エノコログサ属(*Setaria*)に似る個体を含む。

・カヤツリグサ科(Cyperaceae)

果実が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。淡-黒褐色、レンズ状または三稜状倒卵体。径1.5-3.5mm程度。頂部の柱頭部分が伸びる。基部は切形で、基部から伸びる逆刺を持つ鬚状の腕が残る個体もみられる。果皮表面は半滑な個体や、微細な網目模様が配列する個体もみられる。

・ツユクサ(*Commelina communis* L.) ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色で半横長楕円形。径4mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一面面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、背面と側面の表面は、大きなすり鉢状の孔が散在する。他の面は円形の小孔が多数存在する。

・イボクサ(*Aneilema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、半横長楕円形。径3mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一面面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の孔が多数存在する。

・ミズアオイ属(Monochoria) ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、楕円体。長さ1mm、径0.6mm程度。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には縦に10本程度の隆起があり、隆起の間には横方向の密な隆線が配列する。

・カナムグラ(*Humulus japonicus* Sieb. et Zucc.) クワ科カラハナソウ属

種子が検出された。灰褐色、側面視は円形、上面視は両凸レンズ形。径4.5mm、厚さ1mm程度。頂部はやや尖り、縦方向に一周する稜がある。基部には淡黄褐色、径1mm程度のハート形の臍点がある。種皮表面は粗面で果皮が付着する個体もみられる。

・アサ(*Cannabis sativa* L.) クワ科アサ属

種子が検出された。灰褐色、三角状広倒卵体でやや偏平。径4mm、厚さ2.5mm程度。縦方向に一周する稜がある。基部には淡褐色、径1mm程度の楕円形の臍点がある。種皮表面には葉脈状網目模様がある。

・タデ属(Polygonum) タデ科

果実が検出された。サナエタデ近似種、ミゾソバ近似種やそれ以外の形態上差異のある複数種を一括した。サナエタデ近似種(*Polygonum cf. lapathifolium* L.)の果実は、黒褐色、円形で偏平な二面体。径2mm程度。両面中央はやや凹む。頂部はやや尖り、2花柱が残存する。基部からは花被の脈が伸び、花被の先は2つに分かれ反りかえる。果実表面は平滑で光沢がある。ミゾソバ近似種(*Polygonum cf.*

thunbergii Sieb. et Zucc.)の果実は灰褐色、三稜状広卵形で長さ3.5mm、径2.2mm程度。基部には萼片が残る。果皮は薄く柔らかく、表面は微細な網目模様が発達しざらつく。その他に、黒褐色、丸みのある三稜状卵形で長さ2-2.5mm、径1.5mm程度。果皮表面はやや平滑で光沢が強い、ハナタデ (*Polygonum caespitosum* Blume subsp. *yokusaianum* (Makino) Danser) やイヌタデ (*Polygonum longisetum* De Bruyn) に似る個体や、果皮表面に明瞭な網目模様がありざらつく個体を含む。

・アカザ科(Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1.3mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢が強い。

・ナデシコ科(Caryophyllaceae)

種子が検出された。淡-茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1-1.2mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤-針状突起が同心円状に配列する。

・トウゴクサバノオ(*Isopyrum trachyspermum* Maxim.) キンボウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡-灰褐色、球体。径0.5mm程度。種皮は薄く、表面には小突起が密布しざらつく。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属(*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*)バラ科

核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、腎形でやや偏平。径1mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は粗面で、数個の隆条が斜上する個体や、平滑な個体など形態上差異のある複数種を一括している。

・カタバミ属(*Oxalis*)カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、卵形で偏平。長さ1.5mm、幅0.9mm程度。基部はやや尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には2-3本の縦隆条と10本程度の肋骨状横隆条が並び、わらじ状を呈す。

・エノキグサ(*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、倒卵体。長さ1.4mm、径1mm程度。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しざらつく。

・オトギリソウ属(*Hypericum*)オトギリソウ科

種子が検出された。黒褐色、線状長楕円体。両端は短い突起状。長さ1mm、径0.6mm程度。種皮は微細で横長の凹点による網目模様が配列する。

・スミレ属(*Viola*)スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、広倒卵体。径1mm程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

・アリノトウグサ(*Haloragis micrantha* (Thunb.) R. Br.) アリノトウグサ科アリノトウグサ属

核が検出された。淡褐色、倒卵体。長さ1.2mm、径1mm程度。頂部は尖り、基部には萼片が宿存する。表面はやや平滑で、顕著な8本の稜が縦方向に配列する。

・フサモ属(*Myriophyllum*)アリノトウグサ科

果実が検出された。灰-黒褐色、三稜状広倒卵体。長さ2mm、径1.2mm程度。基部は斜切形で長楕円形の臍がある。腹面正中線上に鈍稜がある。背面には3-4本の突起が配列するスポンジ状の翼がある。果皮は厚く、表面は粗面。

・セリ科(Umbelliferae)

果実が検出された。黄褐色、楕円体でやや偏平。長さ2mm、幅1.8mm、厚さ0.5mm程度。果皮はスポンジ状で、腹面と背面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

・ガガイモ科(Asclepiadaceae)

種子が検出された。灰褐色、倒狭卵形で偏平。長さ6.5mm、幅4mm、厚さ1mm程度。基部は切形。縁は薄く翼状。背面は幅広い縦隆条が数本配列し盛り上がる。腹面はやや凹み、表面はやや平滑。

・イヌコウジュ属(Mosla) シソ科

果実が検出された。灰褐色、倒広卵形。径1.3mm程度。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・シロネ属(Lycopus) シソ科

果実が検出された。淡褐色、三稜状広倒卵形。長さ1.5mm、径1mm程度。背面は平らで、両側にはスポンジ状の翼がある。腹面の正中線上は鈍稜をなし、基部は切形で長楕円形の臍がある。水に浮きやすい。

・キラソウ属(Ajuga) シソ科

果実が検出された。淡褐色、狭楕円形。長さ1.6mm、径1mm。腹面基部には果実の長さの2/3に達する大きな楕円形の着点痕の孔がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・ナス科(Solanaceae)

種子が検出された。灰褐色、歪な腎臓形で偏平。長さ1.6mm、幅1.3mm程度。種子基部のくびれた部分に臍がある。種皮は薄く、表面には微細な星型状網目模様が臍を中心として同心円状に発達する。

・メナモミ属(Siegesbeckia) キク科

果実が検出された。黒褐色、狭三角状菱形で腹面方向へやや湾曲する。長さ2.2mm、径1mm程度。頂部には円形の臍がある。表面には浅い縦溝と微細な網目がある。網目の境際は短く突出し、全体に微細な突起がある。

・キク科(Compositae)

果実が検出された。灰褐色、倒狭卵形で偏平。長さ2.5mm、幅1.7mm程度。頂部は切形で円形の臍がある。縁は薄く、膜状。果皮表面には微細な網目模様が縦列し、ざらつく。

4.考察

今回検出された葉遺体は、遺存状態が悪く種類の特定には至らなかったが、これらの葉遺体を包含する土壌から、草本32分類群600個の種実遺体が検出された。種実遺体分類群は、前回報告した第5・6次調査区における種実遺体の種類構成と同様の傾向を示す(バリノ・サーヴェイ株式会社,未公表資料)。

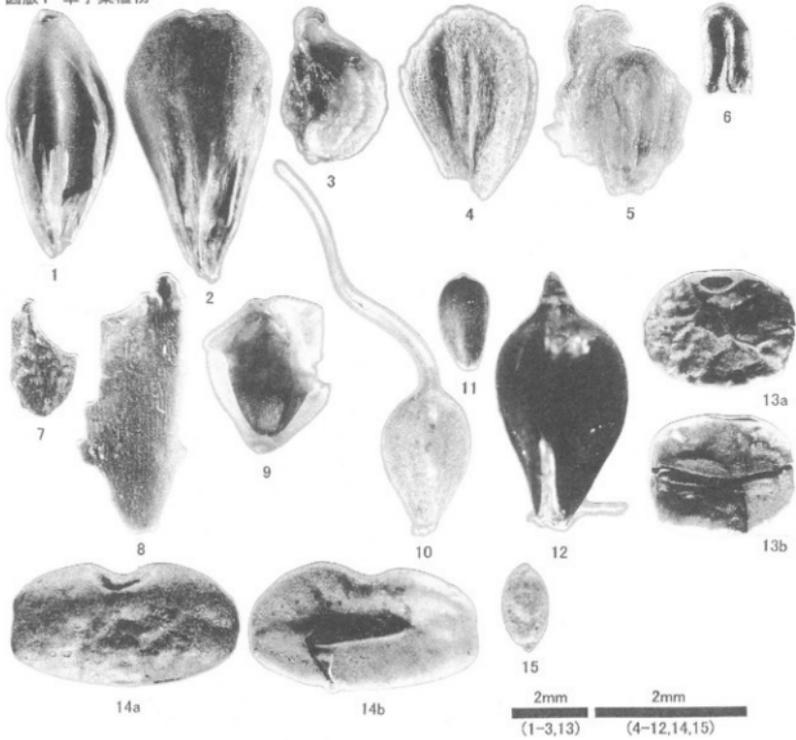
栽培植物のイネは、第6次調査区でも炭化胚乳と穎が確認されている。アサの種子は、第5・6次調査区でも確認されている。これらの栽培植物の可食部である種実が検出されたことや、発掘調査所見を考慮すると、当該期の本遺跡周辺で利用された食物残渣等が含まれている可能性がある。

栽培植物を除く草本種実の多くは、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類であることから、本遺跡周辺に生育していたと考えられる。水生植物のミクリ属、ヒルムシロ属や、ヘラオモダカ、オモダカ属などのオモダカ科、イボクサ、ミズアオイ属、フサモ属、やや湿ったところに生育する種類を含むカヤツリグサ科、タデ属、セリ科、シロネ属などは、栽培植物のイネが共に検出されていることを考慮すると、稲作に伴う水田雑草として生育したものも含まれる可能性がある。

引用文献

- 石川茂雄 1994 原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.

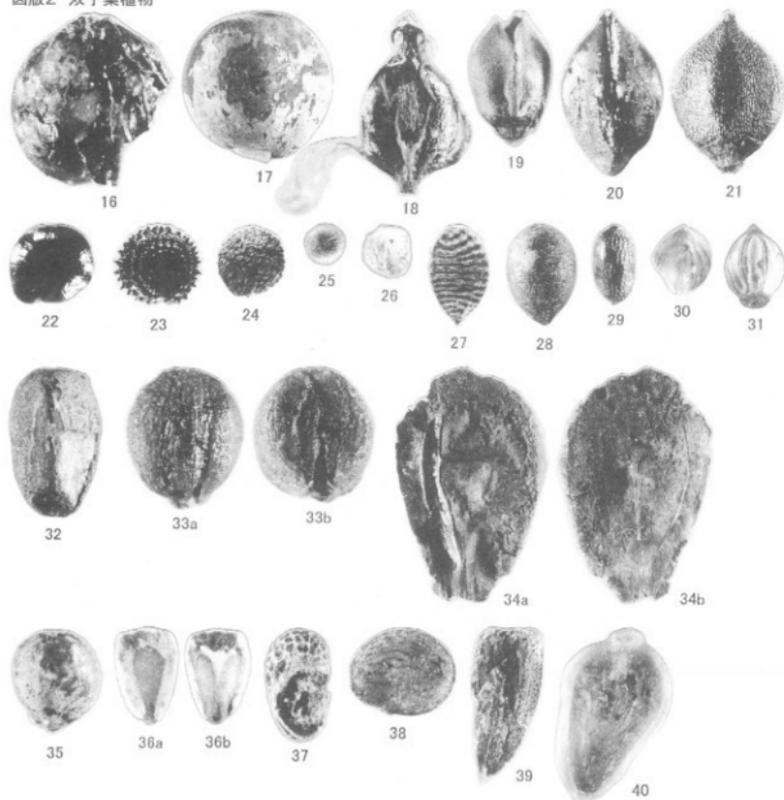
図版1 単子葉植物



1. ミクリ属 果実(T1西トレンチ)
3. ヒルムシロ属 果実(T1西トレンチ)
5. オモダカ属 果実(T1西トレンチ)
7. イネ 類(RG007堀跡(-2J11S付近)底直)
9. イネ科 果実(T1西トレンチ)
11. カヤツリグサ科 果実(T1西トレンチ)
13. ツユクサ 種子(T1西トレンチ)
15. ミズアオイ属 種子(T1西トレンチ)

2. ミクリ属 果実(T1西トレンチ)
4. ヘラオモダカ 果実(T1西トレンチ)
6. オモダカ科 種子(T1西トレンチ)
8. イネ 類(RG007堀跡(-2J11S付近)底直)
10. カヤツリグサ科 果実(T1西トレンチ)
12. カヤツリグサ科 果実(T1西トレンチ)
14. イボクサ 種子(T1西トレンチ)

図版2 双子葉植物



2mm 2mm
 (16,17,19,34) (18,20-33,35-40)

- | | |
|---------------------------------------|------------------------------|
| 16. カナムグラ 種子(T1西トレンチ) | 17. アサ 種子(T1西トレンチ) |
| 18. タデ属(サナエタデ近似種) 果実(T1西トレンチ) | 19. タデ属(ミソソバ近似種) 果実(T1西トレンチ) |
| 20. タデ属 果実(T1西トレンチ) | 21. タデ属 果実(T1西トレンチ) |
| 22. アカザ科 種子(T1西トレンチ) | 23. ナデシコ科 種子(T1西トレンチ) |
| 24. ナデシコ科 種子(T1西トレンチ) | 25. トウゴクサバノオ 種子(T1西トレンチ) |
| 26. キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(T1西トレンチ) | 28. エノキグサ 種子(T1西トレンチ) |
| 27. カタバミ属 種子(T1西トレンチ) | 30. スミレ属 種子(T1西トレンチ) |
| 29. オトギリソウ属 種子(T1西トレンチ) | 32. フサモ属 果実(T1西トレンチ) |
| 31. アリノトウグサ 核(T1西トレンチ) | 34. ガガイモ科 種子(T1西トレンチ) |
| 33. セリ科 果実(T1西トレンチ) | 36. シロネ属 果実(T1西トレンチ) |
| 35. イヌコウジュ属 果実(T1西トレンチ) | 38. ナス科 種子(T1西トレンチ) |
| 37. キランソウ属 果実(RG007堀跡(-2J11S付近)底直) | 40. キク科 果実(T1西トレンチ) |
| 39. メナモミ属 果実(T1西トレンチ) | |

向中野館遺跡出土の火山灰分析

分析試料数は以下の通りです。

数量一覧表

| 試料名 | 前処理 | 全塩分組成分析 | 重塩分分析 | 火山灰形態分類 | 溶解率測定 | | 顕微鏡写真 | 解析 |
|-------------|-----|---------|-------|---------|-------|----|-------|----|
| | | | | | α1 | α2 | | |
| RA012 住居火山灰 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 一式 |

2008年1月23日

株式会社京都フィクション・トラック

Kyo-to Fiction-Track Co., Ltd

〒603-8422 京都市北区大塚南町44-4

TEL:03-492-9884, FAX:03-493-2741

担当名：佐藤誠・山下浩・高野千

より重塩分含有の少ないものは結果的に総数 200 個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重塩分含有率の少ない試料は浸透処理による重塩分の逸散を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重塩分のみは比重が減少するため浸透処理過程で例外な見解がある。さらに比重による比厚変化や粒径の違いが分析結果に影響を及ぼす懸念があるため、今回の分析では浸透処理は行っていない。

(4) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した焼結用陶片に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1977)※1に準拠してH：扁平型 (Ha, Hb)、C：中環型 (Ca, Cb)、T：多孔質型 (Ta, Tb) に分類した。またこれら以外の形態に属さないものを、I：不明類型として一括した。なお含有率を測定する目的で100個の粒子を測定した。その過程で着色したものをスリヤア質のものおよび甲型と可辨れる特殊な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水分解融を顕微鏡し、山下・榎原(1984)※2に基づき水分解融 (Hydration) ナスパー・ハイドレーション (Sasperhydration) の程度についても可能な限り半定量的に記録した。

(5) 火山ガラスの溶解率測定

前処理より調整された100-Mesh(1/160インチ)規格の試料を対称に、浸透処理後重量測定装置 (※1)※3で43.4を用いた火山ガラスの溶解率を測定した。測定に際しては、精度を高めるための原則として1試料あたり10個の火山ガラス片を測定する。火山ガラスの含有率の高い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

浸透処理後重量測定装置※4は火山ガラスと海水の溶解率が変化した濃度を測定することにより、各濃度ごとに決められた浸透濃度と溶解率の換算濃度から火山ガラスの溶解率を計算して求める方法である。

真体積測定データは本来にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。文字書上時に材料名 (Series) および Sample Name が表示され、次に測定番号、Material は対称試料名、Immersion は浸透に使用した濃度の簡略名を示す。カッコ内の数字は浸透濃度から濃度の換算率を算出するの用に用いたものである。

測定された溶解率値は最終的に Total の項にまとめられる。
count, n1, n2, n3, range, n20, st, dev, skewness はそれぞれ溶解率の測定個数、最小

1. 試料

分析試料は、遺跡市向中野館遺跡より、右手側埋蔵文化財センター発掘調査区より採取された「RA012 住居火山灰」である。本地点は、自然保護上にある平安時代の竈穴遺跡の南西隅に位置し、試料は高層に居住のようにつくられた状態であった。分析の結果、資料にもつう (火山灰) 物質の含有率は極めて微量であり、単に灰質土質試料としての取り組みは不適当と考えられた。以下には、それらの状況変化を考慮しつつ、分析結果について述べる。

2. 分析方法

本試料は、以下の手順により分析を行った。

(1) 前処理

まず半量状態の生試料を適量採取し、90℃で15時間煎煮させる。煎煮液を冷却後、1リピーカー中で数回洗浄しながら水洗し、そのうち塩酸洗浄を行う。この際、中粒のヘキサメタリン酸ナトリウム溶液を温度 1~2%程度となるよう適宜加え、効果がないままでは洗浄の交換を繰り返す。乾燥後、原料の内袋を捨てるため使い捨てのフイルムメッシュ・クロスを用い、1段階の篩分け (48-110, 250mesh) を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた 100-200mesh (1/160インチ) 規格試料を必要分別処理を加えることなく、封入用 (※1, ※4) を用いて前記陶片を作成した。

(2) 全塩分組成分析

前述の封入液を用い、火山ガラス・重塩分・石膏・その他の不溶物について、1濾片内の各粒子を無作為に100個まで計数し含有粒子数の重量百分率を測定した。

(3) 重塩分分析

主要重塩分であるカンラン石 (81)・斜方輝石 (82a)・単斜輝石 (82b)・褐色透輝石 (82c)・褐色透輝石 (82d)・不透明 (82e)・カナントン閃石 (82f)・ジコシト、黒雲母 (83)・珩 (84) を経て顕微鏡し、ポイント・カウンタを用いて顕微鏡に100個体を計数してその重量比を百分率で出した。なお、試料の

個、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして測定である。溶解率の histogram の図は既述のように溶解率を 0.401 まで表示し、横方向にその溶解率をもつ火山ガラスの個数が表示される。※1が1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

(4) 塩分の溶解率測定

基本的には火山ガラスの溶解率と同様の操作を経て測定を行うが、塩物の溶解率は化学的方針をチェックする必要がある点で大きく異なる。今回の測定は、溶解率値の精度を高めるため 10 以上の測定を計しているが、含有率が少ない場合にはそれ以下になる場合もある。対象試料は斜方輝石 (82c) で、顕微鏡 (100倍) 時に準じて対象試料の溶解率を測定した。

真体積測定データはデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず書上時に材料名 (Series) および Sample Name が表示され、次に測定番号、Material は対称試料名、Immersion は浸透に使用した濃度の簡略名を示す。カッコ内の数字は浸透濃度から濃度の換算率を算出するの用に用いたものである。

測定された溶解率値は最終的に Total の項にまとめられる。
count, n1, n2, n3, range, n20, st, dev, skewness はそれぞれ溶解率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして測定である。溶解率の histogram の図は既述のように溶解率を 0.401 まで表示し、横方向にその溶解率をもつ試料の個数が表示される。※1が1個の塩物の測定結果を示す。

(7) 顕微鏡写真撮影

前処理で作成された前記陶片を用い、顕微鏡写真撮影を行った。撮影濃度の設定は、分析結果を最もよく反映するように火山ガラス・重塩分・重塩分・石膏・その他の粒子がガラス背景より容易に判別できるように設定した。しかしながら、顕微鏡を覗くことは困難であり、しばしば火山ガラスや重塩分が特定の位置に透過して濃度が変化したことを、お断りしておきたい。

なお、重塩分のように特徴的な形をもつものは、通常の顕微鏡撮影のみからでも識別は容易であるが、染色透明な火山ガラスや重塩分結晶は顕微鏡が難しい。そのため希末の染色所製顕微鏡を用いて顕微鏡写真では、左右2枚の写真を対称することで、火山ガラスや重塩分の特定を真上より行うことにより定めており、その記録を以下に記載する。

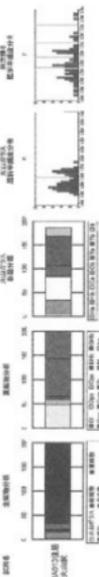


図7 火山灰化学組成

テフラ分析結果表

分析試料名: RAD-3 柱状 火山灰

| 分析項目 | 単位 | 分析値 | 備考 |
|--------------------------------|-----|--------|----|
| SiO ₂ | 質量% | 64.10 | |
| TiO ₂ | 質量% | 1.42 | |
| Al ₂ O ₃ | 質量% | 15.20 | |
| FeO | 質量% | 12.50 | |
| MgO | 質量% | 3.80 | |
| CaO | 質量% | 0.10 | |
| MnO | 質量% | 0.05 | |
| K ₂ O | 質量% | 0.10 | |
| Na ₂ O | 質量% | 0.05 | |
| Sum | 質量% | 100.22 | |

火山灰の元素組成

| 元素 | Si | Al | Fe | Ca | Mg | K | Na | Total | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|------|------|------|------|--------|----|
| 質量% | 64.10 | 15.20 | 12.50 | 0.10 | 3.80 | 0.10 | 0.05 | 100.22 | |

火山灰の元素組成

| 元素 | Si | Al | Fe | Ca | Mg | K | Na | Total | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|------|------|------|------|--------|----|
| 質量% | 64.10 | 15.20 | 12.50 | 0.10 | 3.80 | 0.10 | 0.05 | 100.22 | |

火山灰の元素組成

| 元素 | Si | Al | Fe | Ca | Mg | K | Na | Total | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|------|------|------|------|--------|----|
| 質量% | 64.10 | 15.20 | 12.50 | 0.10 | 3.80 | 0.10 | 0.05 | 100.22 | |

火山灰の元素組成

| 元素 | Si | Al | Fe | Ca | Mg | K | Na | Total | 備考 |
|-----|-------|-------|-------|------|------|------|------|--------|----|
| 質量% | 64.10 | 15.20 | 12.50 | 0.10 | 3.80 | 0.10 | 0.05 | 100.22 | |

火山灰の元素組成結果一覧表

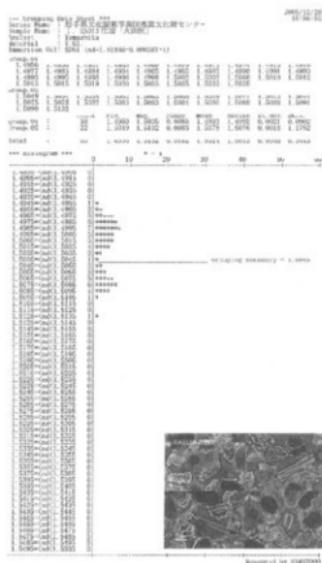
| No | 試料名 | 分析項目 | 分析値 | 備考 |
|----|--------------|--------------------------------|--------|----|
| 1 | RAD-3(柱状火山灰) | SiO ₂ | 64.10 | |
| | | TiO ₂ | 1.42 | |
| | | Al ₂ O ₃ | 15.20 | |
| | | FeO | 12.50 | |
| | | MgO | 3.80 | |
| | | CaO | 0.10 | |
| | | MnO | 0.05 | |
| | | K ₂ O | 0.10 | |
| | | Na ₂ O | 0.05 | |
| | | Sum | 100.22 | |

1) 分析結果: 試料中の成分組成を分析結果表に示す。分析結果は、分析値と標準値との差が±5%以内であることを示す。標準値は、分析結果表の備考欄に記載されている。分析結果は、分析値と標準値との差が±5%以内であることを示す。標準値は、分析結果表の備考欄に記載されている。

火山灰の元素組成結果一覧表

| No | 試料名 | 分析項目 | 分析値 | 備考 |
|----|--------------|--------------------------------|--------|----|
| 1 | RAD-3(柱状火山灰) | SiO ₂ | 64.10 | |
| | | TiO ₂ | 1.42 | |
| | | Al ₂ O ₃ | 15.20 | |
| | | FeO | 12.50 | |
| | | MgO | 3.80 | |
| | | CaO | 0.10 | |
| | | MnO | 0.05 | |
| | | K ₂ O | 0.10 | |
| | | Na ₂ O | 0.05 | |
| | | Sum | 100.22 | |

1) 分析結果: 試料中の成分組成を分析結果表に示す。分析結果は、分析値と標準値との差が±5%以内であることを示す。標準値は、分析結果表の備考欄に記載されている。分析結果は、分析値と標準値との差が±5%以内であることを示す。標準値は、分析結果表の備考欄に記載されている。

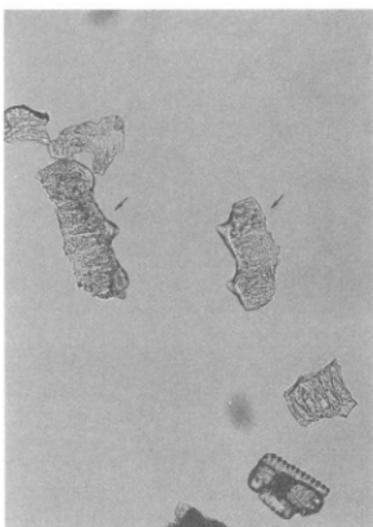


Open nicol

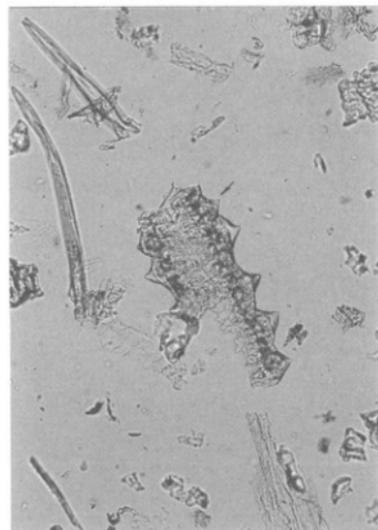


RA013 住居試料×200

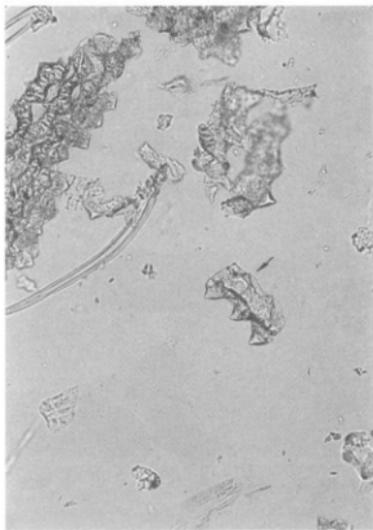
Sensitive color(Cross nicol +gypsum test plate)



同 左

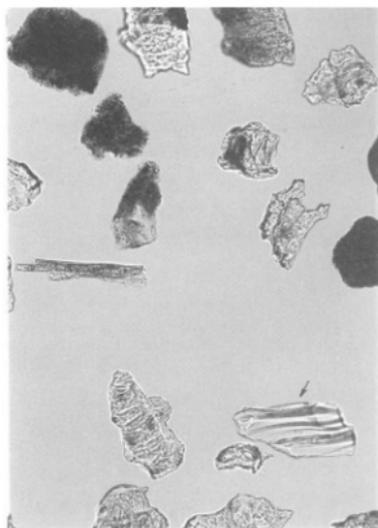


あきたこまち稲モミ灰化試料×200



同 左

Open nicol



RA013 住居試料（火山ガラス）×200

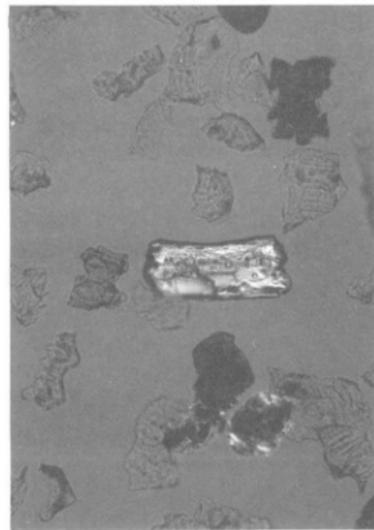
Sensitive color(Cross nicol +gypsum test plate)



同 左



RA013 住居試料（斜方輝石）×200



同 左

写真図版



遺跡遠景（東側上空から）



調査区全景（北側上空から）



調査前風景（北区）



調査前風景（中央区）



調査前風景（南区）（上は北から、下は南から撮影）



RA013住居跡全景（南から）



覆土断面（南北）



覆土断面（東西）



北カマド全景



煙道断ち割り



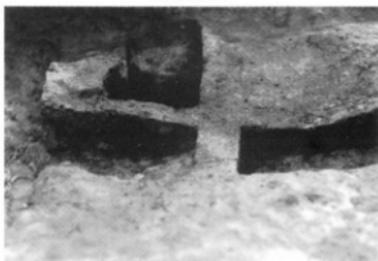
燃焼断ち割り



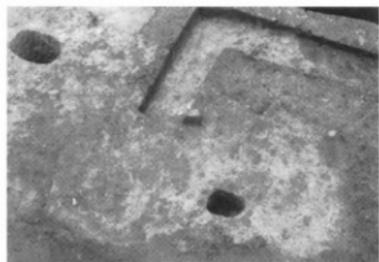
西カマド全景



煙道断ち割り



燃焼部断ち割り



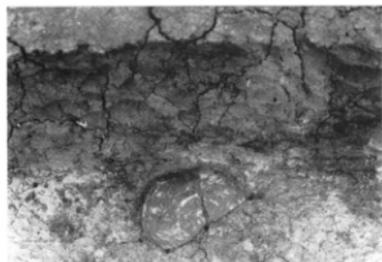
火山灰・粉殻検出状況



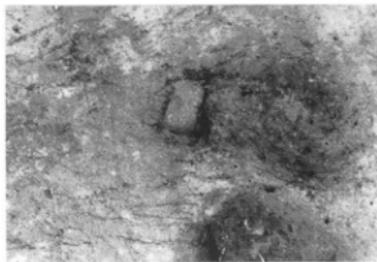
No.1遺物（鉄製品）出土状況（東から）



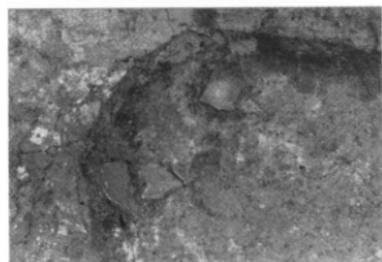
No.2遺物（鉄製品）出土状況（東から）



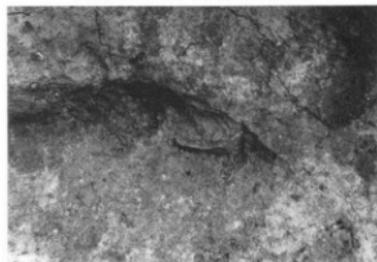
No. 3 遺物 (土器) 出土状況 (南から)



No. 4 遺物 (土器) 出土状況 (西から)



No. 5 遺物 (土器) 出土状況 (南から)



No. 6 遺物 (土器) 出土状況 (南から)



北カマド跡土坑 遺物出土状況 (No. 5)



同 断面



同 完掘



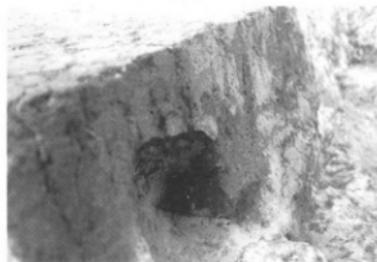
同 底直上遺物 (No. 8・9) 出土状況



同



北カマド煙出土器出土状況



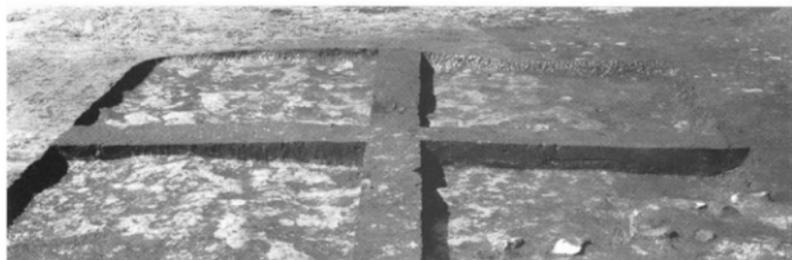
西カマド脇棚状施設



掘り方（南から）



RA014住居跡全景（南から）



覆土断面（南北）



覆土断面（東西）



北カマド全景



同 煙道断ち割り



同 袖断ち割り



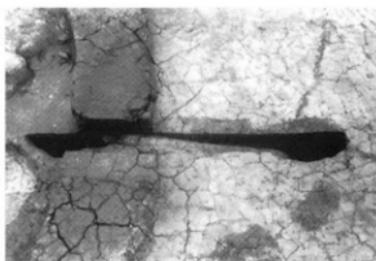
同 完撰



同



同 断ち割り



同 袖断ち割り



No. 1 土器出土状況



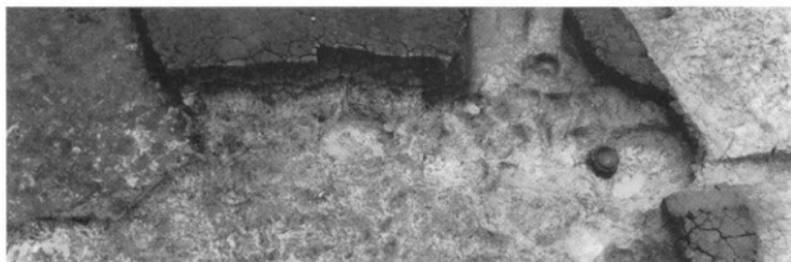
No. 2 土器出土状況



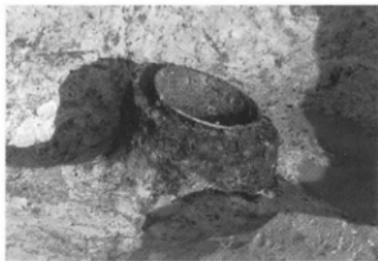
柱穴? 断面



土坑断面



掘り方



床下土坑遺物出土状況



RA015住居跡全景（南から）



覆土断面（南北）



覆土断面（東西）



カマド全景



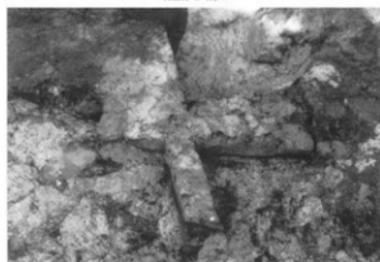
煙道断面



袖断ち割り

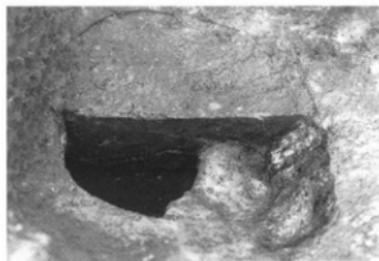


煙道土器出土状況（右写真は、中央の土器の検出時の状態）

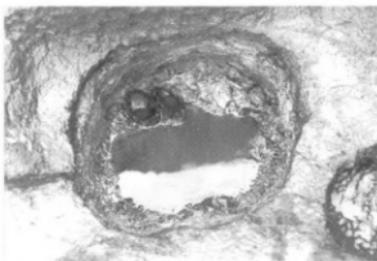


窯焼部断ち割り

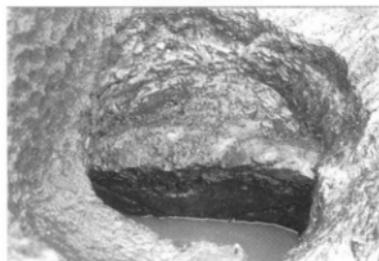




カマド竈土坑覆土上部



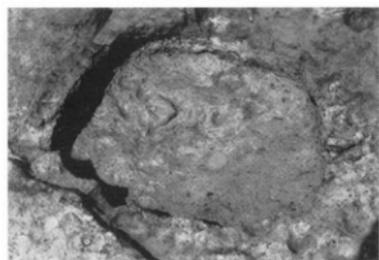
同 底直上出土土器 (南から)



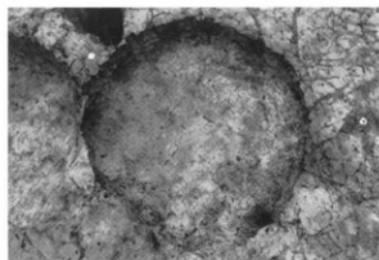
同 覆土下部



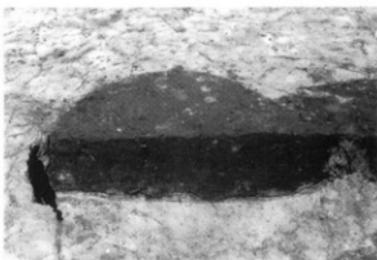
上の近景

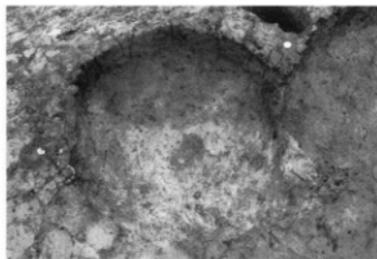


RD012土坑

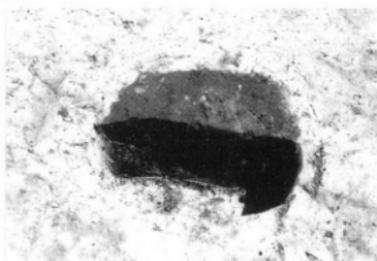
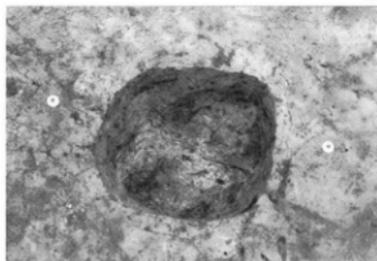


RD013土坑

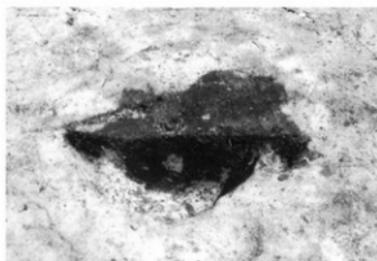




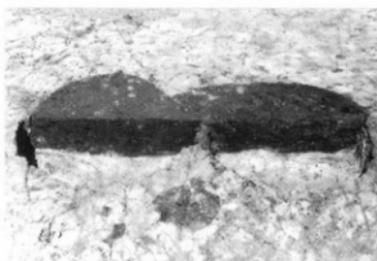
RD014土坑



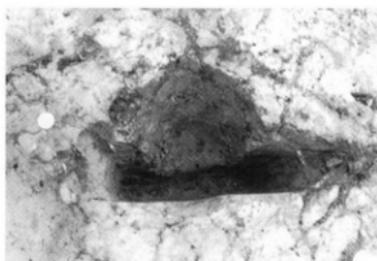
RD015土坑



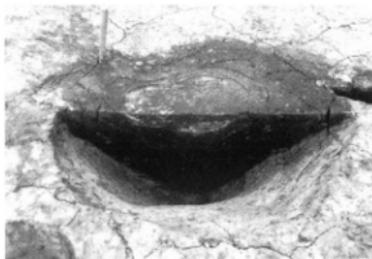
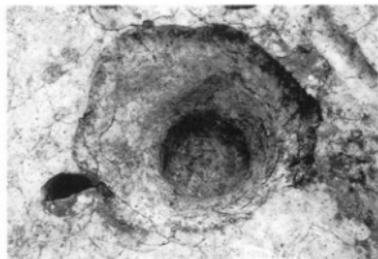
RD015土坑近くのカクラン



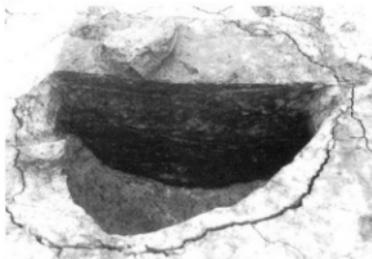
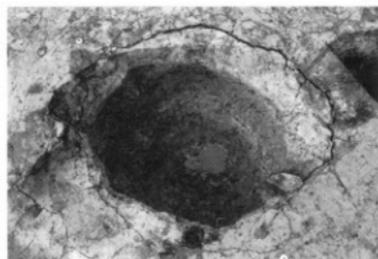
RD013, RD014, RD016土坑



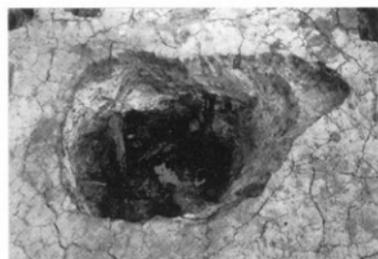
RD016土坑



RD017土坑



RD018土坑



RD019土坑



調査風景 (中央区西端)



RZ013柱穴群（北から）



RZ014柱穴群（1）（西端）（北から）



RZ014柱穴群 (2) (中央) (北から)



RZ014柱穴群 (3) (東端) (北から)



全景・断ち割り（東西）（南から）



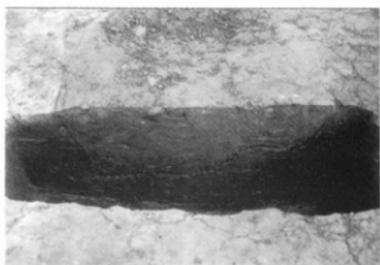
断ち割り（東西）（南から）



全景（東から）



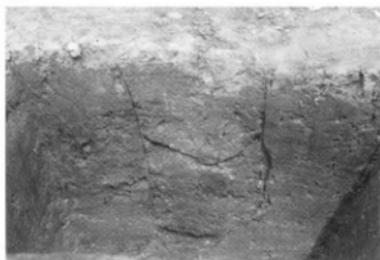
RD011土坑・RZ011柱穴群全景



RD011土坑



柱穴状土坑①



同 ②



同 ③



同 ④



同 ⑤



同 ⑦



同 ⑩



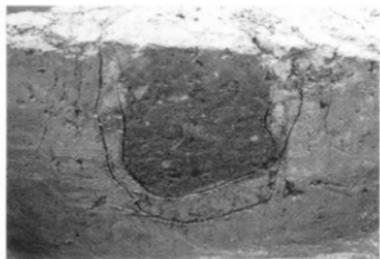
RZ015曲輪上黄褐色土断ち割り



RZ012の柱穴状土坑①



同 ②



同 ③



RZ015曲輪とRG010溝跡



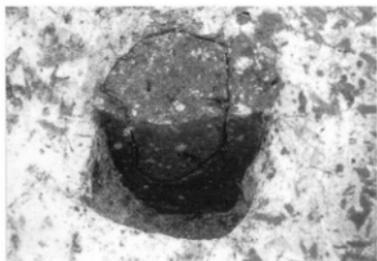
RG010溝跡断面



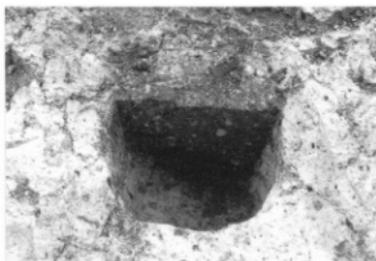
RG007溝跡全景



RZ012柱穴群④～⑤



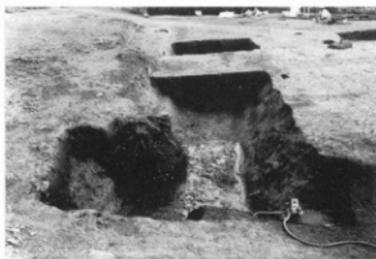
RZ012の柱穴状土坑④



同 ⑤



RG007溝跡断面



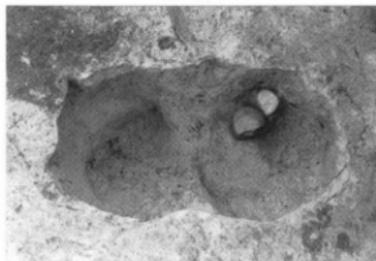
RG007と010溝跡合流点



RG008溝跡



同 断面



同下検出土坑？



RZ016木出土全景（南から）



同 水没風景



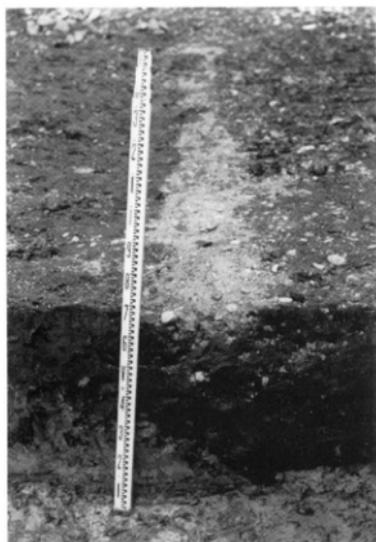
同 西端近景（北から）



同 中央～東端近景（北から）



北北区全景



水が流れた跡



間（断面の白い部分）



調査区近景（東端を望む）



RG013溝跡・池跡（北から）



RG013溝跡（西角付近）



池跡～水田跡（北から）



池跡断面（西から）



水田跡（北西から）



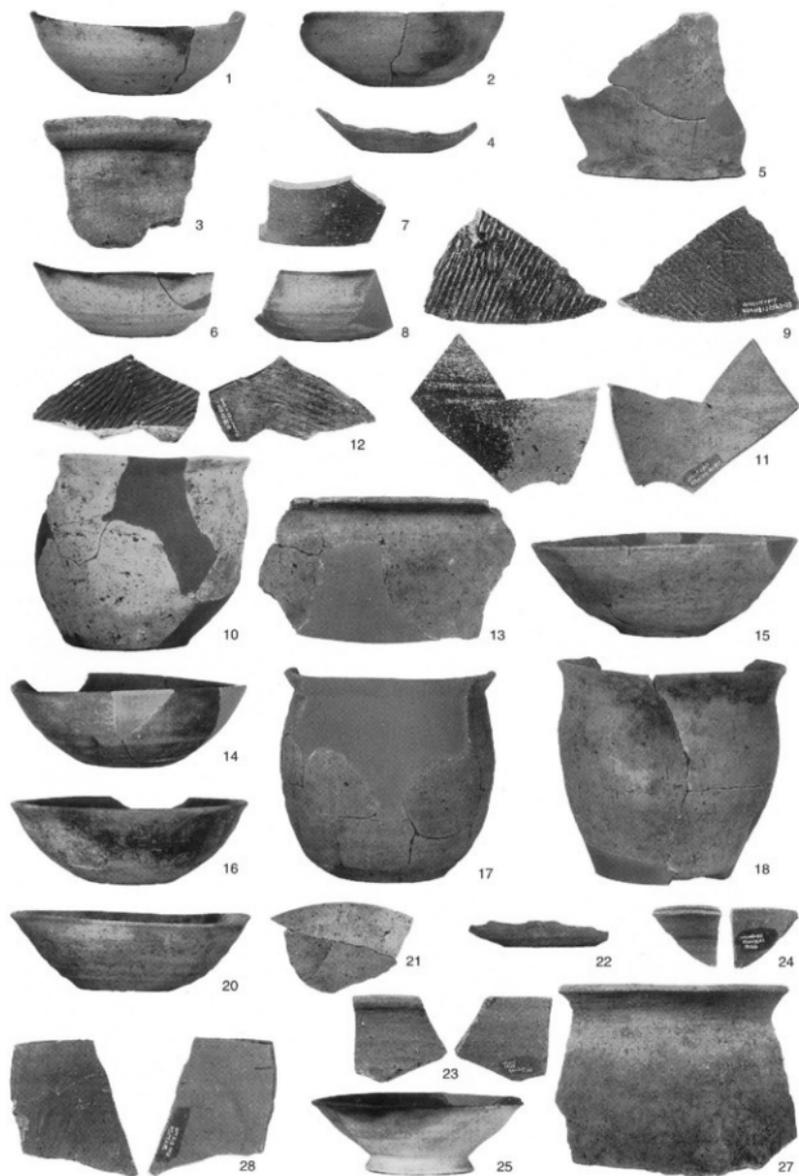
その南端の井戸跡？



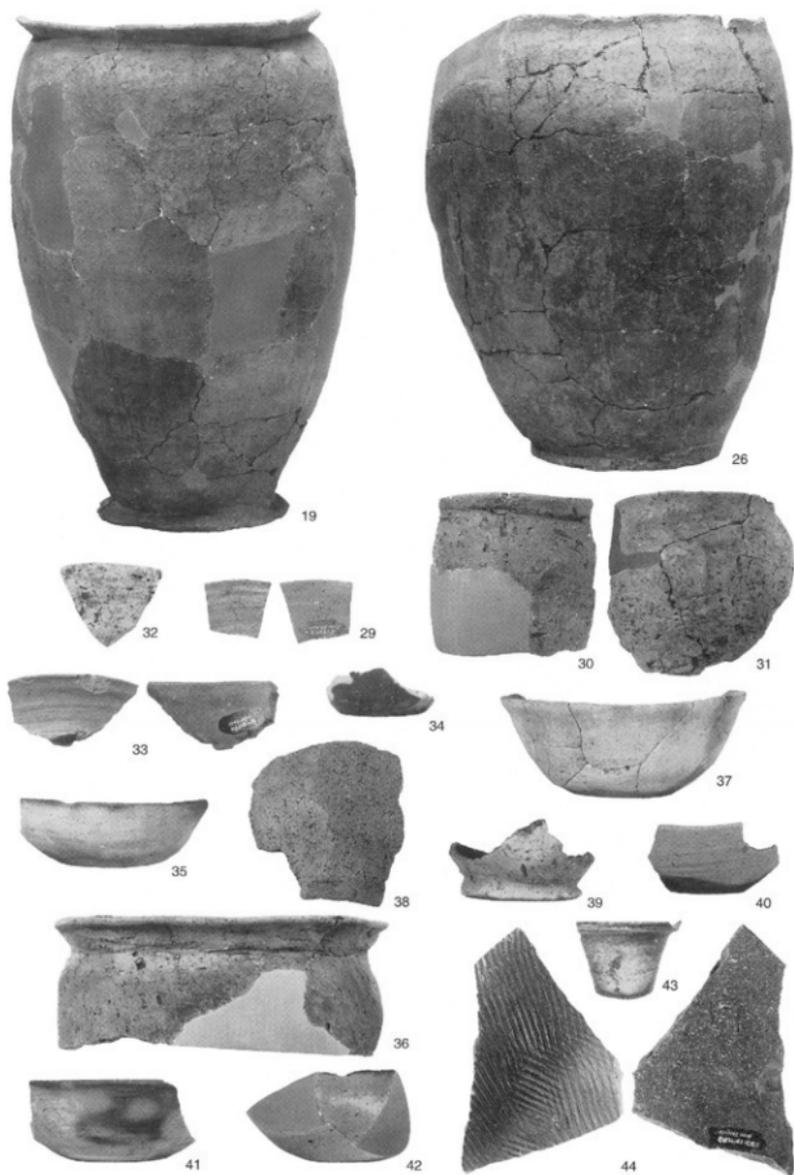
その北端の暗渠跡



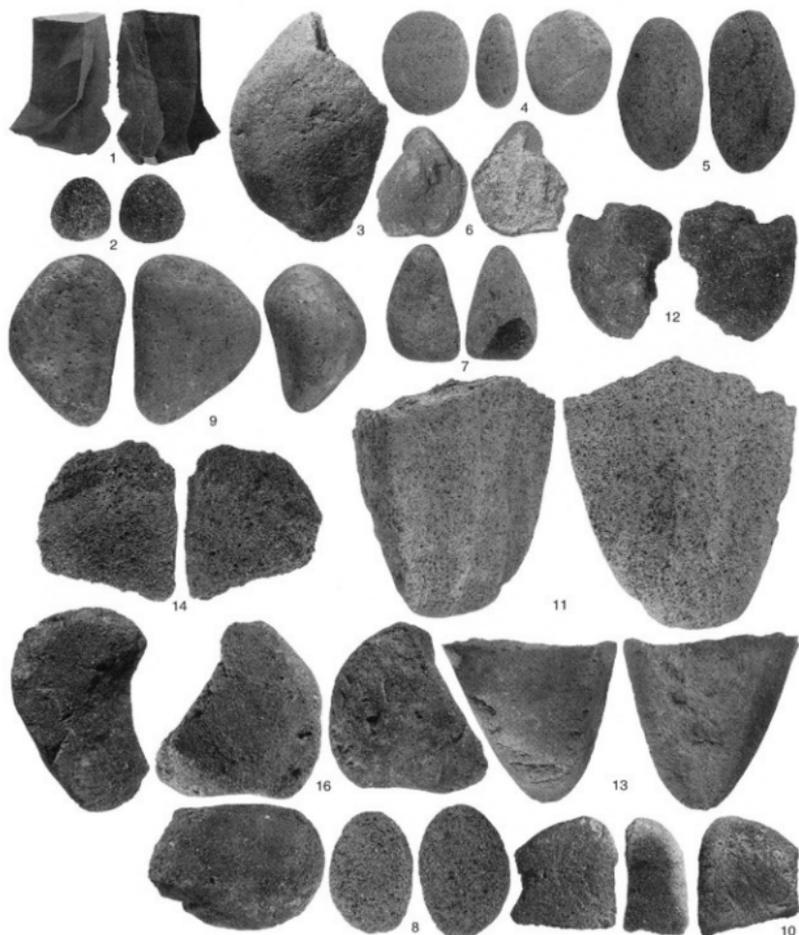
北南区RG010:溝跡調査状況



写真図版26 土師器・須恵器(1) (S=1/3)

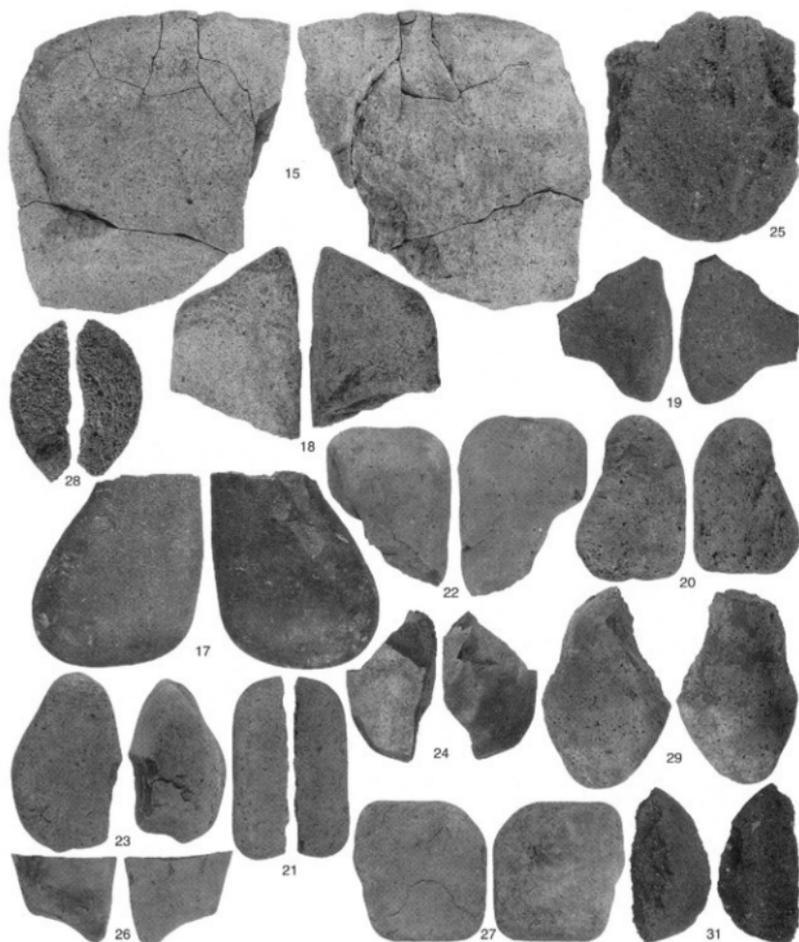


写真図版27 土師器・須恵器(2) (S-1/3)



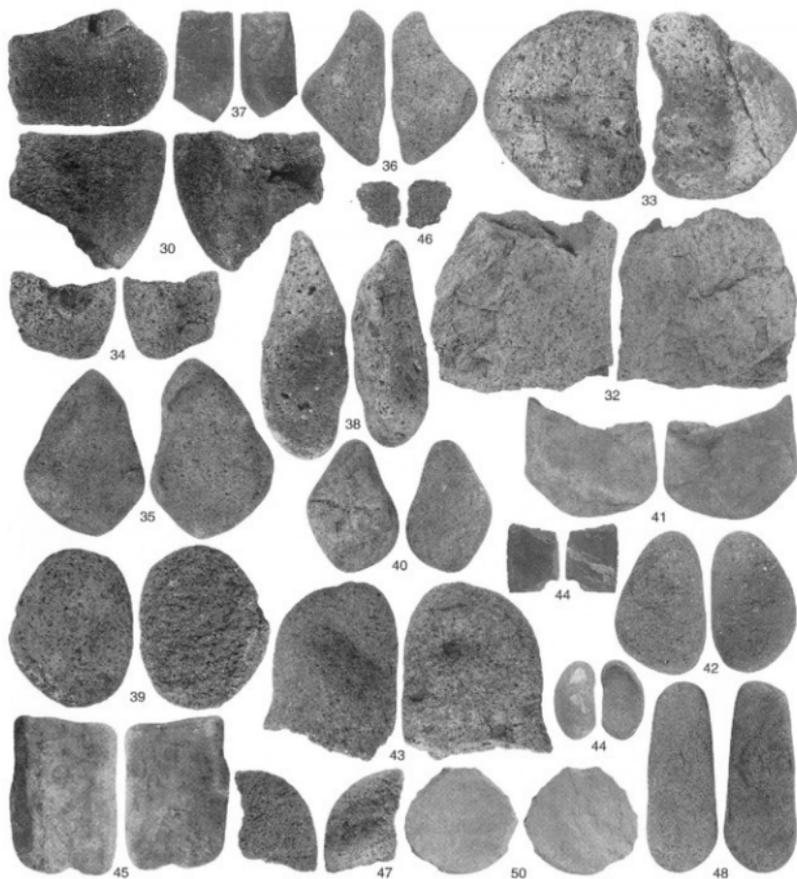
| No. | 出土地点・層位 | 器 種 | 最大径長さ (cm) | | | 重量 (g) | 石 質 (産地) | 用途 状況 | 備 考 | 図の 有無 |
|-----|-------------------------|------|------------|-------|------|--------|-------------|----------|-----------------|----------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 1 | 市川北園水そば・層位 | 削片 | 5.85 | 4.05 | 1.8 | 28.7 | 頁岩 (奥羽) | | | 36区 |
| 2 | RD017上流 | 礫石 | 4.9 | 4.6 | 4.1 | 83.5 | 安山岩 (奥羽) | | ほぼ全面磨打痕 | 36区 |
| 3 | RA014E1層Q2 | 礫石片? | 19.3 | 12.8 | 6.1 | 1538.7 | 安山岩 (奥羽) | 欠損 | 右石? | 36区 |
| 4 | 蓬洲区 | 礫石片 | 8.8 | 7.15 | 3.8 | 272.7 | 安山岩 (奥羽) | | 残・磨打痕 | 36区 |
| 5 | RA013E1層カマド跡産内 | 礫石片? | 13.6 | 7.5 | 6.5 | 867.8 | 安山岩 (奥羽) | | ほぼ全面磨打? | |
| 6 | RA013E1層カマド跡産石 | 礫石片? | 10.1 | 7.8 | 5 | 516.8 | 安山岩 (奥羽) | 欠損 | 等長左面磨打? 残→残・磨打痕 | |
| 7 | RA014E1層Q1 | 礫石片? | 10.2 | 6.1 | 5 | 476.9 | 安山岩 (奥羽) | 欠損 | 等長右面下磨打痕? | |
| 8 | RA014E1層Q1 | 礫石片? | 10.7 | 7 | 5.9 | 434.3 | 安山岩 (奥羽) | | 縁辺磨打? 磨打痕? | |
| 9 | RA013カマド跡産内 | 礫石 | 13.7 | 9.2 | 9.6 | 1264.7 | アズライト (奥羽) | | | 36区 |
| 10 | RA013E1層カマド・カマド跡? | 礫石 | 49.4 | (8.5) | 5.25 | 303 | 安山岩 (奥羽) | 破片 | 磨打・裏面は磨? | 36区 |
| 11 | RA013E1層カマド跡下部No.8, 9の境 | 礫石 | (21.5) | 18.1 | 12.2 | 4600 | 安山岩 (奥羽) | 欠損 | | 36区 |
| 12 | RA013E1層カマド跡下部・1層? | 礫石 | 11.4 | 8.9 | 9.4 | 597 | 安山岩 (奥羽) | 破片 | 等長左面小破面 | |
| 13 | RA013E1層Q2カマド跡 | 礫石? | 14 | 14.3 | 4.7 | 907.7 | 砂岩 (奥羽) | 破片 | 等長左面が磨面?、欠損? てる | |
| 14 | RA013E1層Q2? | 礫石 | 13.6 | 11.8 | 7.1 | 572.5 | 安山岩 (奥羽) | 破片 | 磨打・等長左面小破面 | |
| 16 | RA014E1層No.3 | 礫石 | 15.9 | 14.9 | 11.2 | 1328.5 | 安山岩 (奥羽) | 欠損 | 磨打 | 37区 |

写真図版28 石器 (1) (1はS=1/2 他はS=1/4)



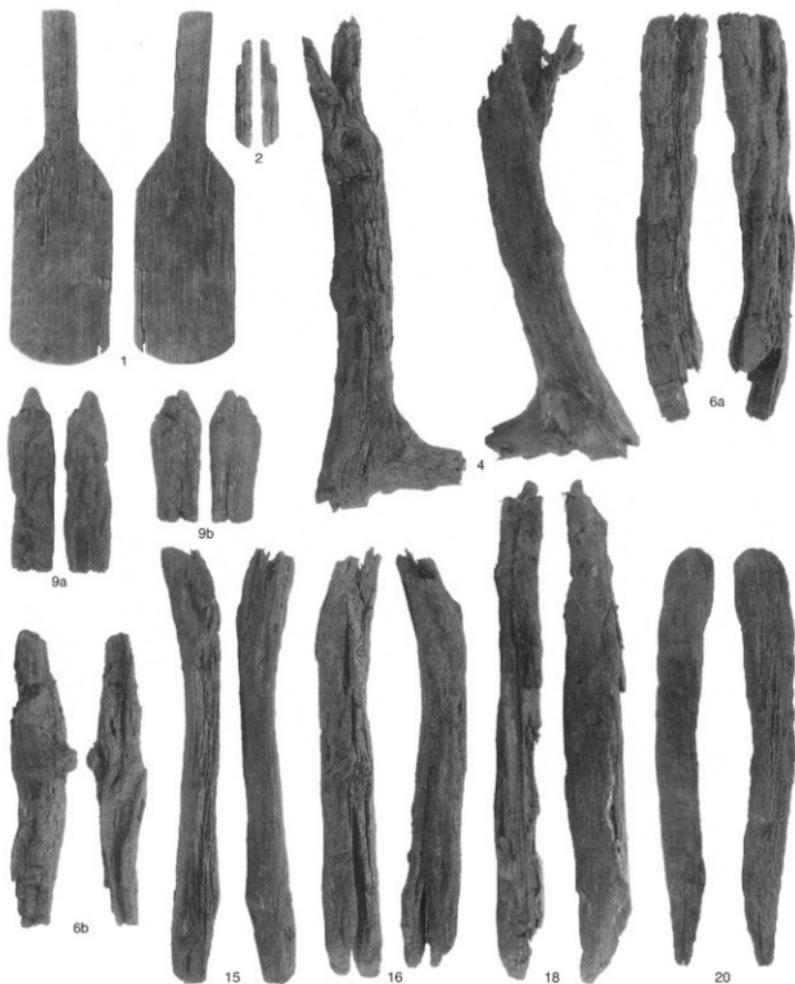
| No. | 出土地点・層位 | 器種 | 最大計測値 (cm) | | | 重量 (g) | 材質 (鑑定) | 保存状況 | 備考 | 図の表紙 |
|-----|------------------|-----|------------|--------|------|--------|------------|------|-----------------|------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 15 | RA013住居南側 (同層あり) | 燧石? | 25.5 | 29.95 | 6.55 | 5335.5 | 安山岩 (燧岩) | 欠損 | 石種? | 37図 |
| 17 | RA014住居東カマド基石内 | 燧石 | 17.4 | 14.2 | 6.4 | 2439.6 | デイサイト (燧岩) | 欠損 | 全面スチ付着 | 37図 |
| 18 | RA014住居東カマド基石内 | 燧石 | (15.7) | 11.3 | 4.6 | 1145.1 | 安山岩 (燧岩) | 欠損 | | 37図 |
| 19 | RA014住居カマド積層石 | 燧石 | 12.8 | 10 | 5.6 | 791.1 | デイサイト (燧岩) | 欠損 | 写真左面破面一断面でみる | |
| 20 | RA014住居カマド積層石 | 燧石 | 14 | 9.2 | 5.2 | 761.2 | デイサイト (燧岩) | 欠損 | 写真左面破面→不手際 | |
| 21 | RA014住居カマド積層石 | 燧石 | 15.2 | 4.5 | 3.5 | 376.3 | デイサイト (燧岩) | 欠損 | 写真左面が破面→凹心が不明瞭 | |
| 22 | RA014住居カマド積層石 | 燧石 | 14.8 | 10.7 | 6.3 | 1244.4 | 頁岩 (燧岩) | 欠損 | 破面はこもりしない (左面?) | |
| 23 | RA014住居カマド積層石 | 燧石? | 14.4 | 11.5 | 8.4 | 1603.2 | 頁岩 (燧岩) | 欠損 | | |
| 24 | RA014住居カマド積層石 | 燧石 | 12.2 | 6.4 | 6 | 385.2 | デイサイト (燧岩) | 破片 | 写真左面破面? スチ付着? | |
| 25 | RA014住居Q1 | 燧石 | (20.5) | (18.9) | 11.2 | 2654.3 | 安山岩 (燧岩) | 欠損 | | 38図 |
| 26 | RA014住居Q1 | 燧石 | 7.6 | 9 | 2.6 | 232.3 | 砂岩 (燧岩) | 破片 | 写真左面が破面 | |
| 27 | RA014住居Q4 | 燧石? | 11.3 | 10.1 | 1.7 | 379.7 | 砂岩 (燧岩) | 欠損 | 写真左面が破面? | |
| 28 | RA014住居Q4 | 燧石 | (12.8) | (4.9) | 4.9 | 227.5 | 安山岩 (燧岩) | 破片 | 燧岩・燧岩? 厚み | 38図 |
| 29 | RA014住居Q4 | 燧石 | 15.9 | 8.6 | 6.7 | 1024 | デイサイト (燧岩) | 欠損 | 写真左面が破面・火受けてる? | |
| 31 | RZ013住居Q4 | 燧石 | 17.8 | 6.7 | 3.45 | 209.6 | 安山岩 (燧岩) | 欠損 | 燧岩 | 38図 |

写真図版29 石器 (2) (S=1/4)



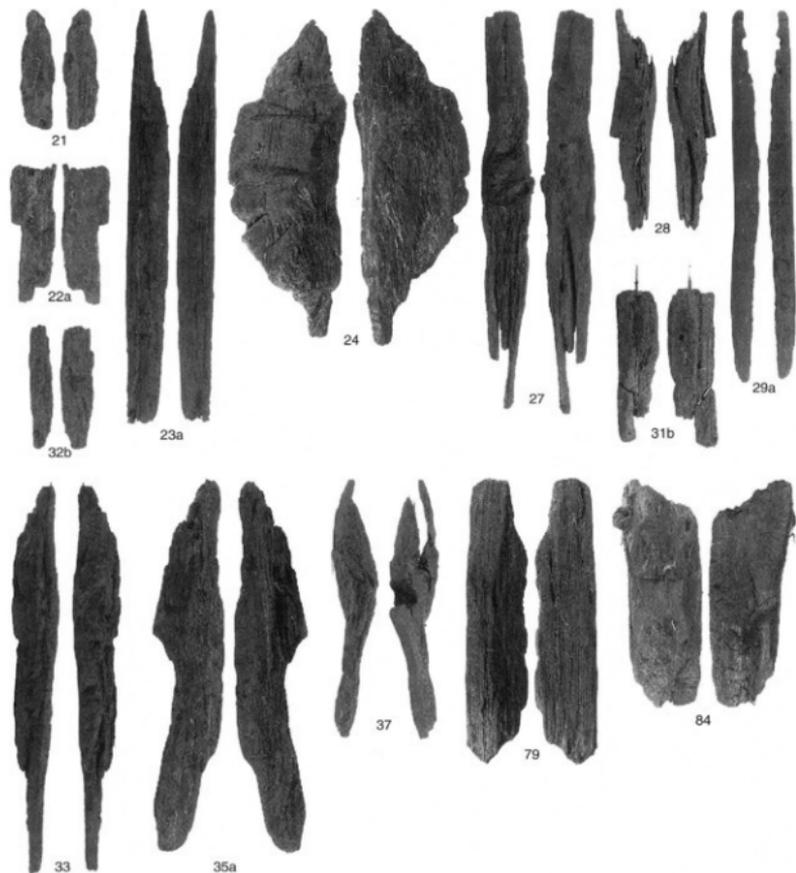
| No. | 出土地点・船位 | 部 位 | 最大径標準 (cm) | | | 重量 (g) | 石 質 (産地) | 保存 状況 | 備 考 | 国の 重要 文化財 |
|-----|---------------------|--------|------------|------|-----|--------|------------|-------|-----------------|-----------|
| | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 30 | R2013特穴群p01の石 (s) | 珧石 | 15.3 | 13.3 | 9.6 | 863.5 | 安山岩 (韓国) | 破片 | 海沿・国上西側壁を横断する四角 | 383号 |
| 32 | RA013H1埋蔵中央石 (図あり) | 珧石 | 15.2 | 15 | 6.9 | 2408.4 | 安山岩 (韓国) | 欠損 | 割棄が破面で行方 | |
| 33 | RA013住居北側南側面1層 (上部) | 珧石? | 17.1 | 12.5 | 9.6 | 1810.3 | テイサイト (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? | |
| 34 | RA013住居1層 | 珧石? | 8.8 | 7.7 | 5.2 | 383.4 | テイサイト (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? 破面が... | |
| 35 | RA014住居北穴群2上面 | 珧石? | 14 | 9.8 | 6.8 | 897.2 | テイサイト (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? | |
| 36 | RA014住居Q3 | 珧石? | 13.6 | 7.2 | 5.1 | 730.1 | 安山岩 (韓国) | 破片 | | |
| 37 | RA014住居カマド埋蔵石 | 珧石? | 9.2 | 4.9 | 3.6 | 245.9 | 安山岩 (韓国) | 欠損 | 写真左面が破面?・金剛スズ付面 | |
| 38 | RA014住居カマド埋蔵石 | 珧石? | 19 | 9.4 | 7.2 | 4200 | テイサイト (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? | |
| 39 | RA014住居カマド埋蔵石 | 珧石? | 12 | 9.4 | 3.9 | 455.7 | 安山岩 (韓国) | 破片 | | |
| 40 | RA014住居Q1 | 珧石? | 11.4 | 7.3 | 3.5 | 341.4 | 海成岩 (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? | |
| 41 | RA014住居Q1 | 珧石? | 11 | 9.6 | 3.1 | 374.8 | 輝岩 (韓国) | 欠損 | 写真左面が破面→折んである | |
| 42 | RA014住居Q1 | 珧石? | 11.7 | 7.7 | 7.8 | 818.7 | 安山岩 (韓国) | 破片 | 写真左面が破面? | |
| 43 | RA014住居Q3 | 珧石? | 14.8 | 11.0 | 7.4 | 1581.3 | 安山岩 (韓国) | 欠損 | 写真左面が破面? | |
| 44 | RA016-15住居検出燧石 | 珧石? | 6.4 | 3.2 | 1.4 | 28.9 | 輝岩 (韓国) | 破片 | 住居に行方 | |
| 45 | R000燧石 | 珧石? | 12.8 | 8.7 | 4.9 | 618 | 輝岩 (韓国) | 破片 | 西側破面?・折んである | |
| 46 | R000燧石 | 珧石? | 6.2 | 3.7 | 2.1 | 19.8 | 安山岩 (韓国) | 破片 | 燧石 | |
| 47 | 平安区中央北・3層 | 珧石? | 10.6 | 6.4 | 5.8 | 296.6 | 安山岩 (韓国) | 破片 | 燧石?→写真左側破面 | |
| 48 | R2012特穴群 群石 のp01 | スズ付燧石 | 14.5 | 5.5 | 2.5 | 501.3 | 安山岩 (韓国) | 破片 | 燧石? | |
| 49 | R000燧石 | 古銅石破片? | 5.8 | 4.3 | 0.4 | 17.8 | 燧岩 (北上) | 破片 | クマシロ燧 | |
| 50 | R2013特穴群p01 | 燧石製石製品 | 4.4 | 4.7 | 0.9 | 22.5 | 燧岩 (韓国) | 破片 | | 383号 |

写真図版30 石器 (3) ・石製品 (5013S-1/2 他はS-1/4)



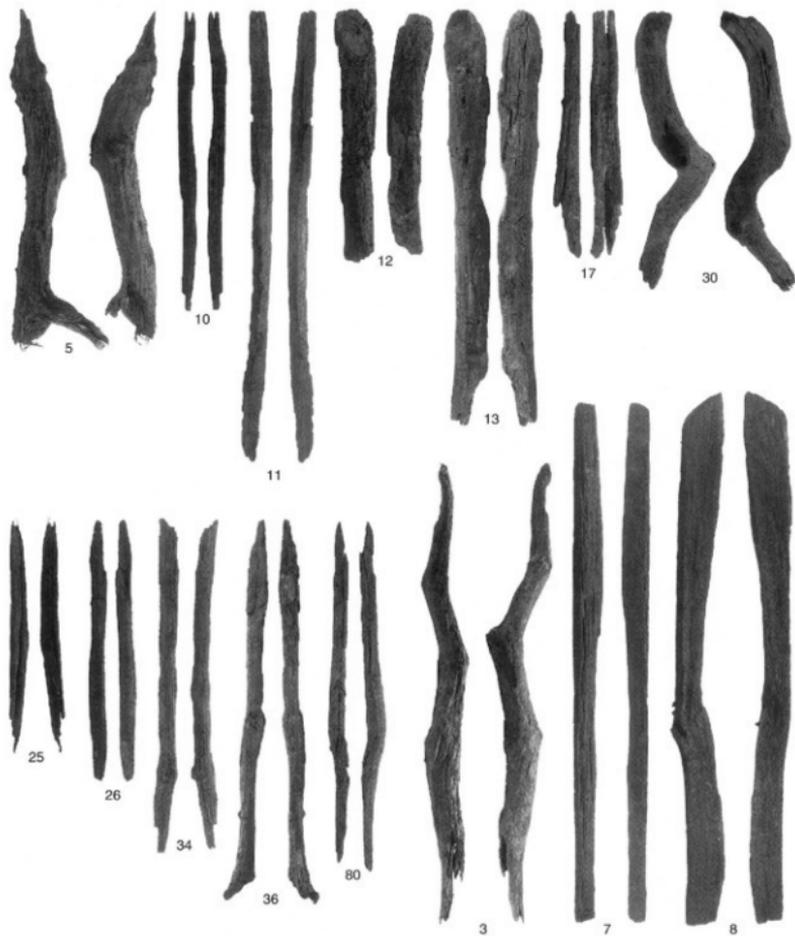
| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 残存状況 | 最大寸法値 (cm) | | | 重量 (kg) | 素材 | 備考 | 図の本文 右側 記載 図版 p.42 |
|-----|--------------------|------|------|------------|-----|-----|---------|------|-----------------------|--------------------------------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | |
| 1 | RG007(底 No.2(底重上)) | 渡状板 | 破断形 | 28.6 | 8.1 | 0.8 | | スギ | 本取り目埋目子・正面右下端欠損→継合 | 増田 |
| 2 | RG007(底 No.3(底)) | 不明 | 破断形 | 8.8 | 1.5 | 0.5 | 3.07g | 文系 | 板状 | 増田 |
| 4 | 西區 262 | (杖?) | 欠損 | 41 | 5 | 5 | 1.2 | タリ | 銅釘あり・断面 | |
| 6a | 西區 264 | (杖?) | 欠損 | 36.5 | 6.8 | 4.4 | 2 | コナラ部 | | |
| 6b | 西區 264 | (杖?) | 欠損 | 27.8 | 5.6 | 4.5 | 0.6 | コナラ部 | | |
| 9a | 西區 267 | (杖?) | 欠損 | 17.5 | 4.3 | 2.6 | 120g | コナラ部 | 表面滑らか | |
| 9b | 西區 267 | (杖?) | 欠損 | 12 | 4.7 | 3 | 60g | タリ | 表面滑らかな・下端部減? (断面に2本?) | |
| 15 | 西區 2612 | 棒杖? | 欠損 | 40 | 4.2 | 3.3 | 200g | コナラ部 | | |
| 16 | 西區 2613 | 棒杖? | 欠損 | 39.5 | 4.7 | 4.6 | 610g | コナラ部 | 加工痕不明 | |
| 18 | 西區 2615 | 棒杖? | 欠損 | 46 | 5.6 | 3.9 | 260g | コナラ部 | 加工痕不明 | |
| 20 | 西區 2616 | 棒杖? | 欠損 | 38.5 | 4.5 | 2.5 | 230g | タリ | 加工痕不明 | |

写真図版31 木製品(1) (S=1/4)



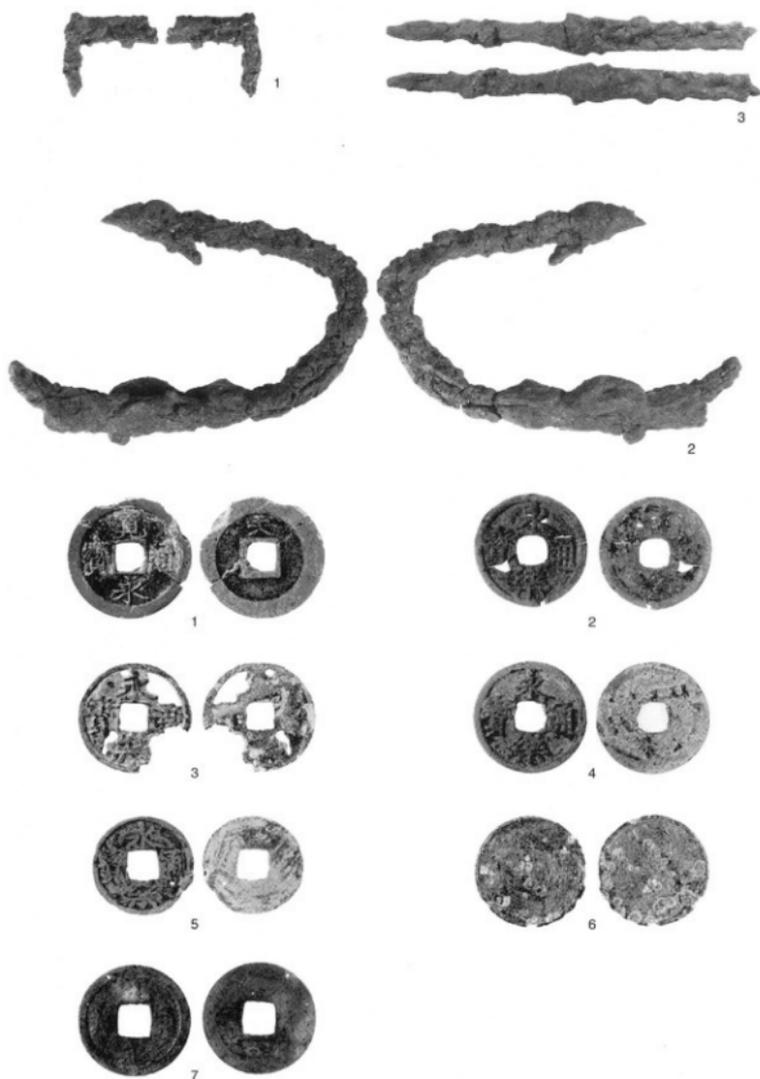
| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 残存状況 | 最大寸法 (cm) | | 重量 (kg) | 樹種 | 備考 | 図の番号 | 本文記載 |
|-----|-----------|------|------|-----------|-----|---------|------|------|----------------------------|------|
| | | | | 長さ | 幅 | | | | | |
| 21 | 南区 本17 | (木片) | 破片 | 11.2 | 3 | 1.6 | コナラ | | 39区 | |
| 22a | 南区 本18 | (木片) | 破片 | 13 | 4.1 | 1.9 | 60g | 鑑定 | | 39区 |
| 23a | 南区 本19 | 棒状? | 欠損 | 37.5 | 3.6 | 2.3 | 190g | コナラ | | |
| 24 | 南区 本20 | (木塊) | 破片 | 5.5 | 8.8 | 5 | 430g | コナラ | ナタ状工具による痕跡切取部 | |
| 27 | 南区 本23 | (棒状) | 欠損 | 26 | 5.4 | 2.7 | 160g | ナリ | | |
| 28 | 南区 本24 | (木片) | 破片 | 22 | 4.5 | 2.7 | 100g | コナラ | | |
| 29a | 南区 本25 | (棒状) | 欠損 | 33.5 | 2.3 | 1.9 | 70g | コナラ | | |
| 31b | 南区 本27 | (棒状) | 破片 | 16.5 | 4.7 | 3.5 | 120g | コナラ | | |
| 32b | 南区 本28 | (木片) | 破片 | 11.8 | 3 | 1.6 | 30g | コナラ | | |
| 33 | 南区 本29 | (木片) | 破片 | 36 | 4.5 | 2.7 | 160g | コナラ | 挟けた棒片 | |
| 35a | 南区 本33 | 釘釘? | 欠損 | 35 | 6.2 | 4.8 | 300g | | (大きめのものに手遣いで写真なし→hを間違えて撮影) | |
| 37 | 南区 本33 | (塊) | 破片 | 24 | 4.6 | 2.7 | 700g | コナラ | | |
| 79 | 南区 本31の下 | 釘釘? | 欠損 | 22.5 | 4.8 | 2.2 | 120g | トネリコ | 片割平らで水苔よく見える | 40区 |
| 84 | 南区 北塚 本平塚 | 棒状? | 破片 | 17.2 | 5.8 | 4.4 | 230g | コナラ | 断面切断面 | 40区 |

写真図版32 木製品(2) (S=1/4)



| No. | 出土地点・層位 | 種類 | 保存状況 | 最大寸法値 (mm) | | | 重量 (kg) | 産地 | 備考 | 実の 有無 | 本文 記載 |
|-----|----------|-------|------|------------|------|------|---------|------|-----------------------------|----------|----------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | | | | | |
| 3 | 溝区 水1 | (杖?) | 欠損 | 190 | 15 | 16 | 19.2 | コナラ節 | 断面・側面なし・削られている部分があるが車取りか不明 | | |
| 5 | 溝区 水3 | (杖?) | 欠損 | 74.5 | 8.5 | 10.5 | 4.3 | タリ | 断面 | | |
| 7 | 溝区 水5 | 杖 | 欠損 | 20.5 | 13.5 | 13 | 15.6 | コナラ節 | 写真上部分取り・表面全体滑らか | | |
| 8 | 溝区 水6 | 杖? | 欠損 | 221 | 17 | 15.5 | 24 | コナラ節 | 下部ナタ等による断面・断面・表面全体滑らか | | |
| 10 | 溝区 水8 | 舟楫状 | 欠損 | 67.7 | 3.8 | 2.5 | 400g | コナラ節 | 表面滑らかだが加工痕不明 | | |
| 11 | 溝区 水9 | 舟楫? | 欠損 | 106.5 | 4.3 | 3.2 | 1.2 | コナラ節 | 直交方向に一字状の切痕あり? 上端平削(使用による?) | | |
| 12 | 溝区 水10 | (杖?) | 欠損 | 57.7 | 8 | 7 | 2.18 | コナラ節 | 裏面のみ切痕・下端ナタ状工具による連続切痕 | | |
| 13 | 溝区 水11 | 舟楫? | 欠損 | 85 | 7.7 | 7.8 | 3 | コナラ節 | 上層削め切痕・下端ナタ状工具による連続切痕 | 39頁 | |
| 17 | 溝区 水14 | 舟楫形? | 欠損 | 53 | 6 | 4.2 | 810g | コナラ節 | 加工痕不明 | | |
| 25 | 溝区 水21 | (棒状) | 欠損 | 94 | 3 | 3 | 360g | コナラ節 | | | |
| 26 | 溝区 水22 | (舟楫状) | 欠損 | 38 | 5 | 3.5 | 540g | コナラ節 | | | |
| 30 | 溝区 水26 | (杖) | 欠損 | 62 | 7 | 7.3 | 2.61 | コナラ節 | 断面・下端付点ナタ状工具による浅い連続切痕 | | |
| 34 | 溝区 水30 | (棒状) | 欠損 | 75 | 4 | 4 | 780g | コナラ節 | | | |
| 36 | 溝区 水34 | 杖? | 欠損 | 75 | 4.6 | 3.2 | 780g | タリ | 写真上層加工痕→欠損して不明だが明らかにした? | 40頁 | |
| 80 | 溝区 水31の下 | (杖?) | 欠損 | 75.3 | 4 | 3.5 | 450g | コナラ節 | | | |

写真図版33 木製品(3) (3, 7, 8はS=1/20 他はS=1/10)



写真図版34 鉄製品 (S-1/2) ・ 銭貨 (S-1/1)

報告書抄録

| | | | | | | | |
|-------------------|---|---------------------------|--|---|--------------------|--|------------------------|
| ふりがな | むかいなかのだていせきだいな・ほちじはっくつちようさほうこくしょ | | | | | | |
| 書名 | 向中野館遺跡第7・8次発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第504集 | | | | | | |
| 編者名 | 金子昭彦 | | | | | | |
| 編集機関 | (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL.019-638 9001 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2007年2月13日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | ° ' " | ° ' " | m ² | |
| 向中野館遺跡 (第7・8次) | 岩手県盛岡市 飯岡新田2地割 124-1ほか | 03201 | LE26-0205 | 39° 40° 42° | 141° 08° 19° | 795 (第7次) 1202 (第8次) | 盛岡南新都市 上地区面整理 事業 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 向中野館遺跡 | 散布地? | 縄文時代 | 袋状土坑1基 | 石器製作時の剥片1点 石器の磨製器類数点 | | | |
| | 集落跡 | 平安時代 (9世紀中～ 10世紀初葉) | 堀状住居跡3棟 土坑6基? 柱穴群(堀状住居跡の 残跡?)1箇所 木の集木箇所(説書欄中) 1 | 土師器・須恵郡人コンテナ (30×40×30cm) 1箱 紙石40点? 石器密着器類数点 鉄製品3(刀子1、不明2)点 木(一部伐採痕等の加工痕) 約116点 瓦虫(ガムシ)、種実(イネ、 アサ、タデ、アカサ、セリ、 ナデシコほか) | | RA013住居南西隅から もみ炭起源のブランド・ オパール検出 RA014、015住居カマド 付遺土坑底から完形の環 →カマド架組跡? (RA014住から、「キ」?) 泥炭層から木の集木箇所 (加工痕少ない) | |
| | 館跡 | 中世 | 倉庫1箇所 堀跡4条 柱穴群2箇所 (土坑1基含む) | 木製品2(縄1)点 銭貨(水雲通宝)4点 種実(イネ、キタ科ほか) | | 木製品はスギ | |
| | 集落跡 | 中～近世 近世 | 柱穴群1箇所 | 銭貨(寛永通宝)2点 | | | |
| | | 古代以降 | 土坑1基 | 円盤状石製品1点 | | | |
| 不明 | | | | | | | |
| 要約 | <p>本調査は三回目となる。今回の調査区は、遺跡の北西端と東端2箇所の3箇所に分かれる。</p> <p>これまで、平安時代(9世紀中～10世紀初葉)の集落跡、中世の館跡が確認されていたが、今回その続きが確認され、特に中世の館跡は、初めて曲輪が確認された。ただし、規模が小さく「作事」跡や遺物が少ないことから、土郭は、東側にあると推測される。</p> <p>また、本遺跡は、北から南へ、湿地、自然堤防状の沖積段丘、湿地、広い沖積段丘と、それぞれ東西に伸びる地形を南北に縦断する形で形成されており、北館と南館に分かれると伝えられていた館跡は南北の段丘上にあるらしいことがわかった。ただし、館跡の年代は、今回も特定できなかった。</p> <p>これまで土器片や石製品が出土していた縄文時代では、貯蔵穴らしい袋状土坑が1基検出された。ただし、遺物は今回も僅かで、集落という狩猟・採集の場と考えた方が良さそうである。</p> | | | | | | |

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書504集
向中野館遺跡第7・8次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成19年2月2日

発行 平成19年2月13日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 有限会社 光文社印刷

〒020-0106 岩手県盛岡市東松園3-12-1

電話 (019) 661-3441(代)

FAX (019) 661-3434

